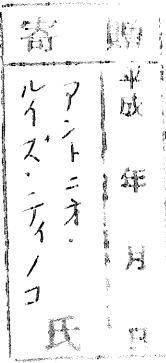


D A
598
1988
④



日本語の「限定」と「 ϕ 」限定辞の用法

課程博士論文

指導教官： 草薙裕教授

アントニオ・ルイズ・ティノコ

学生番号： 835039

筑波大学博士課程文芸・言語研究科

1988年

92005105

目次

	頁
0. 序論	1

第 1 章

1. 「限定」についての諸理論	8
1.1. ポール・ロワイヤル文法	8
1.2. 「定」vs.「不定」という範疇	11
1.3. シャルル・バイイの「現示」と「特性づけ」	13
1.4. Eugenio Coseriu の「限定」と「周辺領域」	17
1.4.1. 「限定」	18
1.4.2. 「周辺領域」(entorno)	26
1.5. Paul Christophersen	37
1.6. Otto Jespersen	40
1.7. Sayo Yotsukura	41
1.8. John A. Hawkins	42
1.9. 「ハ」、「ガ」と「限定」	45

第 2 章

2. 「 ϕ 」という限定辞の提案	48
2.1. 「定」の基準	56
2.2. 語彙の意味関係と「定」	82

2.3.記憶の構造と「限定」	89
2.3.1.記憶モデル	89
2.3.2.M O P s のモデル	93
2.3.3.「 ϕ 」限定辞と名詞の分類	102
2.3.4.名詞の「限定」と動詞の意味的な特徴	112
2.4.「 ϕ 」限定辞と記憶の構造	114
2.5.記憶と「定」か「不定」かの推論	126
3.結論	129
あとがき	131
文献	132

「日本語の『限定』と『 ϕ 』限定辞の用法」

課程博士論文

アントニオ・ルイズ・ティノコ

文芸・言語研究科5年次

0. 序論

人間は、瞬間、瞬間さまざまな経験を繰り返しながら生活しており、その経験には制限がない。そして、厳密に言えば各々の経験は皆異なる。まったく同じ2つの経験はありえない。しかし、それらの経験を整理するには、他の動物にみられない、「言語」と呼ばれる記号の体系がある。

人間には「概念形成」(concept formation) (Kendler (1961)、Pikas (1966)を参照)という能力があり、自分の生活に一番関心を持っている物事を知覚し、分類し、その抽象化したものを名付ける。そして名付けたものは記号となり、その記号の集まりは体系的になり、私たちが日常使っている言語となる。しかし、人間には記憶力など、あらゆる物理的・生理的な制限があり、無限の経験・物事を1つ1つ(異なったラベルで)全て名付けることは出来ない。つまり、無限の言語記号を作るのは無理であり、非経済的である。そこで効率を上げるために同じ記号を異なった状況でも使用しなければならないわけである。例えば、

- (1) 来年、2つの新しい大学が創設される。
- (2) 今日は、大学へ行かなかった。
- (3) 3つぐらいの大学を受験しないと危ない。

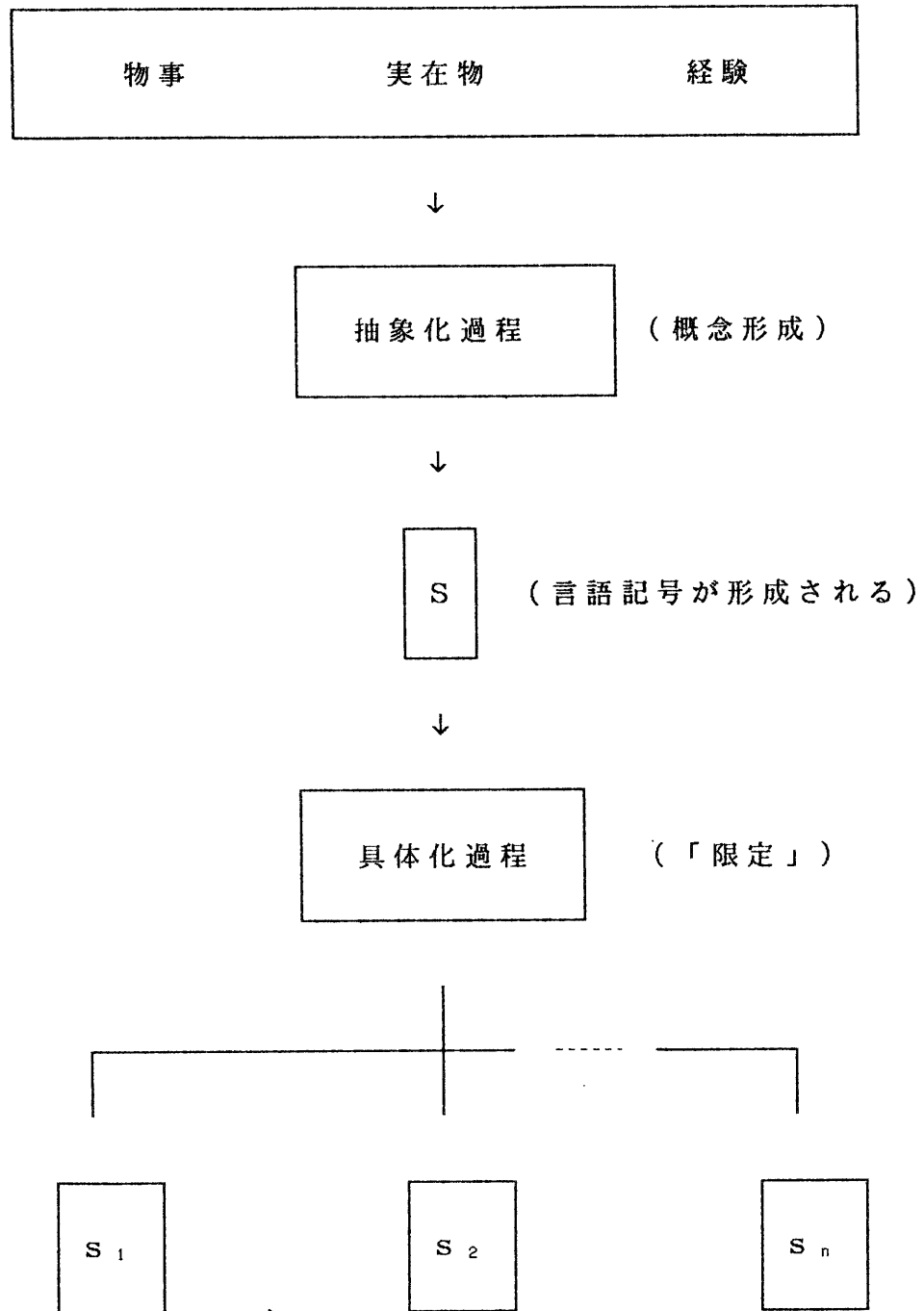
例文の(1)～(3)のように、「大学」という言語記号が異なった状況で使用されている。具体的にはそれぞれの例文の「大学」の意味が違おうだろうし、数なども具体的なレベルで違おうだろう。(1)では聞き手は、大学の創設の情報以外、大学の名前、場所、専門、などは分からないだろう。(2)の場合は、聞き手が話し手をよく知っていれば、どういう具体的な大学を指しているかは分かる。もちろん、例文(3)のように具体的な大学を指さないこともありうる。つまり、「大学」という具体的な言語記号はあらゆる状況で使われ、あらゆる存在物(entities)を現わすことができる。それぞれの状況のために改めて新しい言語記号を作る必要はない。非常に限られた重要なもの以外(例えば、太陽、東京のような固有名詞)1つの存在物に1つのラベル(言語記号)を作るのは不可能であり、たとえ作ることができたとしてもそのように人工的に作られた言語は非常に扱いにくいにちがいない。

人間には「概念形成」という能力があるために、出来上がった「記号の体系」は生活をするのに極めて便利である。ただし、このように出来上がった「どんな状況でも使ってもいい記号」を、具体的な「範囲」(scope)を持たせるようなメカニズムがなければ、その記号の体系は利用不可能になる。

つまり、言語の単位になっている記号を形成する能力と共に、その記号に具体的な意味の範囲を決めるメカニズムがなければその言語を効率よく利用することはできない。1つの言語記号は無数の実在物を指すことができるので、具体的な発話の中で使われた言語記号と具体的な実在物の関係をはっきりさせるのが、そのメカニズムの一番重要な働きである。

言語学の歴史(Krámský(1972)を参照)を見ると、このメカニズムについてはあらゆる定義があるが、現在は一般的に「限定」(英、determination; 仏、détermination; スペイン語、determinación)と呼ばれている。

この「限定」というメカニズムの過程は図1. で表わせる。



(S₁、 S₂、 … S_n は、具体的な範囲をもつ)

図 1 .

例えば、いくつかの「大学」を経験し、「抽象化過程」により、意味のある具体的な概念（「大学」）が形成され、「大学」という言語記号（S）で名付けられる。そして、そのSという言語記号を「限定」という具体化過程により s_1 、 s_2 、 \dots s_n のような具体的な範囲（scope）をもたらすことができる。

この具体化過程（「限定」）は、静的な名詞句に限らない。性質が異なっても動的な動詞にも具体化過程がある。例えば、

（４） 太郎は、一生懸命に働いた。

（４）の「一生懸命に」という副詞句は「働いた」という動詞に、より具体的な内容を持たせる。動詞の相、時制なども、その動詞により具体的な内容を持たせる。例えば、（４）の場合は過去であることも、「働く」という記号の意味の範囲を狭める。

このように、具体化過程（限定）のメカニズムは言語のはたらきにとって、伝達機能としての面が極めて重要である。

一般的に「限定」の問題は、名詞句の限定のメカニズムを言うことが多い。名詞には「意味」のほかに「範囲」（英、scope；仏、étendue）がある。その名詞の範囲を決定するのはその名詞を「限定」ということである。例えば、「犬」という普通名詞ならば、「この犬」、「私の犬」、「昨日山田さんの家を見た犬」、などのような具体的な犬のほかに「犬というもの」など総称的な使い方もありうる。一般的に名詞は、形容詞などのほかに「この～」、「私の～」、「～というもの」などという限定辞で限定されることが多い。

「限定」の問題は、特に哲学者（Ayer (1936)、Black (1949)、Bühler (1965)、を参照）や論理学者（Zierer (1972)、Hintikka (1973)を参照）により扱われてきたが、言語学者は、冠詞、数量詞などのような具体

的な限定辞の具体的な用法以外は、「限定」そのものの理論はほとんど扱っていないのが現状である。特に形式論理学の規則が応用され、自然言語 (natural language) のあらゆる現象を説明するのは、失敗に終わっている。形式論理学の記述の方法が便利であっても、自然言語は完全に形式論理学の規則に従わず、特に「限定」の理論に基づき、具体的な限定辞の働きを予想するという(本来、いかなる理論の役割)意味では形式論理学はほとんど役立たない。例えば、

(5) きれいな花が枯れた。

(5)では「きれいな」の部分は少なくとも2通りの解釈が考えられる。「きれいな花しか枯れなかった」という制限的な用法と「枯れた花はきれいだった」という意味を含む非制限的な用法である。もし、それぞれを形式論理学の記述を利用して表わすならば次のようになる。

$\forall (x) [F(x) \wedge G(x)]$ (非制限用法)

$\forall (x) [F(x) \leftrightarrow G(x)]$ (制限用法)

つまり、花(x)があり、その花が2つの特徴を持っている：

1) $F(x)$ (花はきれいである)

2) $G(x)$ (花は枯れた)。

そして、非制限用法の記述を読むと「すべてのきれいな花が枯れた」ということになる。それに対して、制限用法では、その花(x)が、その2つの特徴($F(x)$ と $G(x)$)を持っているということではなく、 $G(x)$ (花が枯れた)という特徴は $F(x)$ (花はきれいである)という特

徴から切り放せない。つまり、制限用法の記述を読むと「すべてのきれいな花は枯れた」ということになる。

確かにそれぞれの解釈を曖昧なく記述することは形式論理学の特徴であるが、問題は、どういう場合に制限用法に当たるか、どういう場合が非制限用法に当たるかということ、前もって分別することである。すなわち、ある理論の基準に基づき、それぞれの場合を予想することができないことが形式論理学の限界である。

文の解釈は、形式だけに依存しない。意味論的な要素や語用論的な要素もある。特に第2章で説明するように「限定」の解釈の場合もそうである。

「限定」の言語学的な研究は、特に欧米語の冠詞 (article) の用法が中心になっている。冠詞のはたらきを説明するために作られた「限定」(特に「定」と「不定」という範疇) の理論 (Krámský (1972)、Bally (1965)、Christophersen (1939)、Coseriu (1955-56)、Grasserie (1896)、Hawkins (1978)、Yotsukura, (1970) を参照) が多いので、冠詞のない言語の「限定」上のメカニズムを研究するには参考にはなるものの、同じ基準を利用することは不可能である。

冠詞がないと言われている日本語の場合は、それがどのように行われているかを、本稿で研究する。日本語の指示詞、「ハ」と「ガ」の研究は多くあるが、筆者は特に修飾されていない名詞(「 ϕ 限定辞」と呼ぶ)の働きがまだ明らかではないので、そのはたらきを中心テーマにする。ヨーロッパの言語とかなりの相違がみられるが、普遍的な面もあると考えており、日本語の「限定」の問題点の研究により、「限定」の理論へ貢献するところがあるのではないかと筆者は思う。そして、このメカニズムが解明されれば、他言語の「限定」のメカニズムとの比較の基盤になり、日本人にとって極めて困難な外国語の「冠詞」の習得にも、あらゆる応用も可能であろう。

そのために、いくつかの「限定」の理論の短所と長所を検討し、「限定」

（特に「定」と「不定」という範疇）の概念自体を考え直し、他言語の同類の現象を説明するのに役立つ、より普遍的な理論を提案する。また具体的に日本語の「 ϕ 」という限定辞のはたらきを研究する。

そして、伝統的な言語学では一般的に扱われない心理学の理論（特に記憶のメカニズム）を利用し、「限定」のメカニズムとどのような関わりがあるかを広い視野で考える。

第 1 章

1. 「限定」についての諸理論

「限定」の歴史は冠詞の歴史で始まる。アレキサンドリア学派のDyony-sius Thraxがはじめて冠詞を8つの品詞の中の1つと見なした。それからポール・ロワイヤル文法が現れるまで「限定」の本格的な研究は行われなかったようである。次に、「限定」の理論に大きく貢献した学者の説の特徴を見ながら、その短所と長所を検討する。また、どの説も「限定」を分析し、分類するものの、普遍的な「定」と「不定」の基準がないことに注目したい。筆者が「定」という範疇の基準は第2章で提案する。

1. 1. ポール・ロワイヤル文法

「限定」の問題についてポール・ロワイヤル文法 (Bailly (1968) を参照) では、次のように論じている。

『普通名詞の中に2つのことがらが識別できることを思い起こす必要がある。すなわち、固定した意味(時によりこの意味が変化するの
は、曖昧さとか隠喩とかによるごとく偶然による)と、名詞がその種
全体として把えられるか、あるいは明・不明な部分として把えられる
か、に応じて変化するこの意味の広がり (estendüe) とである。

普通名詞が、一般的に把えられているか、個別体として把えられて
いるか、またもし個別に把えられている場合にはその個別体が明確な
ものか、を示すような何ものも存在しない場合に、我々がこの普通名

詞は限定されていないと言えるのは、この「意味の広がり」との比較によってである。これに反して、名詞の限定を示す何ものかがある場合には名詞は限定されているという。』

ポール・ロワイヤル文法では、具体的な限定辞を示さず、「何ものか」により限定されると言う。その「何ものか」の性質についてもふれない。「限定」の概念は個別（individual）と種（genus）と対立的になっている。この対立は筆者にとって非常に重要な点である。そしてその対立の結果は、「『意味の広がり』との比較によって」限定されるかどうか決まるようである。

確かに、「限定」のメカニズムは統語論的な部分もあるが、意味論の問題でもある。そして、「『意味の広がり』との比較」というのは語用論の問題でもある。また、ポール・ロワイヤル文法で言われている「『限定』されていない」普通名詞もありうるが、筆者が後に論じるように、どの名詞も必ず「限定」されていなければならない、というポール・ロワイヤル文法との基本的な相違がある。それは「限定」の概念が違うからである。ポール・ロワイヤル文法は、特にフランス語について論じているが、次に挙げる①から⑨までの項目の内、⑧以外は普遍的と考えられ、日本語についても同じことが言える。

『①固有名詞は特殊な1事物を表わす故、それ自体限定を受けることは確かである。．．．

②呼格もまたそれ自体の性質により限定される。．．．

③ Ce, quelque, plusieurs（この、なんらかの、若干の）、deux, trois（2, 3．．．）などの類の名称、tout, nul, aucun（全て、どれも．．．ない）なども冠詞と同じく（名詞に）限定を与える。これはあまりに明白であるからこれ以上説明しない。

④否定の節においては、否定が置かれた語は、その否定自体によって、その語の一般的意味に解せられるよう規定される。否定は全てを取り除くことがその特性だからである。．．．

⑤肯定節の中において、主語が述語を引き寄せ、つまりこれを限定するのは、論理上のごく自然の規則である。．．．

⑥ *sorte, espèce, genre* (種類) とこれに類した語は次に続く語を限定する。．．．

⑦ラテン語の *ut* の意味の小辞 *en, vivit ut Rex, il vit en Roy* (彼は王のように暮らす) は、*comme un Roy, en la manière d'un Roy* (王のように、王のような仕方) と同価であって、それ自体の中に冠詞を含んでいる。．．．

⑧ (*de, des*, とせずに) 複数とともに単独で使われる *de* は、冠詞の章で示したように、しばしば冠詞 *un* の複数形 *des* の代わりである。．．．

⑨ (いくつかの特定の表現は、その性質により限定され、冠詞が要らない) 』

また、デュクロの注釈では、*tout* (全て)、*chaque* (各々)、*quelque* (なんらかの)、*ce* (この)、*mon* (私の)、*ton* (あなたの)、*son* (彼の)、*un* (1)、*deux* (2)、*trois* (3) などのような *prépositif* (前置限定辞) を挙げている。ただ、名詞を限定するという説明しかない。

ポール・ロワイヤル文法では、「限定」によって名詞の意味がはっきりするというのはたらきを論じている。しかしこれ以上の理論がないので、日本語の「～というもの」のような後位置限定辞など統語論的な問題や無冠詞の名詞句の限定には応用できない。

ポール・ロワイヤル文法の「限定」についての基準はかなり語用論的で、

「明・不明な部分として扱えられるか」のように曖昧な部分もあり、その曖昧さはフランス語の具体的な限定辞で「限定」の概念の説明を補っている。しかし、具体的なフランス語の限定辞を使っているにもかかわらず、ポール・ロワイヤル文法では「限定」の概念が具体的な言語的道具と結びついていないということは筆者にとって興味深い。

1. 2. 「定」vs. 「不定」という範疇

Krámský (1972) は、「定」(determinedness) についての monograph (専攻論文) の中で次のように述べている。

"By the term "determinedness" we understand the fact that nouns are classified according to whether the content expressed by the noun is clear and identifiable in a concrete way or not. In topical utterances this category is realized in the positive case by "determinedness", in the negative case by "indeterminedness"."

Krámský は、モノグラフで「定」vs. 「不定」という範疇の本質について多くの説を集め、次のような結論に至った。

1. 「定」vs. 「不定」という範疇は、人間の思考の固有素性である個別(individual)と種(genus)という対立概念に基づく。

2. 「定」vs. 「不定」という範疇は、言語形式的に表わす必要がない。

3. 「定」vs. 「不定」という範疇は、その文の全体的な機能(

functional sentence perspective) と関係する。

Krámskýはこの結論を出すのには特に、Raoul de la Grasserie (1896)、Sørensen (1958)、Mathesius (1961)、Il'jiš (1948)、Firbas (1966) などの研究を参考にした。

「限定」の問題について、現在まで少なくとも上記のこの3点については、一般的に認められている。

Krámskýは、上記の結論に至ったが、残念ながら「定」vs.「不定」という範疇についての定義またははっきりした基準を出していない。

1番目の点は、人間の思考を取り上げたりするので心理的な面を言うが、言語学的な基準ではない。

2番目の結論から言えば、「定」vs.「不定」という範疇は言語形式に依存しない。例えば、英語の例を見ても、不定冠詞(例: A lion is an animal)は、「定」として扱われている総称的な用法もある。

そして、3番目の結論は文法というより、語用論的な問題であると示唆している。

つまり、「定」vs.「不定」という範疇は具体的な言語形式がある場合は、その言語の冠詞、指示詞、数量詞などの用法を言語学的に分析することはできるが、言語形式(つまり、有形の限定辞)がない場合は言語学的な分析は無理であろう。また、用法の分類ができて、どのような基準に従って分類するかは明かではない。

そのために、「定」vs.「不定」という範疇の普遍的、言語学的な基準はない。Krámskýの論理では、もし「定」vs.「不定」という範疇が具体的な限定辞に依存しないならば、その区別も言語学的に不可能である、という結論になる。もし、本稿の第2章のように基準を作るならば、それは心理的な要素や語用論的な要素を利用しなければならないのである。

また、これらの3つの結論はもっともであるが、曖昧なので筆者はより

はっきりした基準を追求する。特に日本語のように修飾されていない名詞句（「 ϕ 」という限定辞の場合）のはたらきを説明するのには、「定」についての基準を作らなければならない。それは、定冠詞のある言語の場合は、定冠詞を利用するという前提で、その定冠詞の用法の例を出しながら「定」について論じることができるが、日本語の場合はそういう冠詞がなく、特に「 ϕ 」という限定辞の場合は「定」の場合と「不定」の場合があるので、「定」の基準なしでは日本語の名詞句について「定」か「不定」かを判断することは不可能である。たとえある日本語の名詞句が「定」か「不定」かを判断するために、定冠詞、不定冠詞のある言語の翻訳の結果を利用しても、それは明かに多くの誤解が生じるので、日本語の「定」のメカニズムを研究する過程の中で参考にはなっても、決してよい基準にはならない。

1. 3. シャルル・バイイの「現示」と「特性づけ」

シャルル・バイイ（1965）の理論では「現示」（actualisation）と「特性づけ」（caractérisation）という、「限定」に関する重要な区別がある。

『概念は、文の辞項となるためには、現示されねばならぬ。概念を現示する（actualiser）とは、それを話し手の〈現実化〉表象と同定することである。じじつ概念はそれじたいでは純然たる精神の創作物であり、陰在的である；それは類の概念（実物、過程または性質）をあらわす。ところが、現実は類たるものをしらない；それは個別者しか呈しないのである……つまり個別化されねばならぬ。ところで概念を個別化する（individualiser）とは、同時にそれを定位し（lo-

caliser) (I)、数量化する (quantifier) (II) ことである……
…

現示の機構において言語にぞくするものは、〈現示辞〉 (actualisateur) である、つまり言 [parole] へと変形するために、別言すれば陰在的概念を、現実においてそれらに対応する物や過程にくむすびつける) ために、陰在を顕在にかえるために、その用いるさまざまの手順である：それゆえ現示辞は文法的つながりである。……文の事項もまた、ひとつには内顯的な、ひとつには外顯的な手順によって現示される。……〈現示〉は、それが場面または文脈からのみ推論されるときは、〈総体的に内顯的である。〉……陰在語を定位する事項が陰在語の定辞の資格で〈同一の総合のなかに〉公然あらわれているときは、〈現示は外顯的である。〉……外顯的現示は特性づけをきっぱり区別される、これは陰在的概念を特殊化するものである。この区別を決定する基準は次のようなものである：

- 1) 〈陰在的概念は陰在語 (その特性辞) によって特性づけられ、顕在語 (その現示辞) と見合って現示される。〉
- 2) そのけっか、〈他の陰在語を特性づける陰在語はそれじしん顕在的限定をうけることはできない〉ことになる。……
- 3) 〈特性づけられた語はつねに (文法的に) 単純語に約元可能であるが、現示された語はぜったいに不可能だ〉。じじつ特性づけられた語はある類のうちのある種をしめす。』

チャールル・バイイは、フランス語を中心にした「現示」について論じたが、普遍的な要素がみられる。

まず、第1に重要な点は、孤立した語は現実的なものではない。必ず、その語は「言の連鎖」 (chaîne parlée) の中でなければならないということである。

第2は、定位と数量化は「現示」過程において重要な操作である。

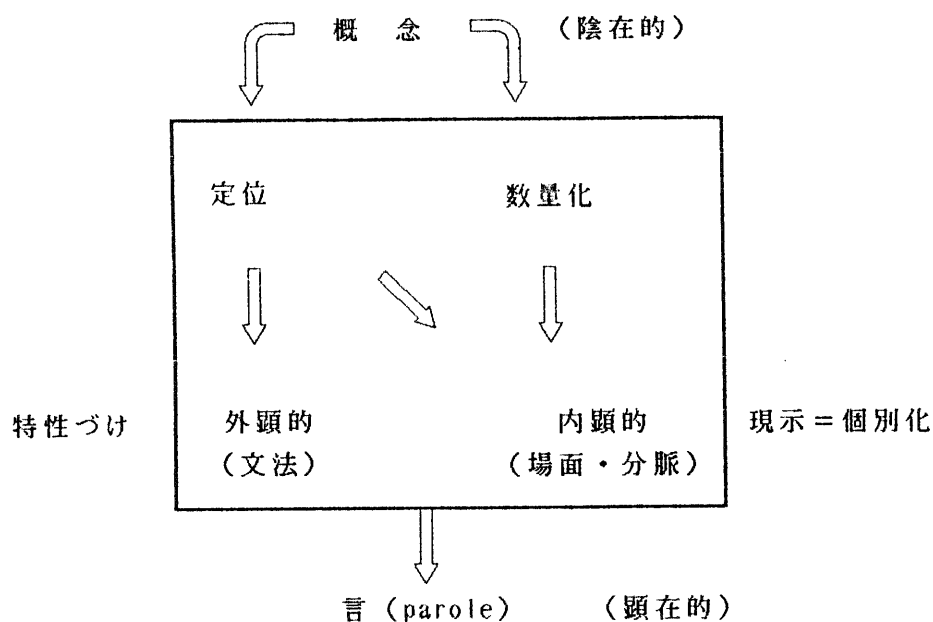


図 2

日本語にしても、フランス語の "la maison que je vois" (私が見ている家) は、話し手の位置により、一定の位置を占めるので、現実的空間の1部に定位されるわけである。数量化の場合は、どの言語においても現実を表す重要な手段である。もちろん、言語によりその具体的なはたらきはだいぶ違う。例えば、日本語の数量詞の前位置と後位置は違ったはたらきをするようである。この特徴はすべての言語の数量詞にあるとは言えない。

(6) 2冊の本を買った。

(7) 本を2冊買った。

(6)と(7)の前位置と後位置のそれぞれの意味の違いは認めにくいだろうが、

- (8) 500gr.の肉を買った。
- (9) 肉を500gr.買った。
- (10) 500gr.の肉のパックを買った。
- (11a) * 肉を500gr.のパックを買った。
- (11b) 肉を500gr.のパックで買った。

(8)と(9)の前位置と後位置のそれぞれの意味は状況によって同じ意味で捉えられるだろうが、後位置の(9)の場合は合計で500gr.の肉を買ったとしか考えられないが、前位置の(8)の場合は、そのほかに(10)のような意味でも使える。しかし、(11a)の文は非文法的であるし、(10)のように「のパック」の部分は(8)で省略されていると考えられるが(9)の場合はその「のパック」の部分は省略されているとは考えられない。また、(11a)の「を」を(11b)のように「で」にすると文法的な表現になる。

また、前位置と後位置の「特定」と「不特定」の解釈の相違もある。例えば、

- (12) 1人のお医者さんを探している。
- (13) お医者さんを1人探している。
- (14) 1人のお医者さんを募集している。
- (15) お医者さんを1人募集している。

(12)の前位置の場合、医者は「特定」でも「不特定」でも考えられる。それに対して、後位置の(13)の場合は「不特定」の医者しか考えられな

い。しかし、「特定」か「不特定」かの判断は位置の問題だけではなく、第2章で述べるように、その動詞の意味的な特徴も関わっている。例えば、「募集する」という動詞は「不特定」の意味でしか使えないので、「不特定」を表わす後位置の(15)のような文は普通であろうが、「特定」の解釈の可能性のありうる前位置の場合は、(14)のような文は妙な感じがするので、その使い方に制限がある。

従って、明らかに前位置と後位置のそれぞれのはたらきは限定の観点から言えばかなり異なる点がある。

シャルル・バイイにとって「現示」はラングからパロールへの過程であり、その「現示辞」は文法的な結びつけである。この理論をさらに発展したのはコセリウである。

1. 4. Eugenio Coseriu の「限定」と「周辺領域」

コセリウ(1955-56)は、『限定と周辺領域 — 話の言語の2つの問題』の論文で「限定」の理論について細かく論じている。

コセリウはシャルル・バイイが「限定」の問題についてはある程度広範囲に扱ったということを認めながら、「現示」と「特徴づけ」の重要な分類は結果的に不十分で、名詞の「限定」は少なくとも4つのタイプの操作を包含すると述べている。コセリウはバイイと同じように「限定」はパロールの問題であることに同意見である。ただし、「限定」の問題を、バイイと違い、「言語活動」(hablar)の観点から説明しなければならないとし、そのために「話の文法」(gramática del hablar)を提案している。その「話の文法」の本来の対象は言語活動の一般的な技術であろう。そして、それは特殊な機能を認識し記述すること、言語的(verbal)でもあり、言語外的(extraverbal)でもありうるその可能な手段を示すことである。

従って、その「言語活動の文法」はラングの範囲より広く、（活動物まね、ジェスチャー、振舞いのような）非言語的な補足的な活動や沈黙、すなわち口頭による活動の意図的中止をも利用すると述べている。

コセリウにとってその「話の文法」は非常に複雑な操作を含むので「名詞的限定」に限って論じた。また、コセリウにとっては、「限定」は「話の文法」の性質のために語用論的な問題でもある。

1. 4. 1. 「限定」

コセリウにとって「限定」はこの言語活動の文法に属する。コセリウは「限定」を次のように定義する：

"Corresponden al ámbito de la "determinación" todas aquellas operaciones que, en el lenguaje como actividad, se cumplen para decir algo acerca de algo con los signos de la lengua, o sea, para "actualizar" y dirigir hacia la realidad concreta un signo "virtual" (perteneciente a la "lengua", o para delimitar, precisar y orientar la referencia de un signo (virtual o actual)."

『「限定」の領域に含まれるのは、活動としての言語において、言語の記号でもってあることについてあることを言うために、すなわち、「潜勢的な」記号（「言語」に属する）を「現示化」し具体的な現実に向けるためあるいは記号（潜勢的あるいは現実的）の指示を「限定」し、方向づけるために行われるすべての操作である。』

この定義は図3のように表すことができる。

言語記号



言語活動文法

手段	→	言語的	非言語的
作用	→	限定	周辺領域
道具	→	限定辞	身振りなど



具体的な言語活動

図 3

つまり、潜勢的な言語記号の「限定」と「周辺領域」の全体的な操作で具体的な言語活動になる。

コセリウは「限定」の操作をさらに4つの操作に分ける：「現示化」、「識別」、「局限」と「同定」。

A) 「現示化」

「現示化」(actualización)は、「限定」の操作の中で一番基本的である。コセリウは「現示化」について次のように言う：

"La actualización es la operación mediante la que el significado nominal se transfiere de la "esencia" (identidad) a la "existencia" (ipsidad), y por la cual el nombre de un "ser" (por ej., hombre) se vuelve denotación de un "ente" (por ejemplo, el hombre), de un "existencial" al que la identidad significada se atribuye por el mismo acto de la denotación."

(現示化は名詞的記号内容が「本質」(同定)から「存在」に移行する際の操作であり、その操作によって「実体」の名(例えば「人間」)が「実在体」の表示になる。意味された同定が、表示の行為自体によって帰せられる対象としての「存在物」の表示になる)

このように、既に知覚したものの名により、現在知覚しているものの表示ができる。

理論的には、「現示化」の道具は「現示辞」であるが、コセリウによると、ラテン語や大部分のスラヴ語のように、「現示辞」のない言語の「現示化」は「周辺領域」(entorno)により行われる。一般的に、その「現示辞」は「定冠詞」と呼ばれる。

日本語にはスラヴ語のように冠詞がないという特徴がしばしば挙げられる。しかし、日本語の修飾されない名詞句は、限定上のはたらきを観察すると、2章で述べるように、いくつかのはっきりした特徴がある。そのために、ヨーロッパの言語の「 ϕ 冠詞」と同じように、形態的に日本語の「 ϕ 」という無形の限定辞が考えられる。もちろん、ヨーロッパの言語の「 ϕ 冠詞」と同じようなはたらきではない。また、日本語の1部の名詞句しか限定辞に限定されないというのは限定上の理論として好ましくないし、矛盾でもある。コセリウの「限定」の理論としては、すべての名詞句が「限定」されていなければならないので、具体的な有形の限定辞に限定されていない名詞句が無形の「 ϕ 限定辞」により限定されると扱った方がより

簡潔な理論になるわけである。問題は、「冠詞のない日本語の名詞句の『限定』が『周辺領域』によって限定される」と曖昧に扱うよりも、「 ϕ 限定辞」という無形の限定辞の限定上の特徴を分析した方が望ましい。そして、日本語の「 ϕ 限定辞」の提案と共にその特徴の分析は、本研究の1つの大きな目的でもある。

B) 「識別」

コセリウによると「単純な現示化が意味するものは有意的な意図の『客観的な』（概念ならざる）意味 — 潜勢的な指示を現実的な指示に変えること — にほかならない」ので、さらに限定する必要がある。その操作を識別と呼んで、次のように定義している。

"El conjunto de esas operaciones determinativas posteriores a la actualización - que se realizan ya en el plano de la significación "objetiva" y orientan la denotación hacia algún grupo eventual o real de entes particulares, aunque siempre dentro de las posibilidades referenciales de un nombre - constituye lo que aquí se propone llamar discriminación."

『現示化のあとにつづくこれらの限定操作の全体 — それはすでに「客観的な」意味の面において実現され、またつねに名が指示しうる可能性の範囲内においてであるが、特定の実在体の偶発的あるいは現実的な何らかのグループに向けて表示を方向づける — が構成するものの』

識別の操作が具体的、言語的な道具によって行われる時、識別辞 (discriminador) と呼んでいる。それには次の3つのタイプが考えられる。

1) 数量化 (cuantificación) を、さらに「定」(definida) と「不定」(indefinida) に分ける。

(16) 卵を1ダース買った。

(17) たくさんの友達がいる。

(16) の「1ダース」のような場合は「定数量辞」で、(17) の「たくさんの」のような場合は「不定数量辞」とする。

2) 選択 (selección) は、「現実の」そして「外的な」識別である。

さらに、「話し手にとってのみ個別化されたもの」と「話し手にとっても聞き手にとっても個別化されたもの」を区別し、それぞれ「不定」(特定化 particularización) と「定」(個別化 individualización) と呼ぶ。例えば、「某大学の某教授」は、話し手にしか分からない場合がある。

3) 場面 (situación) によって表示された対象が「配置される」。基本的に、「私の～」、「あなたの～」で表わすような「所有の場面」(situación posesiva) と「指示場面」(位置 localización、指示 deixis) である。

C) 「局限」

局限 (delimitación) の操作は概念の1部を制限し、表示された特定物の1局面へ方向づけながら記号の指示的可能性を修正する。さらに、3つの操作に分ける。言語的な道具は「局限辞」と呼びうるが、一般的に語彙的意味を持つ語から構成されるので「名詞の補語」的な部分がある。

- 1) 説明 (explicación) によってその名詞の1局面を強める。例えば、「古都京都」の「古都」の部分は「京都」の「古い都」としての局面を強める。
- 2) 特殊化 (especialización) によって観察される外延的または内包的限界を決める。例えば、「武器としての笑い」、「江戸末期の日本」、「夜半の月」のように、それぞれの1局面の限界を決める。
- 3) 特定化 (especificación) は、範囲をより狭い類に制限する。例えば、「夜行列車」の「夜行」は「列車」の類を制限する。

D) 「同定」

同定 (identificación) は特殊化と形体的な共通点があっても機能的に異なる。この操作は、意味的価値を「物事」に向けることではなく、聞き手を意味的価値に向けるのである。同定は記号を現示化せず、聞き手の「多義語」の誤解を避けるために行われる操作である。例えば、「カミ」という多義語は「カミの毛」、「カミさま」、「一枚のカミ」のような操作によって、それぞれを「髪」、「神」、「紙」の意味に向かせる。また、「化学」の「化」を訓読みにし「バケガク」と言って、「科学」との誤解を避ける。コセリウは名詞句内の操作についてしか論じていないが同定の操作は、名詞句内の操作だけではない。例えば、

(18) パラ園へ写真をトリに行く。

(19) DP屋へ写真をトリに行く。

文全体のはたらきで、(18)では、「トリ」の意味は「撮影をしに」に、

(19) の場合は「受け取りに」という意味に向かせる。

コセリウは、同定を3つのグループに分けた。

- 1) 臨時的 (ocasionales) : 例えば、「鎌倉時代の清原氏」と「平安時代の清原氏」、「広島県の府中市」と「東京都の府中市」のように、「清原氏」、「府中市」の意味を確保するために、臨時的に「鎌倉時代の」のような節を加えたりする。
- 2) 慣用的 (usuales) : 例えば、「飛驒の高山」はほかの「高山」と区別をするためではなく、単に慣習上でよく使われる。曖昧性を排除する部分は少ない。
- 3) 恒常的 (constantes) : 例えば、「東久留米」、「九段下」などのように記号の1部になっているので省略は不可能である。

コセリウの限定の理論によると、現示化と識別の操作は「定められた現実の状況において、完全に限定された対象の表示に進む」。これらの操作を配列にして、それぞれの機能は先行の操作の機能を含むが、後続の諸機能は含まない。

コセリウの限定理論に基づく諸操作は図4のようである。

- 1) 現示化 (actualización)
- 2) 識別 (discriminación)
 - a) 數量化 (cuantificación)
 - 定 (definida)
 - 不定 (indefinida)
 - b) 選擇 (selección)
 - 不定 (特定化) (particularización)
 - 定 (個別化) (individualización)
 - c) 場面 (situación)
 - 所有 (situación posesiva)
 - 指示場面
 - (位置 localización)
 - (指示 deixis)
- 3) 局限 (delimitación)
 - a) 說明 (explicación)
 - b) 特殊化 (especialización)
 - c) 特定化 (especificación)
- 4) 同定 (identificación)
 - a) 臨時的 (ocasionales)
 - b) 慣用的 (usuales)
 - c) 恒常的 (constantes)

圖 4

1. 4. 2. 「周辺領域」(entorno)

コセリウの理論に従って言うと、日本語にはスラヴ語のように冠詞がないが文を正しく理解できるのは、文脈で判断できるからであると一般的にも言われている。そこで、日本語の限定のはたらきを研究するにはコセリウの「周辺領域」(entorno)の理論が応用できる。ここでは、特に有形の具体的な限定辞に修飾されていない名詞句を「 ϕ 」でマークをつけ、その具体的なはたらきを見ることにする。

次に、日本語の「 ϕ 」という限定辞のはたらきに注目したい。

基本的に4つのタイプに区別できる：「場面」(situación)、「領域」(región)、「文脈」(contexto)および「談話の世界」(universo de discurso)。

A) 場面 (situación)

「場面」とは、広い意味で言えば、発話するだけで生じた「空間・時間」の軸のようなものである。「ここ」、「そこ」、「今」、「当時」のように語彙的意味がなく、範疇的意味しか持たないので、「談話に存在している」対象以外のものは指すことができない。例えば、「 ϕ 今日、 ϕ 兄が ϕ 大学の図書館へ行った」のような場合は、発話するだけで「今日」は語彙的意味がないので、話し手が話しているその日を指し、「 ϕ 兄」は「話し手の兄」というふうに、正しく解釈できる。「 ϕ 今日」、「 ϕ 兄」、「 ϕ 大学」はそれぞれコセリウの言う「場面」によって具体的な解釈ができるが、「 ϕ 限定辞」がついていることに注目したい。「図書館」は「大学の図書館」という名詞句の1部なので「 ϕ 」という限定辞ではなく、「大学の」によって限定されている。

B) 領域 (región)

「ある記号が意味の一定の体系内で機能する際の限界内の空間をわれわれは領域 (región) と呼ぶ。」とコセリウは言っている。さらに、3つの型に分けることができる。

- 1) 分野 (zona) は人が普通、記号を識りそれを用いる場合の「領域」である。その境界は言語的伝統に依存しており、これまた言語的な、他の境界と一致するのが通例である。
- 2) 適用範囲 (ámbito) は対象が話し手の生活の地平線上の要素として、あるいは経験または文化の有機的な領域の要素として織られる場合の領域である。
- 3) 環境 (ambiente) は、社会的あるいは文化的に確立された「領域」である。

また、コセリウは、「慣用語 (voces usuales) と専門語 (voces técnicas) の区別は完全に『分野』と『適用範囲』の相違に支えられている。慣用語は『分野』に固有のものと考えられ、専門語は『適用範囲』に固有のものと考えられる。このことは区別が決して絶対的なものではないことを意味している」と言っている。

例えば、日本語では「芸者」、「さむらい」は専門語ではなくても、適用範囲の違う言語では専門語となる。また、家族、学校など、環境によって特殊な話し方になる。

C) 文脈 (contexto)

記号、言語行為、あるいは談話をとりまくすべての現実が、物的存在として、対話者の知識として、活動として、話の文脈を構成する。筆者が提案する「 ϕ 」という限定辞のはたらきと深い関係がある。文脈は次の3つの型に区別することができる。

I) 個別言語的文脈 (contexto idiomático)

言語活動において、すべての言語記号が具体的な意味を持つのは、その具体的な言語の複雑な意味の対立、記号の関連、言葉の遊びなどのためである。つまり、日本語で発話する限り、発話中の各々の言語記号の解釈は日本語全体としての言語記号の体系と関わる。この言語知識全体との関連は、その言語の話し手の言語的資産に属し、発話に現われない言語記号との関わりがある。例えば、日本語の「青」という色は他の色（黄色、緑など）との関わりのために意味を持つ。そのために個別言語的文脈は一番基本的な文脈である。第2章で、具体的な言語（日本語）の言語記号体系の複雑な関係は限定との関わりを示す。そして、日本語の「 ϕ 限定辞」のはたらきも、その複雑な意味体系に依存していることを示す。

II) 言語的文脈 (contexto verbal)

個別言語的文脈の場合は、音声（文字）に現れなくてもその言語全体の体系が文脈になるのに対して、言語的文脈は、発話自体そのものであり、また、発話のそれぞれの部分が、その発話の「周辺領域」として「文脈」になる。従って、すでに言ったことではなく、発話の中で後に言うことも含まれている。コセリウは言語的文脈をさらに直接的 (inmediato) あるいは間接的 (mediato) に、そして、積極的 (positivo) あるいは消極的 (negativo) に分類した。例えば、非常に単純な例であるが「カミの毛」、

「カミ様」、「一枚のカミ」の場合は言語的文脈によって以上で述べた「同定」という限定作業が可能になる。

Ⅲ) 言語外的文脈 (contexto extraverbal)

言語活動において、言わなくても得られる情報や、理解できることが多い。こういう言語外的文脈は「 ϕ 」という限定辞の「定」の用法との関係が非常に重要である。次の6つのタイプがある。

1) 物理的 (físico)

眼前にあるすべてのものを指示詞、所有詞などで限定することができるが、「 ϕ 」という限定辞で限定することもある。例えば、となりにいる学生の持っている1冊の和西辞典を指で指して、

(20) [その辞典]を貸してください。

(21) [ϕ 辞典]を貸してください。

と、両方の表現が可能である。そして、もし仮に辞典が2冊以上あれば、(20)でも(21)でも曖昧であり、「どれ?」と聞き返されるだろう。しかし、物理的文脈がはっきりしていると「 ϕ 」でも「定」と解釈できる。また、1冊しかなければ、どの表現を使ってもその1冊を指す。もちろん、2冊以上ならば「 ϕ 」で限定すれば「すべての辞典」を指すこともありうる。状況的に複数の辞典が必要でないと判断したら、「どの具体的な辞典か」と何らかの形でその「足りない情報」を相手に聞くことになる。従って、物理的文脈がはっきりしているならば「 ϕ 」限定辞の解釈と関わっている。

しかし、物理的な文脈がはっきりしていても必ずしも「 ϕ 」という限定辞のついている名詞句が「定」になるとは限らない。辞典の例では常識としてある仕事をするためにどの辞典を使ってもよいというわけではないことを知っている。辞典の代わりに「 ϕ クリップ」にするならば、おそらくどのクリップを使ってもかまわないという常識が働くので、決まったクリップと解釈しないので「不定」と解釈してしまうわけである。つまり、物理的文脈は重要であるが、ある名詞句が「定」か「不定」かを判断するには決定的ではない。第2章で示すように「定」と「不定」を判断するために、「常識」（つまり、記憶の構造）が関わる。

2) 経験的 (empírico)

眼前になくとも、一定の時と場所において話し手と聞き手の両者にとって、すでに経験したこと、すなわち「事物の状態」によって構成される。例えば、

(22) ϕ 会議室は、 ϕ 校長室の隣にある細長い部屋で、...

(22)の「 ϕ 校長室」が、「 ϕ 」だけで限定できるのは、話している2人の両者が「事物」の状態を識っているからである。この場合、「 ϕ 会議室」の位置の説明ができるのは、相手は以前に校長室を経験したからである。また、「 ϕ 会議室」の場合、普通どの学校でも「会議室」があるという共通知識があるので「 ϕ 」で限定されるが、経験的文脈のためではない。また、注意したいのは同じ「 ϕ 校長室」という名詞句が出現しても文脈が異なると、その場所の位置が分かるとは限らない。

同じように、例えば、筑波大学の文芸・言語研究科の学生同士の発話中の「 ϕ 5階の事務所」のような名詞句の解釈がはっきりするのは、経験的

文脈のためである。経験的文脈のためにどこのビルの「5階」かは説明せずに済む。

3) 自然的 (natural)

自然を表す語彙は、その実物が1つしかない時に、「 ϕ 」で限定できる。例えば、

(23) . . . きれいな刃を ϕ 日にかざして. . .

(24) 相変わらず ϕ 空の底が突き抜けたような天気だ。

(25) ϕ 廊下のはずれから ϕ 月がさして. . .

(26) ϕ 頭の上に ϕ 天の川が一筋がかかっている。

のように、「 ϕ 日」、「 ϕ 空」、「 ϕ 月」、「 ϕ 天の川」など「 ϕ 」で限定されることが多く、固有名詞の場合も多い。また、自然の1部であっても、「 ϕ 山」、「 ϕ 川」、「 ϕ 木」などは物理的文脈により限定されるか経験的文脈により限定されることが普通であろう。つまり、一般的に「 ϕ 川」は「眼前の川」、「私達の知っている川」、「この村の近くに流れている川」というふうに解釈し、「眼前の～」、「私たちの知っている～」、「この村の近くに流れている～」など1つ1つ細かく説明する必要がない。それぞれの「眼前の」、「私達の知っている」、「この村の近くに流れている」などの情報の部分は「 ϕ 」に省略して「定」として解釈されることが多い。以上のために自然的文脈の場合は固有名詞と普通名詞を区別した方がよい。なぜなら自然の固有名詞は、特別なニュアンス（「夜半の月」のように）を狙わずに表現するならば「 ϕ 」で限定され、自然の普通名詞の「 ϕ 」の解釈は物理的文脈、経験的文脈などに依存するからである。

4) 実践的 (または臨時的) (práctico u ocasional)

談話が行われる時に一連の文法的、意味的機能が、その「機会」(occasion)に依存している。例えば、ライター屋で100円と200円のを売っている店の人に「100円のを1つください」と、言うならば、その内容がはっきりする。「100円のライターを1つください」と言わず済む。また、呼格の場合は普通「 ϕ 」で限定される。例えば、

(27) . . . ϕ バツタを ϕ 床の中に飼っとくやつがどこの国にある。 ϕ 間抜けめ。

この夏目漱石の『坊っちゃん』からの例文では誰が「 ϕ 間抜けめ」であるかがはっきりしているのは、実践的文脈がはっきりしているからである。

5) 歴史的 (histórico)

日本の「佐藤、斉藤、犬の糞」ということわざが表現するように、固有名詞は1つのものしか表せないということではない。同じ名前をもつ人も多い。歴史に属している人物・出来事などは一般的に固有名詞として扱われている。コセリウの理論によると、こういう固有名詞は歴史的な文脈により共通知識の範囲に入るので限定されるのである。例えば、次の例では「 ϕ 」で限定される。

(28) ϕ 自分と ϕ おれの関係を ϕ 封建時代の主従のように考えていた。

(29) . . . ϕ 馬車に乗ろうが、 ϕ 船に乗ろうが、 ϕ 凌雲閣へのろうが、到底寄り付けたものじゃない。

(30) . . . 幸いφ物理学校の前を通りかかったらφ生徒募集の
広告が出ていたから. . .

「φ凌雲閣」とは明治23年浅草公園内に建てられた八角形煉瓦造りの塔であったことは一般的に知られていないが、歴史的文脈に属していると「φ」で限定されることになる。この歴史的文脈は広い意味でとらなければならない。また、社会の仕組み、その特定の場所の歴史などを含まなければならない。歴史的文脈のために(30)の「φ物理学校」は、現在の東京理科大学だと分かるので、もちろん「定」となる。

歴史的文脈のために、「φ天皇」のような固有名詞の解釈も容易である。現在(昭和62年という歴史的文脈の中で)「φ天皇」と言えば「昭和天皇」を指すことになる。別の天皇を表現するには、例えば、「明治天皇」、「大正天皇」などというふうに言わなければならない。つまり、「φ天皇」だけでは限定できない。もちろん、「φ天皇」と言って、「明治天皇」か「大正天皇」のどちらを指すかどうかは、その具体的な時に依存する解釈なので、その時の範囲が何らかの形ではっきりしていたら、言語的文脈により「φ」限定辞で「定」として限定することも可能である。

6) 文化的 (cultural)

文化は歴史、社会、習慣、宗教、文学などと深く関わっているが、文化こそ共通知識の範囲に入るわけである。

(31) φ母が死んでから六年目の正月にφおやじもφ卒中でなくなった。

(31)の「正月」は、一般の日本人なら、いつからいつまでを指すかは分

かっているはずである。

ただし、これは文化が違くと意味の誤解がありうるというような問題だけではなく、「定」と「不定」の解釈にも関わってくる。後で述べるように「 ϕ 」限定辞の用法は associative anaphora (連合照応) のために「 ϕ 」で「定」になる場合もある。例えば、

(32) ϕ 剣道場で ϕ 練習をしていたら ϕ 竹刀が折れた。

(33) ϕ ガレージで ϕ 剣道の練習をしていて ϕ 花瓶を壊した。

「剣道」－「練習」－「竹刀」のような連合照応があるので、(32)の「 ϕ 竹刀」は「定」になるが、(33)には「ガレージ」－「剣道」－「練習」－「花瓶」は無関係なので、「 ϕ 花瓶」の解釈は「不定」になる。この2つの例で示されるように「場面」と「連合照応」という要素は、「 ϕ 」という限定辞のはたらきとの関わりが強いと言える。

D) 談話の世界 (universo de discurso)

ある特定の談話はある特定の意味体系に属しているということになる。例えば、

(34) ϕ 古池や ϕ 蛙が飛び込んだりするのが精神的娯楽なら...

(34)の「 ϕ 蛙」は「どの具体的な蛙か」を聞く意味がないのは、「現実の世界」でなく、「芭蕉の俳句の世界」に属しているからである。しかし、「どの具体的な蛙か」は、「定」か「不定」を判断するには重要である。この場合は具体的な蛙を指さないのだから「不定」と判断できる。

コセリウの「周辺領域」は図5のようである。

「周辺領域」(entorno)

- A) 場面 (situación)
- B) 領域 (región)
 - 1) 分野 (zona)
 - 2) 適用範囲 (ámbito)
 - 3) 環境 (ambiente)
- C) 文脈 (contexto)
 - I) 個別言語的文脈 (contexto idiomático)
 - II) 言語的文脈 (contexto verbal)
 - III) 言語外的文脈 (contexto extraverbal)
 - 1) 物理的 (físico)
 - 2) 経験的 (empírico)
 - 3) 自然的 (natural)
 - 4) 実践的 (または臨時的)
(práctico u ocasional)
 - 5) 歴史的 (histórico)
 - 6) 文化的 (cultural)
- D) 談話の世界 (universo de discurso)

図 5

以上のように、コセリウの理論には「限定」の定義はあるが、「定」と「不定」という範疇について、特に冠詞のない言語については、単に「周辺領域」で解決すると述べている。そして、その「周辺領域」の分類はし

ていが言語学的な基準によるものではない。「周辺領域」の言語学的基準を作るのは無理であろうが、少なくとも日本語の場合、ヨーロッパの言語の冠詞とは異なる部分があっても、日本語の無冠詞の名詞句は無意味とは言えない。英語、フランス語、スペイン語などの定冠詞、不定冠詞のほか一般的に無冠詞も「 \emptyset 冠詞」として扱っている。日本語の場合は、「この」、「その」、「あの」のような指示詞、「私の」、「あなたの」のような所有詞、「あるところ」の「ある」、「某大学」の「某」、「前大統領」の「前」などのよに、具体的に有形の限定辞に対して、無形の「 \emptyset 」という限定辞は無意味ではないので、敢えて「 \emptyset 限定辞」としての特徴を研究する必要がある。その場その場、文脈によって解釈していくのではなく、その解釈を予想できるような理論が必要になってくる。

具体的な発話の音声、文法構造などの要素は、その発話を解釈するのに重要な要素ではあるが、「周辺領域」のような非言語的な要素も考慮に入れなければならないわけである。しかし、「周辺領域」の分類だけでは、少なくとも日本語の場合、「限定」の観点からどのように名詞句の解釈に影響を及ぼすかははっきりしない。従って、少なくとも「限定」の働きを研究することは非言語的な要素を研究することでもある。さらに、「限定」の理論の枠組みを拡大し、言語的な要素だけでなく、記憶の構造などの非言語的な要素を取り入れ、どのようなはたらき、影響があるかを調べなければならないわけである。このような言語的な要素と非言語的な要素はコセリウの理論では以上で見たようにはっきりしない。

また、「限定」の研究は、名詞句の枠に限らず、発話のすべての要素も関わるので、理論の枠組みに取り入れなければならない。この点は、コセリウが指摘はするものの、具体的に論じていない。

1. 5. Paul Christophersen

P. Christophersen (1939) は、英語の冠詞のはたらきを研究するために、名詞を4種類に分けている。この分類は日本語の「限定」の研究にも役立つので次に説明する。

1) Unit-words (単位語) : "it is hard for some people to grasp"
と言いながら、次のような説明をする。

"A unit-word calls up the idea of something regarded as single and complete itself, an individual or unit belonging to a class of similar objects. It is viewed as a point."

さらに、単位語を次のように分類し、例を挙げる。ここでは日本語の例を挙げる。

a) Material (有形)

例：本、鉛筆、ボールなど

b) inmaterial (無形)

例：体系、事件など

2) Continue words (連続語) については、次のように述べる。

"A continue-word represents something apprehended as continuous and extending indefinitely in space and time. Parts of it may be circumscribed with precise limits having a definite shape, but the object as such is still

viewed as continuous."

連続語を次のように分類し、例を挙げる。ここでは日本語の例を挙げる。

a) Material (有形)

例：水、鉄、など

b) inmaterial (無形)

例：音楽、美しさ、空腹、など

さらに、「単独語」と「固有名詞」の区別をする。「単独語」とは、単一のものを指す語を言う。そのために「本当の単独語は非常に少ない」と述べている。例えば、「東京」は日本という国の首都を指し、単独語として扱うことができる。しかし、sun「太陽」の場合、「この銀河系には、いくつかのsun（太陽）がある」と見れば、a sun「ある太陽」と言うことができる。同じように「多くの太陽」も言えるだろう。単独語と固有名詞の区別をした理由は次のようである。

"My reason for adopting the category (in the looser sense of common names that are (nearly) always used of one definite individual and of no other) is that such words have, in practice, a close affinity to proper names. When a word is on most occasions associated with one and the same individual, it may gradually come to participate of the nature of the proper name. The element of familiarity, originally contained in "the", will pass over, little by little, to the name itself, and the article will finally be felt as superfluous and will very often be dropped."

3) Uniques (単独語)

例：地球、太陽、月

4) Proper names (固有名詞)

例：太郎、筑波大学

また、Christophersenが、集合名詞 (collectives) は、英語の冠詞の問題においては重要な問題ではないと言っている。

Christophersenは、以上の分類をしたのは、英語の冠詞の用法と名詞の関わりを示すためであった。次のような形式は、決まった名詞しかとらない。

a) zero-form: Proper Names, Continue-Words, and Plurals;

b) a-form: Unit-Words;

c) the-form: Unit-Words, Continue-Words, and Plurals.

日本語の「限定」のメカニズムは英語のとは異なっても、名詞の種類と「限定」上の解釈は関わっている。例えば、普通は単独語と固有名詞の場合は英語と同じように「定」と解釈できる。日本語の場合は「 ϕ 」で限定されることが普通である。

また、連続語と単位語の区別は、少なくとも「 ϕ 」で限定される名詞の場合は重要である。例えば、「 ϕ + 単位語」は、英語と同じように「定」か「不定」になるが、「 ϕ + 有形連続語」は、「不定」になることがほとんどである。また、「 ϕ + 無形連続語」は「定」になる。具体的に、

(35) ϕ 太郎は ϕ 神保町で ϕ 本を買った。

(36) ϕ 本は、買った？

(37) ϕ 水をください。

(38) ϕ 音楽が好き。

(35) の「 ϕ 神保町」と「 ϕ 太郎」は固有名詞で限定辞の必要はない（つまり、「 ϕ 」で限定）。また、同じ「 ϕ 」でも(35)の「 ϕ 本」と(37)の「 ϕ 水」は具体的な「本」または「水」を指さないのので、その解釈は「不定」である。しかし、単位語の「本」は、有形連続語と違って、(36)のような「定」の用法がある。(36)の「 ϕ 本」の解釈は、「すでに話題になった本」で、連続語の「水」の場合は「定」にはならない。また、無形連続語の(38)の「 ϕ 音楽」は「定」となる。

Christophersenの理論では、名詞の分類と具体的な限定辞の関わりである、形式の問題である。しかし、第2章で示すように冠詞のある言語は、必ずしも定冠詞は「定」という解釈を伴わないし、不定冠詞も「不定」という解釈になるとは限らない。にもかかわらず、名詞の分類は解釈との関わりを否定できない。

1. 6. Otto Jespersen

Jespersen (1949) は、名詞を Christophersen と同じように unit-word (単位語) と mass-word (連続語) に分類した。さらに、3つの familiarity (親密度) の段階を区別する。

1) complete unfamiliarity (完疎)

例えば: 「ジュースを飲む」

2) nearly complete familiarity (親密)

3) complete familiarity (熟知)

例えば：「学校」、「晩ご飯」、「お母さん」など

Jespersen の「親密度」の概念は曖昧なので、特に「定」か「不定」を解釈するときに、大きく関わる要素である。例えば、「ジュースを飲む」と言ったときの「ジュース」について親密度は低く、必ずしも相手が具体的なジュースを思い浮かべるとは限らない。「完疎」であればあるほど「不定」になる可能性が高くなると言ってもよい。逆に、「いつも通っている学校」、「家のお母さん」など「熟知」であればあるほど、「定」になる可能性が高くなる。また、この「親密度」は、日本語の「 ϕ 」という限定辞の解釈の場合は大きな手がかりになる。しかし、残念ながら、「親密度」の具体的な定義もない。

1. 7. S a y o Y o t s u k u r a

S. Yotsukura (1970) は、名詞を3つの次元に分けている。

第1次元：countable (加算名詞) vs. uncountable (不加算名詞)

第2次元：abstract (抽象名詞) vs. concrete (具体名詞)

第3次元：definite (定) vs. indefinite (不定)

この3つの次元により、英語の名詞を分け、次のような加算名詞の基準を挙げている。

"...we established the two major groups, COUNTABLES and UN-COUNTABLES, by the criteria of whether or not a noun can be preceded by the word "much", and of whether or not a noun

can be preceded by the indefinite article "a/an". "

もちろん、日本語の場合は名詞句の冠詞によって加算名詞か不加算名詞か決められないが、Yotsukura の分類により、次のような結論に至った。

"...there are seventeen formulae which DEMAND an obligatory construction and permit no alteration. Of these seventeen, fifteen are concerned with the usage of articles controlled by modification structures and two with the usage of controlled position or construction. "

Yotsukura の結論は Christophersen と Jespersen の「all the various types of junctions can take all the three articles」の結論を否定すると言うより、細かく分析したことになる。

しかし、日本語の名詞の加算名詞／不加算名詞と抽象名詞／具体名詞の基準のほかに、第3次元の「定」と「不定」は英語のように有形の冠詞によって決められないので、別の基準で決めなければならない。筆者は第2章で限定辞によらない「定」と「不定」の基準を挙げる。

1. 8. J o h n A . H a w k i n s

Hawkins (1978) は、英語の冠詞の用法を論理づけるために trigger (筆者はその概念を拡大し、「ひっかかり」と呼んでいる) という概念を使っている。これは associative anaphora (連合照応) とも呼ばれている。Hawkins は次のように言っている。

"It appears that the mention of one NP, e.g. a wedding, can

conjure up a whole set of associations for the hearer which permit the bride, the bridesmaids, etc. I shall refer to the first NP as "the trigger", since it triggers off the associations, and to first-mention definite descriptions which are dependent on this trigger as "the associates".

この「ひっかかり」の性質を調べるために、夏目漱石の『坊っちゃん』の出現順により例文を挙げていく。特に無形の限定辞「 ϕ 」（ゼロ）（つまり、修飾されていない名詞句）に注意したい。

「坊っちゃん」が卒業し、校長に呼ばれる。

(39) . . . ϕ 四国辺のある中学校で数学の教師がいる。 ϕ 月給は四十四円だが. . .

「坊っちゃん」がその「 ϕ 四国辺の中学校で数学の教師」という仕事を受け、次の例文中の「 ϕ 」との「ひっかかり」となる。

(40) ϕ 学校は ϕ きのう ϕ 車で乗りつけたら、大概の見当はわかっている。 ϕ 四つ角を二三度曲がったらすぐ ϕ 門の前へ出た。 ϕ 門から ϕ 玄関までは ϕ 御影石を敷きつめてある。

(41) ϕ 名刺を出したら ϕ 校長室へ通した。 ϕ 校長は薄ひげのある、 ϕ 色の黒い、 ϕ 目の狸のような男である。

(42) . . . ϕ 辞令を渡した。

(43) ϕ 校長は ϕ 今に ϕ 職員に紹介してやるから. . . この辞令を三日間 ϕ 教員室へ張り付ける. . .

(44) ϕ 教員が ϕ 控所へそろうには一時間目のラッパが鳴らなく

てはならぬ。

(45) ϕ おれみたような無鉄砲なものをつらまえて、 ϕ 生徒の規範になれの．．

(46) ϕ 挨拶をしたうちに ϕ 教頭のなにがしというのがいた。

このように、例えば教師の仕事があれば、必ずその辞令、月給、学校などがなければならない。さらに、その学校には、門、玄関もあり、校長、職員、教員、生徒、教頭などがある。そして、校長がいるならば、校長室があるように、これらの名詞は「ひっかかり」関係にある。

その関係は図6のようになっている。

「四国辺の中学校で数学の教師」

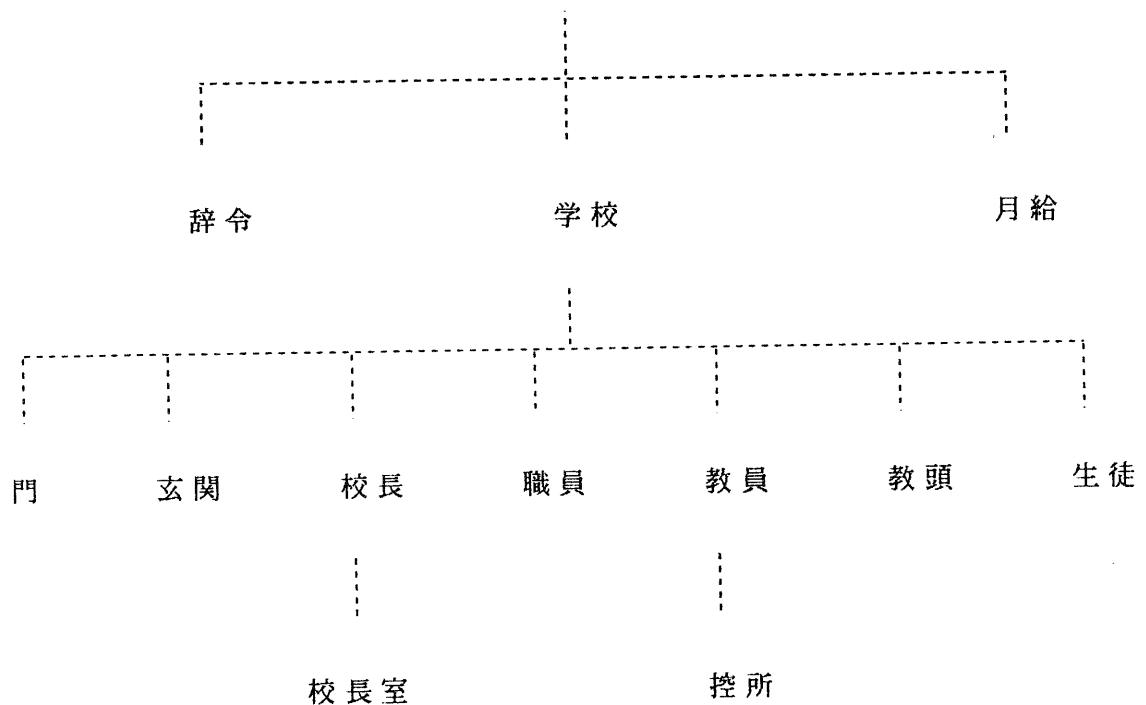


図 6

1. 9. 「ハ」、「ガ」と「限定」

日本語の「ハ」と「ガ」の用法については多くの論文がある。それらは主に文法的な特徴を扱っているが、「限定」の観点から言うと、最も知られている基本的な用法は「前方照応」である。例えば、(47)がその典型的な例である。

(47) ϕ むかしむかしあるところに ϕ おじいさんと ϕ おばあさんが住んでおりました。 ϕ おじいさんは ϕ 山へ ϕ 芝刈に、 ϕ おばあさんは ϕ 川へ ϕ 洗濯に行きました。

(48) ϕ むかし ϕ 伊勢の大神宮さまへ、 ϕ 出羽の北秋田の独鈷という村の者だといって、若い男と女とが2人連れで ϕ お参りをしてきました。
 ϕ 女の名は ϕ 松子といって、 ϕ いなかの人にしては珍しく上品な美しい女でありました。
この2人が ϕ 旅費がたりなくなって、大へんに困っているのを、 ϕ 宿屋の主人が見て気の毒に思いまして、. . .
(『日本のむかし話』、柳田国男)

同じ名詞が談話中に出現する。「名詞+ハ」というパターンは前方照応的に使える。(47)のような場合は確かに「 ϕ 名詞+ハ」(ϕ おじいさんは)という名詞句は「定」と判断できる。また(48)のように(「若い男と女」と「女の名」)は「前方照応」であっても同一の名詞句でなくてもいい場合がある。しかし、この「ハ」と「ガ」の用法にはいくつかの制限がある。

- 1) 「ハ」と「ガ」には、文法的な役割(主語)の制限がある。
- 2) 「 ϕ 名詞+ガ」が「不定」で、「名詞+ハ」が「定」である場合、

(47) のような具体的なパターンに限る。つまり、この前方照応のパターンでなければ、「定」か「不定」か判断できない。例えば、「 ϕ 旅費が」と「 ϕ 宿の主人が」の両方とも1回目の出現から「ガ」が付いているにもかかわらず「定」とはつきりと判定できる。それは、「ハ」か「ガ」かということよりも「お参り」ということには必ず「旅費」、「宿」などあらゆる要素が「ひっかけり」関係にあるからである。

3) 例文の場合は、1回目に出現した名詞句には「ガ」が付いて「不定」となり、2回目に出現したときに「ハ」が付いて「定」となっている。しかし、注意しないといけないのは、1回目に出現した名詞句は、「ガ」が付いていても「不定」になるとは限らない。例えば、野田尚史(1985)は、「ハ」と「ガ」の用法について次のように述べている。

『13-1 主語が「私」「私たち」「あなた」や「私の～」「私たちの～」「あなたの～」などであり、その主語について何かを伝えたいときは、主語に「は」をつける。』

しかし、「ガ」をつける例外が多く「ハ」か「ガ」の有無で「定」か「不定」かを決定するのは困難である。それは人称代名詞や所有詞が出現すると、その名詞句の文法的な役割と無関係に「定」になるからである。

4) 「地球」、「東京」、「小錦」、「両親」などのように、どの状況でも必ず「定」になる名詞句は、「ハ」か「ガ」かは決まらないことがある。例えば、

(49) 地球は青い惑星です。

(50) 昼と夜があるのは地球が自転しているからだ。

(51) 東京は物価が高い。

(52) 東京がいい。

- (53) 小錦はアメリカ人だ。
- (54) 小錦が土俵に上がった。
- (55) 両親は家にいる。
- (56) 今朝、両親が旅行に出かけた。

(49) ~ (56) のように「ハ」でも「ガ」でも「定」であることには影響を及ぼさない。

従って、「ハ」と「ガ」の用法は、「限定」のメカニズムとは無関係ではないが、その影響には限界がある。

第 2 章

2. 「 ϕ 」という限定辞の提案.

日本語の修飾されていない名詞は、「限定」のはたらきから言えば統語論・意味論的な特徴を持っているので、方法論上では「 ϕ 」という限定辞により限定されていると扱った方が便利である。なぜなら、「限定」は、すべての名詞句に義務的な作業であるので、すべての名詞句は限定辞によって限定されるからである。言い換えると、修飾されていない名詞句は限定されていないとは言えない。これは「 ϕ 」という限定辞により限定されることになる。英語、フランス語、スペイン語なども、有形の限定辞のない名詞句の場合も「 ϕ 冠詞」によって限定されると一般的に扱われている。しかし、日本語の「 ϕ 」という限定辞は、「定」あるいは「不定」という機能を合わせ持ち、その機能は、その名詞の性質とその「周辺領域」により左右される。また、記憶の構造との関係もあるので、「 ϕ 」という限定辞の用法は統語論と意味論だけでなく、語用論的に学際的に研究しなければならないわけである。

まず、話し手と聞き手の共通知識が音声や文字などにより表面化していても、その知識を利用することにより、発話に新しく出現する要素の「限定」が行われることが可能である。例えば、学校の話の中では「校長」という言語記号が出現すれば、「すべての学校には校長がいる」というような知識を形式的に現わさなくても、利用はしている。そして、その知識は(41)のように出現した「 ϕ 校長」の限定に関わるわけである。「限定」は知識との関係があるので、「限定」の研究をするのには知識の研究も行なわなければならないわけである。しかし、知識の記述・メカニズムなどは言語学の問題だけではなく、心理学などの知識を借りなければならな

い。そのために、「限定」の問題は広い意味で言えば学際的な問題と考えるてもよい。

自然言語の記号は、長い年月をかけ学習し、複雑な網の目のように結合していく。言語記号の結合の「強化」(reinforcement)の程度は個人により異なるので、「定」、「不定」の認識も異なるはずである。例えば、相撲を知らない人に「小錦が大関になった」と話しかけてみても通じるはずがない。「小錦」と「大関」の意味関係を教えて(新情報を紹介し)はじめてその内容がはっきりする。言語記号の意味的な相互関係を記憶しているからこそ、その情報が後からでも何回でも利用できる。もちろん同じ理由のために、発話の中の要素の意味的な相互関係が分からなければ、その発話の正しい解釈もできない。つまり、「限定」の問題は記憶のメカニズムと深い関係があるわけである。

1.8.で述べたように、trigger(連合照応)関係で結合された要素(例えば、「学校」⇔「教師」)は、Hawkinsが言うように英語では定冠詞を伴ない、「定」となる傾向が強く、完全に結合されていない場合は「不定」となる傾向が強い。筆者は、triggerという概念をさらに発展し「ひっかけり」と呼ぶことにする。まず、Hawkinsのtrigger関係と筆者の「ひっかけり」関係の1つの大きな相違は、「ひっかけり」関係にある要素は名詞同士に限らないという点であり、ここに特に注意したい。広い意味で言えば、語彙的な意味があるならば名詞だけでなく、動詞、形容詞など、どの品詞も「ひっかけり」関係になりうる。この特徴を軽視して「限定」のメカニズムを理解することは不可能である。しかし、現在までの「限定」の議論はおもに名詞句内の問題にされ、名詞句以外の語彙的な要素(動詞、形容詞など)のはたらきについては無視されているのが現状である。そのために、「限定」のあらゆる現象は満足のいく説明もできない。「ひっかけり」関係は、特に日本語のように有形の限定辞のない言語の「限定」上のはたらきを説明するには鍵となる。

そこで、筆者が呼んでいる「概念的限定」(conceptual determination) および「共同限定操作」(joint determinative operation) (修士論文: 「『言語概念』と『限定』」、1984) という、語彙的な意味を有する品詞間のメカニズムで、名詞句外のレベルで説明しなければならない。

例えば、

- (57) エリサはピアノを弾いた。
- (58) エリサはピアノを持ち上げた。
- (59) エリサはピアノを売った。

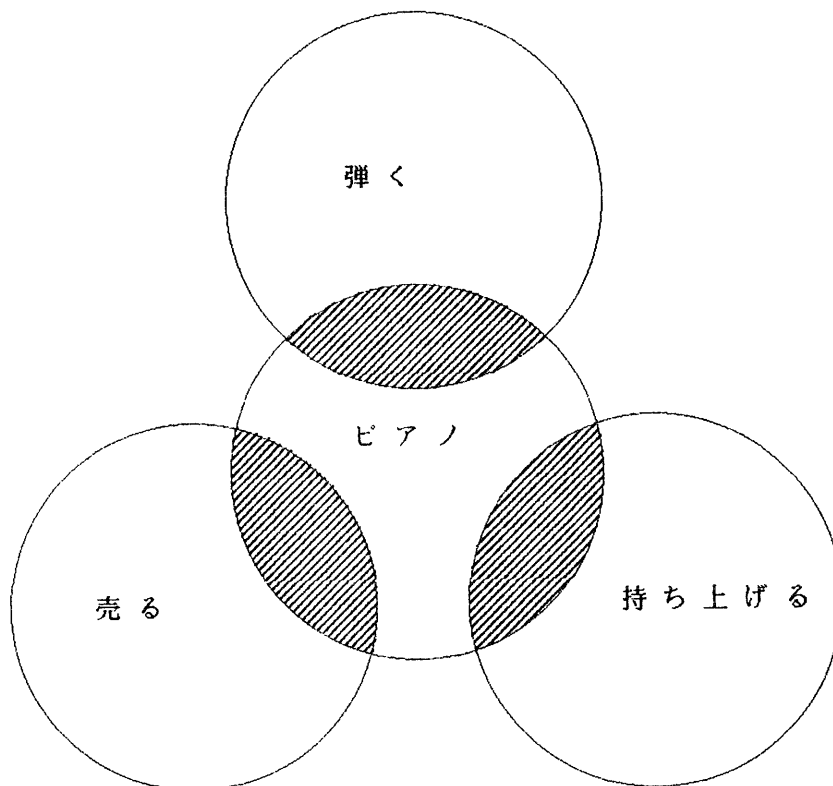


図 7.

(57) ~ (59) の例文では [ピアノ] の意味の範囲はその動詞に微妙に限定される。(57) では [楽器] として (58) では [物体] として (59) では [商品] として、などという特徴を中心に行っている。それぞれの意味的な特徴は図 7. の塗りつぶした部分で示される。

それぞれの文において、[楽器] として、[重い物] として、[商品] としての [ピアノ] の面は、非常に重要な要素であり、Barclay、Bransford、Franks、McCarrell and Nitsch (1974) の実験によって証明されている。例えば、長期記憶の 1 つの実験では

(60) The secretary put the paper clips in the envelope.

(61) The secretary licked the envelope.

被実験者は、同じ名詞 (envelope) を含む (60) と (61) のような文を与えられ、その名詞を記憶しなけりばならなかつた。そして、その名詞 (envelope) を思い出すために被実験者は「ヒント」(例えば、something that can hold small objects, または something with glue など) を与えられ、「適切なヒント」を与えられた被実験者は 10 題の内、平均 4.6 題を正確に答えることができ、「不適切なヒント」を与えられた被実験者は平均 1.6 題を答えたに過ぎなかつた。

もう 1 つの実験では、(62) と (63) のように同じ動詞を含む文を与えられ、その動詞 (lifted) を記憶しなけりばならなかつた。

(62) The man lifted the piano.

(63) The man lifted the infant.

この場合も [something heavy] (重いもの) という「適切なヒント」を与えられた被実験者の結果の方があらゆる不適切なヒントを与えられた

被実験者の結果よりよかった。

さらに、文全体を思い出す実験では「適切なヒント」[something heavy]を与えた場合の方が、「不適切なヒント」[something tuneful]または、その単語自体[piano]を与えた場合より結果がよかった。

これらの実験では、単語のすべての意味的な特徴を記憶するのではなく、その単語の一面を記憶するということが分かる。文脈が異なると、同じ単語であっても強調する面が違ってくるという現象を semantic flexibility と呼んだ。

動詞も名詞の意味の性質により意味的に限定される。例えば、

(64) エリサはピアノを弾いた。

(65) エリサはバイオリンを弾いた。

(64)と(65)の例文では「弾いた」という動詞が使われているが、楽器によって「弾き方」が違ってくるとは明らかである。換言すれば、「ピアノ」または「バイオリン」の意味的特徴は「弾く」の実際の内容を限定することになる。

従って、「限定」のメカニズムを研究する際にも、この semantic flexibilityを無視することができない。

そして、筆者が呼んでいる「概念的限定」は、言語記号のこの semantic flexibility を限定する。

「トランペットを吹く」と「ピアノを弾くこと」の実際の操作はだいぶ異なるにもかかわらず英語ならば play、フランス語ならば jouer、スペイン語ならば tocar と言い、どの楽器でも同じ動詞を使うが、日本語においては楽器によって動詞が異なることもある。日本語では語彙的にその動作を英語などより細かく分類していると言ってもよい。しかし、英語などでは日本語ほどの細かい分類をしなくても普遍的な「相互限定」の意味

的な操作により、semantic flexibilityのために同じ1つの動詞でも誤解されずに十分に使用できるわけである。この例で分かるように、名詞（トランペット、ピアノ）が動詞（吹く、弾く）の意味を限定し、そして、動詞が名詞の意味を限定する。

このように、「限定」のメカニズムは一方向的ではなく、意味の範囲は「相互限定」により行われる。そして、この操作は意味の範囲の相互限定に限らず、潜勢的な（virtual）言語記号の現示化も、少なくとも「 ϕ 」という限定辞の場合、「相互限定」により行なわれることもある。例えば、具体的に日本語の場合は、

(66) ϕ 海で泳いでいたら、 ϕ 水着が ϕ 岩に引っかかった。

(67) ϕ 夏には、 ϕ 海の近くのどこの店でも ϕ 水着を売っている。

(66) の場合は、「泳いでいたら」という動詞が「引っかかり」になり、この文脈で「 ϕ 水着」の限定も行われる。つまり、この場合の「 ϕ 水着」の解釈は、泳ぐのには普通水着を利用するという知識があるので、「私がその時に着ていた1枚の水着」になるが、(67) の場合は、「売る」という動詞の性質のために「その店にある不特定多数の水着」という解釈になる。このような例を見て、「泳ぐ」 \leftrightarrow 「水着」と「売る」 \leftrightarrow 「水着」の「相互限定」の操作が明らかに異なることが分かる。その関係は図8. のように示すことができる。

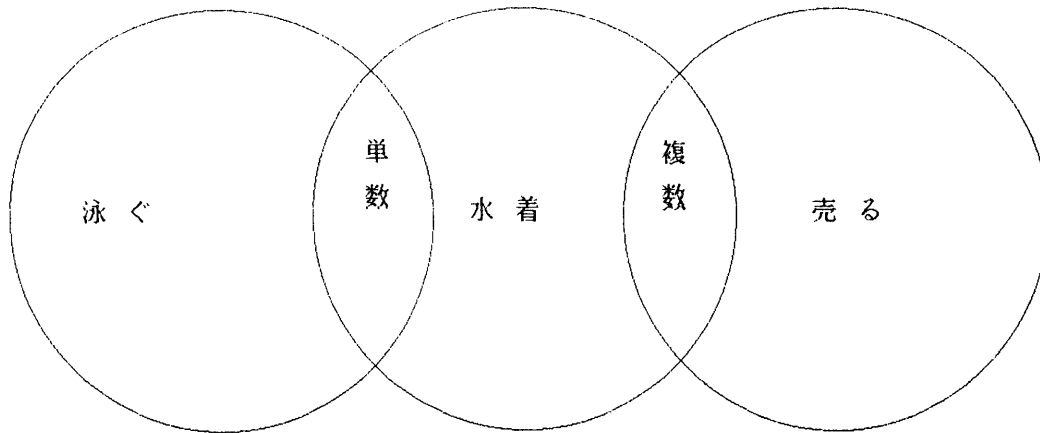


図 8.

しかし、「相互限定」は普遍的なメカニズムであるが、言語が異なると、統語論のレベルでのそれぞれの具体的な限定辞の用法、単数・複数の使い分けなどによって、限定辞の不在の意味が異なるわけである。数量化に関しても日本語には単数・複数という文法的な範疇がないので、限定辞の具体的な言語的道具が少ないと思われるが、実際に日本語を運用すると、次のような文がありうる：

- (68) 太郎と花子が ϕ 椅子に座った。
- (69) 太郎と花子が ϕ ベンチに座った。
- (70) 太郎と花子が同じ椅子に座った。
- (71) 太郎と花子が別々のベンチに座った。

一般的に「座る」 \leftrightarrow 「椅子」という言語記号の組合せになると「椅子（単数）一人（単数）」という常識が働くし、「座る」 \leftrightarrow 「ベンチ」は「ベンチ（単数）一人（複数）」という常識が働く。そのために、(68)の「

「 ϕ 椅子」の解釈は「それぞれの」となり、(69)の「 ϕ ベンチ」の解釈は「2人で同じ1つのベンチ」を指すことになる。もちろん、2人で1つの椅子に座ることもできるし、2人でも別々のベンチに座ることもありうる。ただし、そういう、一般的でないことを表現するならば普通は(70)と(71)を使うだろう。言い替えれば、語用論的に「 ϕ 」の優先的な解釈がある。そして、一番「常識的な」解釈は、「最小労力の原理」のように「 ϕ 」で優先的に限定されるようである。

もちろん、このような相互限定の操作には、「限定」が中心的なはたらきになっている限定辞の操作もある。つまり、筆者の考えでは、「限定」という操作は、意味的に働く「相互限定」と、限定辞と呼ばれている具体的な言語的道具の「共同限定操作」(joint determinative operation)によって行われる。そのために、具体的な言語の具体的な限定辞の機能の範囲がほかの言語の限定辞と大きく異なるので、言語間の「限定」の比較は極めて困難である。冠詞のある言語ならば、その冠詞という言語的道具の機能の比較はある程度可能であるが、日本語のような冠詞のない言語の場合は、「限定」のはたらきが意味的、語用論的な相互限定にかなり依存するので、具体的な言語的道具(日本語の場合「 ϕ 」という限定辞のように)の機能には限界がある。

そのために、これからの「限定」の理論は狭い名詞句の限界を乗り越え、文、テキストなどより大きい範囲で扱わなければならない。そして、以上で述べた「共同限定操作」(joint determinative operation)を出発点とし、日本語の「 ϕ 」という限定辞の特徴を調べながら新しい理論の枠組みを作らなければならない。

その研究を進めるにはまず第1に、言語記号間関係による限定と、具体的な限定辞による限定を考えなければならない。言い換えれば、意味関係、または語用論的な要素による限定に大きく依存している限定辞の働きを追求しなければならない。

このような研究はまさにコセリウが言う複雑な「話の文法」になる。

本研究では、特に限定の本質と「 ϕ 」という具体的な限定辞を中心にしたいので、まず「限定」のメカニズムと記憶のメカニズムとの関係を示したい。特に人工知能、知識記述を専門にするアメリカのRoger C. Schank (1986)のMOP (Memory Organization Packets)の理論を中心に「定」と「不定」という範疇との関わりを調べる。もちろん、「定」とは何か、日本語でも応用できる基準が必要になる。そして、「定」の基準は言語学的ではなくても、具体的な限定辞の働きを判断するために実用的でなければならない。また、「限定」の観点から名詞の分類も必要になる。

2. 1. 「定」の基準。

1. 2. で述べた Jiří Krámský の定義は、内容についてはもっともであるが、定義としては不十分である。もちろん、ある名詞を「定」として解釈するには "clear and identifiable in a concrete way" でなければならない。しかし、この定義の条件は「必要条件」(necessary condition) であるが、表現が曖昧であり、条件としても「十分な条件」(sufficient condition) とは言えない。

まず、clear (明確、完全に理解できる) と identifiable (同一である) は別にして、特に "concrete way" は不十分である。挙げられる主な理由の1つは "concrete" の多義性 (polysemy) にある。例えば、「現実の」、「実在の」、「実際の」、「個々の」、「特殊の」など用法が多い用語である。これらのすべての用法かまたは1部だけかはっきりしないのは定義として望ましくない。また、実用的な定義ではない。

定義中に使われている用語に曖昧性があるので厳密に定義をすることには限界があろうが、より正確な基準をあえて試みた。

基準： ある名詞句は次のような場合に「定」（determinedness）という「範疇」に属する。

厳密な基準：

その名詞句により理解された集合に属する実在物（entity）の1つ1つの要素が、話し手にとっても、そして聞き手にとっても完全に同一の要素であるなら、その名詞句は「定」となる。

ゆるい基準：

その名詞句により意味された「集合」（set）の要素（elements）が個別に決まっていなくても、また実際に存在していなくても、その「集合」に属するための条件が話し手と聞き手の両方にとって同じであるならば、その名詞句は「定」となる。

ただし、その条件を満たすすべての実在物ではなく、意識的にその部分集合しか指さない場合は、その名詞句は「不定」となる。

または、

その他の場合は「誤解」となる。

「定」か「不定」かの基準の前提としては、そのNPに必ず referentがあるときに限る。つまり、「誰も来なかった」のような場合の「誰も」は話し手にとっても聞き手にとっても \emptyset 集合であるので、厳密な基準によって「定」と思われるだろうが、referentiableではない故に、この基準で

は扱わない。

厳密な基準は図9のように表わすことができる。

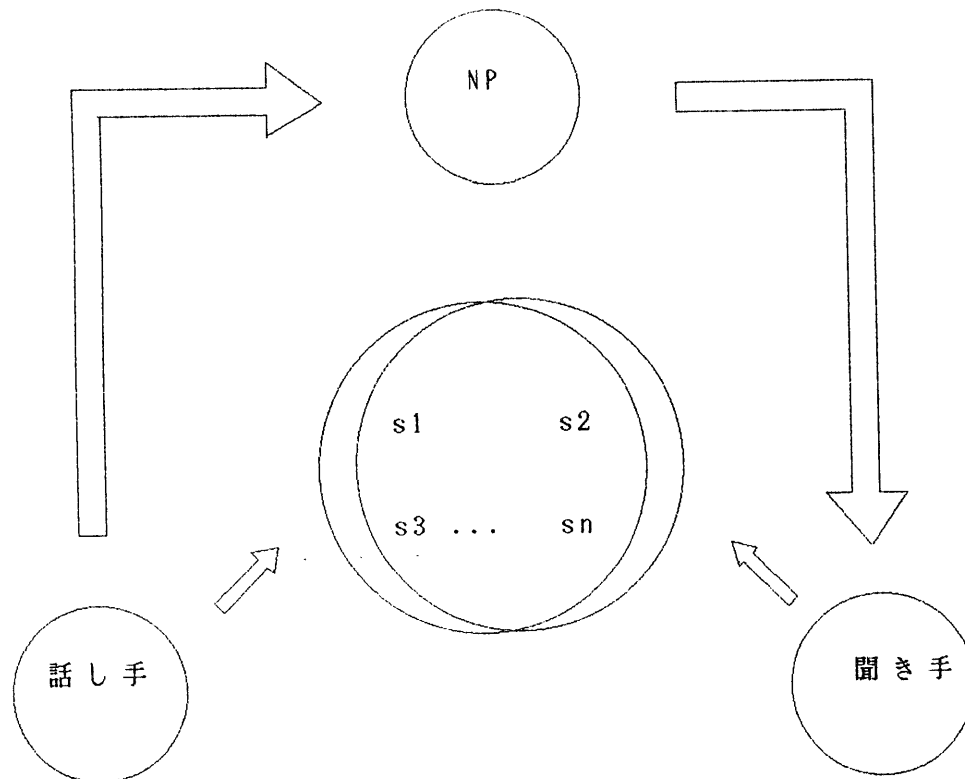


図 9. 「定」の厳密な基準

以上の基準は Jiří Krámský の定義より「定」の範疇をより正確に、そして実用的に表現する。この基準を細かく見てみよう。

話し手が発話の中の NP で $[s_1, s_2, s_3, \dots, s_n]$ ($s_1, s_2, s_3, \dots, s_n$ は NP により意味された実在物で、それらによって形成された集合はその NP の範囲 (scope) を示す) という集合を意味して、聞き手がその NP を同じ $[s_1, s_2, s_3, \dots, s_n]$ という集合として解釈するならば、NP は厳密な基準のために「定」と判断することができる。

「定」という範疇の本質については、「言語形式的に表わす必要がない」という Jiří Krámský の意見はもっともであるが、言語形式（意味形式も含まれる）が「定」という範疇を判断するには重要な「材料」になるということを強調しておきたい。例えば、「 ϕ 」という限定辞が音声上または文字上の物理的な支えがなくても、その意味的な（または語用論的な）特徴は否定できない。そして、「 ϕ 」という具体的な限定辞の意味的・語用論的な特徴が、その名詞句の「定」についての状態を判断するために最も強力な基準であるということが、本論文の主張である。

まず、厳密な基準の「実在物の集合」とは、単数の場合と複数の場合が考えられる。例えば、

- (72) ϕ 太郎は ϕ 京都へ行った。
- (73) ϕ 鈴木太郎は ϕ 京都へ行った。
- (74) 「隣に住んでいる太郎」は ϕ 京都へ行った。
- (75) ϕ 太郎は「京都という喫茶店」に行った。
- (76) ϕ 君！
- (77) 「私の机の上にある本」を持って行かないでください。
- (78) ϕ くじらは哺乳類だ。

「 ϕ 太郎」という言語記号だけでは世界中の「太郎」という名前を持っている人を指すことができるが、(72)のように話し手が指したい「太郎の集合」と聞き手が理解する「太郎の集合」が一致すれば（この場合は同じ具体的な太郎）、「 ϕ 太郎」という NP は「定」となる。これは図 10. で表わすことができる。

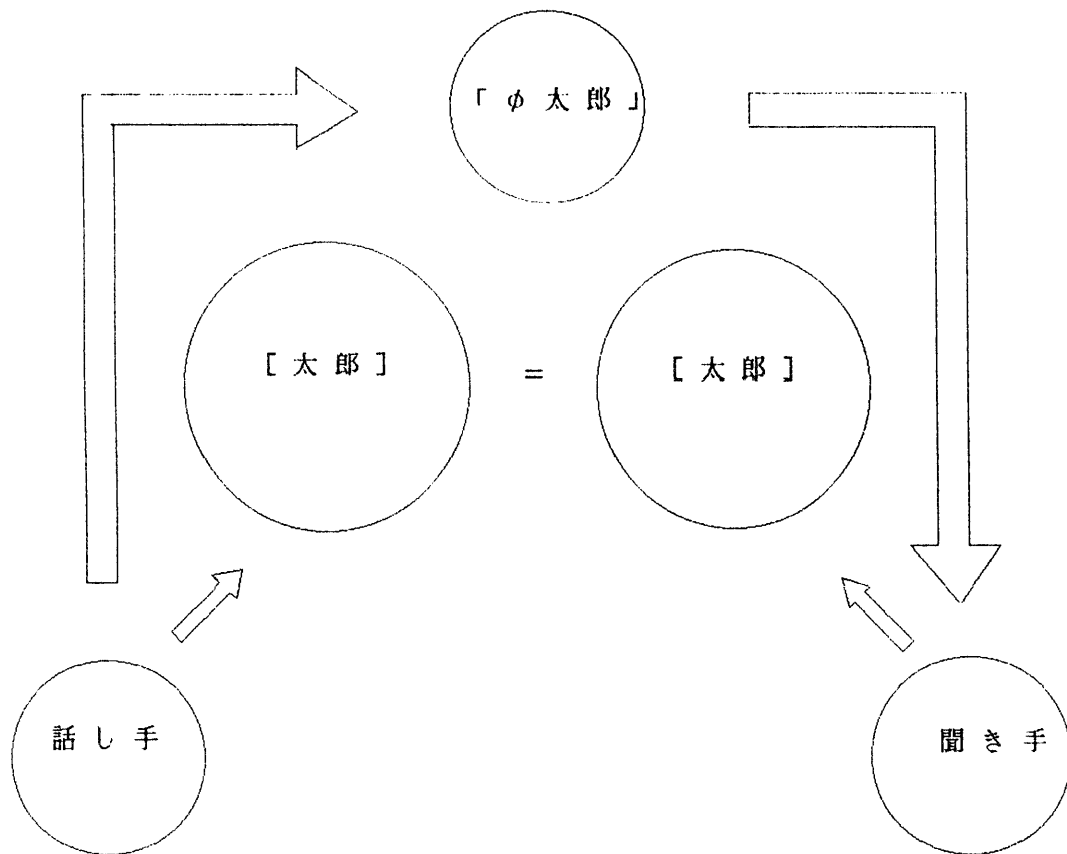


図 10. 「定」の場合

しかし、もし話し手と聞き手の両者ともに「太郎の集合」が形成され、そしてその集合が同じでないと、「不定」ではなく、誤解になる。誤解の場合は図11で表わすことができる。

「不定」として解釈するならば、「その太郎は誰？」というふうに、聞き直す必要があるだろう。状況によって、この質問に(73)、(74)のような表現で答えることもできる。もちろん、話し手はこの問題が予想できる場合は最初から(73)、(74)のような表現をすることが多いだろう。誤解の可能性がなく、状況がはっきりしていればいるほど(72)のような簡単な表現が多くなる。

つまり、状況がはっきりし、共通知識が多く、誤解になる可能性が少な

いと話し手が判断した場合は、その名詞句は「φ」で限定される傾向が強くなる。

「φ京都」のようなはっきりした場合は誤解は少ないであろうが、これは単に固有名詞という理由だけではない。ありうる解釈の中の最も可能な解釈を優先するからである。もちろん、(75)のような「京都という喫茶店」もありうる。こういう場合は、状況がはっきりしていなければ、「φ」という限定辞だけでこの解釈は理解の過程で優先されることはない。

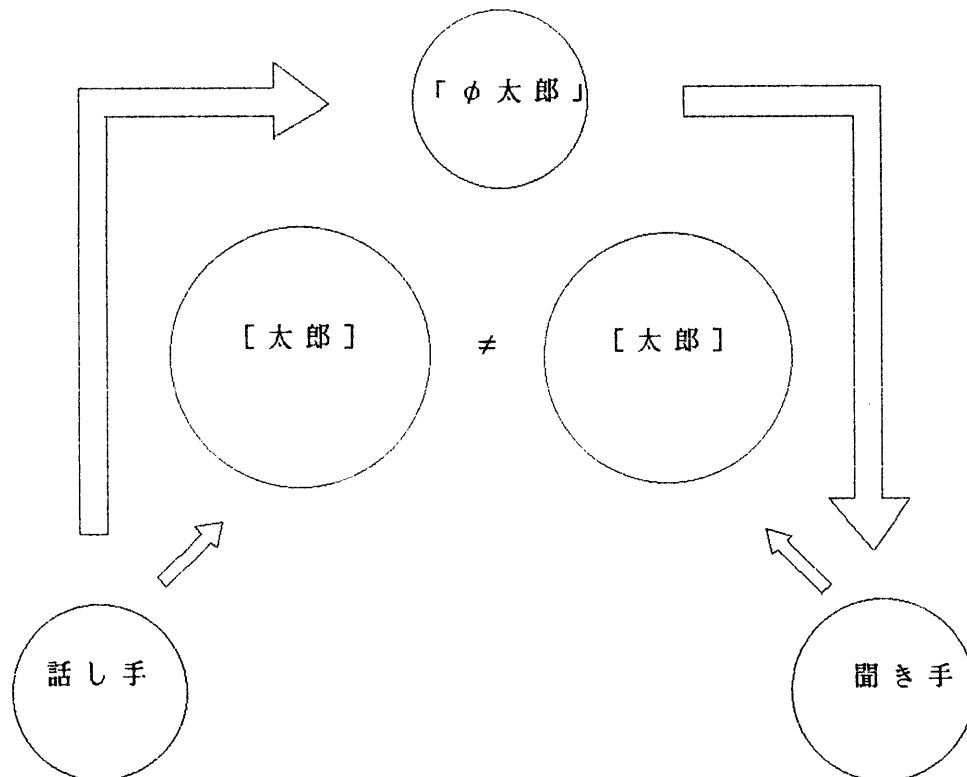


図 11. 誤解の場合

代名詞は一般的に「定」として扱われる。本稿の基準から言うと、(76)の「φ君！」は、数人の前で言うならば、十分に誤解になる可能性がある。

仮りに一郎、次郎と太郎の3人が話し手の前にいるとする。そして話し手が「 ϕ 君！」で意味したい「実在物の集合」が「太郎」であることを想定する。もし、一郎、次郎と太郎の3人とも同じ「実在物の集合」（→「太郎」）を理解しているならば「 ϕ 君！」は「定」であろう。こういうこともありうるので、指で指したりすることでその曖昧さをなくすことも考えられる。しかし、ここで言いたいことは、もしその3人の中で、誰かが「太郎」以外の「実在物の集合」を考えるならば誤解（コミュニケーションの失敗）になり、もし、具体的な「集合」を考えることができなければ「不定」になる。

「実在物の集合」は複数の場合もありうる。例えば、(77)のように「私の机の上にある本」の場合は、聞き手が簡単に話し手と同じ「本の集合」を形成することができるので「定」となる。

(78)のような総称的な場合も、話し手が指している「くじらの集合」と聞き手が理解する「くじらの集合」も同一である。ここで注意しなければならないのは、本稿で挙げた基準から言うと、ゆるい基準で言う「その『集合』に属するための条件が話し手と聞き手の両方にとって同一の条件であるならば」という条件は「総称」の場合を含む。

総称の場合は図12のように現わすことができる。話し手と聞き手が考えている条件(C1, C2, C3, ... Cn)が一致している。総称の場合は意味的な条件が多い。例えば、[くじら]の集合ならば、「くじら」の特徴をすべて持たなければならない。そして、実在物の集合は、その条件を満たすすべての実在物から構成される。

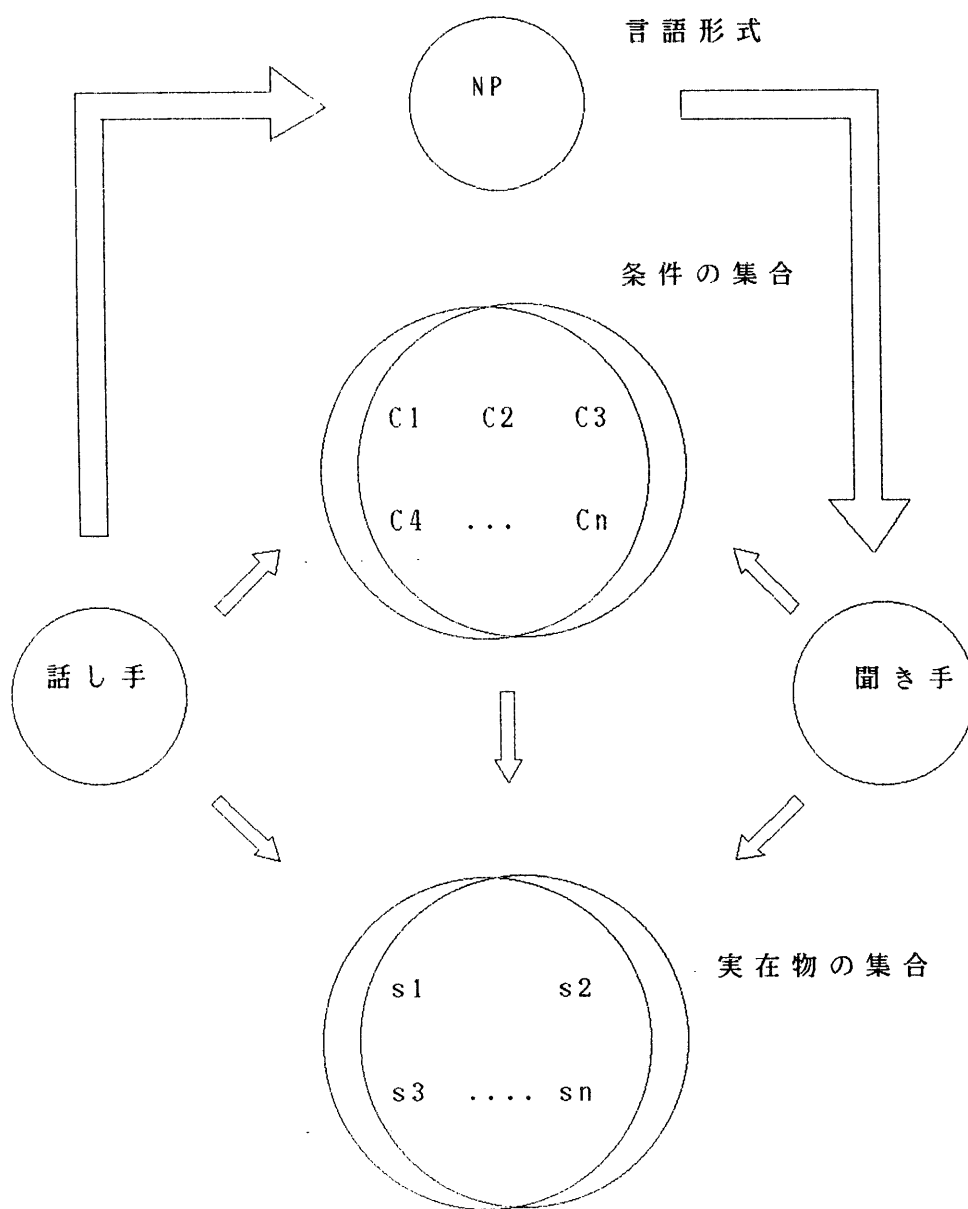


図 1 2 総称の場合

この「総称」の場合では英語、フランス語、スペイン語などのような具体的な自然言語の「限定」のメカニズムを観察すると「定」と判断できるような名詞句でも定冠詞がついているときもあれば、不定冠詞がついていることがある。例えば、

- (79a) Le lion est un animal dangereux. (仏、定冠詞使用)
- (79b) Un lion est un animal dangereux. (仏、不定冠詞使用)
- (80a) The lion is a dangerous animal. (英、定冠詞使用)
- (80b) A lion is a dangerous animal. (英、不定冠詞使用)
- (81a) El león es un animal peligroso. (西、定冠詞使用)
- (81b) Un león es un animal peligroso. (西、不定冠詞使用)

(79a) ~ (81b) の例文はすべて「ライオンは危険な動物だ」という意味で、「ライオン」が総称的な意味で使われている。が、定冠詞でも不定冠詞でも使用できる。このような例が可能であるのは具体的な自然言語の具体的な限定辞の働きのためで、決して定冠詞か不定冠詞かを使用するだけで「定」または「不定」の基準にはならない。そのために、「機能」と「形」をはっきりと区別しなければならない。日本語は、欧米の言語とは形式的に異なる点が多いが、「 ϕ 」という限定辞は、場合により「定」的な働きもあり、「不定」的な働きもある。日本語の「 ϕ 」という限定辞のこの矛盾するような働きはまだ説明されていないし、問題にもされていない。本稿では、その働きを説明できるような理論の枠組みを試みたい。

そして、ゆるい基準では「集合」の定義の仕方が異なる。厳密な基準の場合は「集合」の要素を外延的に表わすが、ゆるい基準では要素を内包的に表わす。この区別は現代言語学で認められている「外示」(denotation)と「共示」(connotation)、または「外延」(extension)と「内包」(intension)の対立に結びつく。Lyons (1968)によると、

「語の外延とはその語が適用され得る、あるいは指示する存在物のクラスであり、語の内包とはその語が正しく適用される存在物を特徴付ける一組の属性である。」 (§ 10.3.)

つまり、ある存在物があるクラスに属するかどうかを判断するには基本的に2つの方法がある。

1つは「外延的な方法」である。例えば、「鈴木太郎」という受験生が今年度受験した大学に合格したかどうか（自分が「〇〇大学に合格した受験生のクラス」に属しているかどうかを調べること）を判断するには合格者のリストを見ればよい。そのリストに「鈴木太郎」が含まれているならば、「鈴木太郎」という存在物が「合格者」のクラスに属しているということが外延的に示されたということになる。

また、内包的な基準とは、例えば、もしある企業に入社するにはTOEFLで650点以上をとらなければならないという条件があれば、その資格のある人は外延的に示すのは非常に困難であるので、リストなどでは示されない。そして、その資格のある人のクラスに属するかどうかを調べるには単に、650点以上を獲得したかどうかは1人1人調べればよい。この場合は、内包的に判断できる。

もう少し具体的に見てみよう。

(82) 今日、 ϕ 幸代が来る。

(83) 「あの3人」は、 ϕ 筑波大学の学生だ。

(84) 「スペインでは150 cm以下の男性」は ϕ 兵役に行かなくてもいい。

(85) 「 ϕ 九州の男性」は、 ϕ 亭主関白だ。

(82) は、「幸代」という具体的な女性を指し、話し手も聞き手も[幸代]という1つの要素しかない集合を理解し、その集合が外延的に決まる。

もちろん、もし聞き手が「幸代」という女性を知らない、またはどこの「幸代」かを判断するのに迷うならば、話し手に聞かなければ、基準によって誤解になる。

また、「幸代」は、固有名詞なので一般的には「定」として扱われるが、厳密な基準によって必ずしも「定」になるとは限らない。もし、聞き手が(82)の「幸代」を知らなければ、誤解にはならないが、その「定づけ」は後になる。言い換えれば、聞き手の解釈は「私が知らない幸代という女性」なので、「不定」となる。もちろん、その次の「幸代」の出現は照応になる。

(83)の場合も同様に、具体的に話し手と聞き手の眼前にいる「あの3人」を指し、他の誰かと誤解することはない。(82)も(83)も意味された集合の要素が1つ1つ決まっており、その数ももちろん決まっているわけである。しかし、(84)の場合は「スペインでは150 cm以下の男性」という集合の要素は1つ1つ決まっていないし、その数も決まっていない。同様に(85)の「九州の男性」という集合の要素も決まっていない。(84)の「スペインでは150 cm以下の男性」と(85)の「九州の男性」の共通点は、ある実物がその集合に属しているかどうかを調べるための基準であるということである。

従って、(82)の「幸代」と(83)の「あの3人」という名詞句の集合の要素は、1つ1つはっきりと外延的に示されているので、厳密な基準のために「定」と判断できるのである。また、(84)の「スペインでは150 cm以下の男性」と(85)の「九州の男性」のどれぞれの名詞句により意味された集合の要素の1つ1つをはっきりと言わなくても、ゆるい基準のために「定」と判断することができる。

形式論理学から言えば、ゆるい基準は第1の基準を含むと考えてもよい。(論理学者は必ずしもそうは考えていない。Lyons (1977) § 6.4.を参照)それは、ある集合の要素が1つ1つ外延的に決まっているならば、そういうことじたいがその集合に属するかどうかを判断するための基準になれるからである。例えば、ある状況では(83)の「あの3人」という集合を内包的に定義すると「私が指している人で、合計で3人になる」というよう

な条件が考えられる。しかし、「厳密な基準」と「ゆるい基準」に分けたのは、ゆるい基準が厳密な基準より論理的に強い基準であっても、自然言語においてはそれぞれの性質が異なるからである。具体的に見てみよう。

- (86) 「 ϕ 太郎と ϕ 次郎と ϕ 三郎」が ϕ パーティーに来た。
- (87) ϕ 学校教育は ϕ 義務なので ϕ 日本人は ϕ 日本語の読み書きができる。
- (88) 「 ϕ 田園調布に住んでいる人」は ϕ 金持ちだ。
- (89) 「 ϕ 東大の学生」は ϕ スポーツに弱い。
- (90) 「この本棚の大部分の本」を読んだ。
- (91) 私は、「 ϕ 夏目漱石の『坊っちゃん』」を面白く読んだ。

(86) の「 ϕ 太郎と ϕ 次郎と ϕ 三郎」の集合の要素は1人1人が厳密に決まっており、外延的に示される集合の要素についての疑いはない。が、(87) の「 ϕ 日本人」の場合は、日本で学校教育が義務であっても、日本国籍を持っている人ならば必ず100%日本語の読み書きができるとは言えない。「日本人」であることという条件で、生まれたばかりの赤ちゃんや、精神薄弱の人や、外国で育った日本人が、日本語の読み書きができるかといえればできない日本人も存在するわけである。従って、厳密に言えば(87)は嘘(偽、false)である。ただ、論理学の記述としてではなく、自然言語の表現としてならば、(87)の文は、そのまま誰にでも理解しやすい文と言える。「常識的に」(つまり、語用論的に)理解しなければならない。もちろん、誰も「100.00%の日本人」と解釈しない。にもかかわらず、こういう名詞句は「ゆるい基準」により「定」として処理されることになる。言い換えると、「ゆるい基準」は「だいたい」、「前後」、「ほとんど」などのようなfuzzy的な要素(cf. Zadeh, 1965)が性質的に含まれていると考えてもよい。

同様に、(88)の場合は東京の世田谷区の田園調布というところに住んでいる人の中には金持ちが多いようであるが、100.00%とは言えないだろう。(89)の場合も同様である。受験のためにあまりスポーツをしなかった東大の学生はスポーツはあまり得意ではないであろうが、それは東大の100.00%の学生については断言できない。このように、自然言語においての常識的な、また実用的な(語用論的な)言葉の運用がある。

また、(87)～(89)の場合は、「 ϕ 日本人」、「 ϕ 田園調布に住んでいる人」、「 ϕ 東大の学生」などのように表現として「すべて」というふうには強調していないし、意識して「1部」とも制限していない。しかし、(90)の「この本棚の大部分の本」のように「～の大部分」、「ほとんど」などはっきりと表現しても「定」の名詞句として理解されるわけである。定冠詞を有する言語の場合は必ずこういう場合も定冠詞を使う傾向がみられる。

(91)のような場合、『坊っちゃん』という具体的な1つの実在物しか存在しないとは言えない。『坊っちゃん』の厳密な意味を別として、『坊っちゃん』という夏目漱石の有名な作品を指し、どの出版社でも、どの版でも、日本語の元本であっても、スペイン語訳であっても、これだけ日本文学のベストセラーであるので、多くの具体的な『坊っちゃん』というラベルのついている実在物がある。しかも、そのラベルがついているだけという条件ならば「定」として処理されることになる。

厳密な基準とゆるい基準の大きな違いは、厳密な基準の場合はその「集合」の要素の1つ1つが決まっており、実際に存在している実物であるのに対して、ゆるい基準の場合はその要素は実際に存在していなくてもよいという点にある。特に、「その条件を満たすすべての実在物ではなく、意識的にその部分集合しか指さない場合は、その名詞句は「不定」となる」の部分が必要である。

またはその集合の要素の存在は未確認の場合も考えられる。例えば、

- (92) φスペイン人の征服者はφ新大陸でφエルドラドを探していた。
- (93) φ私はφ火星人を信じない。
- (94) φ神は、すべての人々を愛する。

(92)の「金」がたくさんあると言われていた幻の「エルドラド」は、実際には存在しなかったようである。仮に、存在したとしても一般的に認められている事実ではない。そして、もし聞き手が「エルドラド」の伝説を知らなければ、「不定」と思われるかも知れないが、まず頭の中で具体的な集合を作ることができないので、どの基準にも当てはめられない。実際にこの場合は「エルドラド」の意味が分からないとしか考えられず、コミュニケーションの失敗になりうる。または、「エルドラド」の伝説を知らなければ、話し手に直接聞くことにより、「エルドラド」の「条件」を知ることができる。そういう場合はゆるい基準のために「定」として扱うことができる。しかし、「エルドラド」の意味が分からなくても、固有名詞であることぐらいは形式上では判断しやすい。固有名詞の論理としては、その名前の付いている実在物を指すので「定」になる。

同じように(93)の「火星人」は、その存在の証拠はないが、話題になることは多いにちがいない。しかし、「火星人」の意味が曖昧であっても例えば日本語の話し手ならばある程度のイメージがあり、少なくともそのイメージを指すことになる。

(94)の「神」の場合、神を信じる人にとっては動かない事実であっても、無神論者は神の存在を否定するわけである。また、神の存在の「科学的な証拠」がなくても神学では「神の定義」があるようである。もし、その定義に当てはまるようなものがあるならば、それは「神」であるという。これは興味深いことである。つまり、存在の証拠がなくても、なんらかの

「基準」・「イメージ」のようなものがあり、言葉上では存在しているものとして扱うことになる。

また、性質の異なる名詞句もある。そのもの自体が存在するかどうかは問題ではなく、中心になる名詞が存在してもその条件を満たすものがあるとは限らない場合である。例えば、

(95a) ϕ冷蔵庫の中に「腐った野菜」があったら、捨ててください。

(96a) 「明日来るお客さん」にこのパンフレットを渡してください。

(97) 「この記録を上回る選手」しか ϕオリンピックへ行けない。

(95a) の場合は、おそらく「冷蔵庫に腐った野菜があるだろう」と心配して、誰かに腐った野菜があればそれを捨てるように言う。ただし、厳密に言えば、その冷蔵庫を開けてみないと実際に「腐った野菜」があるかどうか断言できない。また、実際に腐った野菜があった場合にどういう具体的な「腐った野菜」を捨てればいいのかということについては問題ではない。もちろん、「すべての腐った野菜」を捨てることになる。従って、ゆるい基準により「定」と解釈する。

この(95a) の場合は、もし実際に「腐った野菜」があるならば、当然それを調べても調べなくても、以前からその「腐った野菜」があるはずである。つまり、話し手が話している時点では「腐った野菜」がすでに存在している。が、(96a) の場合、「明日来るお客さん」は、実際にはその「お客さん」となる人が現在すでに存在していると一般的に解釈できるが、「明日来るお客さん」という名詞句は、「明日来る」という条件付きなので、明日まで待たなければ「明日来る」と判断できるものではない。それ

は、論理的に言えば、明日必ずお客さんが来るという保証はないからである。つまり、「明日来るお客さん」という名詞句の解釈は「明日来るだろう」と想定しているだけである。

(95a) の場合の「腐った野菜」と「明日来るお客さん」の現在における存在は、実用的に（語用論的に）判断できても、日本語では形式的には現われにくい。他の言語では、その存在を表わす限定辞以外の表現の方法がある。スペイン語の場合は接続法を利用して現わすことができる。例えば、

(95b) Tira las verduras pasadas que están en el frigorífico.

（冷蔵庫の中に（実際に）ある腐った野菜を捨ててください。）

(95c) Tira las verduras pasadas que estén en el frigorífico.

（冷蔵庫の中にある（かもしれない）腐った野菜を捨ててください。）

(96b) Entrega estos panfletos a los clientes que vienen mañana.

（明日来るお客さんにこのパンフレットを渡してください。）（絶対に来るという前提）

(96c) Entrega estos panfletos a los clientes que vengan mañana.

（明日来るお客さんにこのパンフレットを渡してください。）（絶対に来るとは限らない表現）

(95b) と (96b) の動詞 (están と vienen) は「直説法」(Modo Indi-

cativo) で、「las verduras pasadas」(腐った野菜)と「los clientes」(お客さん)のそれぞれの主語は「定」である。そして直説法を利用しているので、その主語により現われる実物は実際に存在しているし、(96b)の場合は「明日来るお客さん」が存在する上に「来ること」も事実として扱う。それぞれの話し手は頭の中に具体的な「腐った野菜」と「お客さん」を描いている。つまり、「腐った野菜の集合」と「お客さんの集合」が内包的に決まる。従って、その名詞句は「定」となっている。そしてスペイン語の場合は実際に「定冠詞」がついている。が、(95c)と(96c)の場合は動詞(estén と vengan)が「接続法」(Modo Subjuntivo)で、それぞれの主語(「腐った野菜」と「お客さん」)の存在は確かではない。つまり、それぞれに「腐った野菜がないかも知れない」と「明日お客さんは来ないかも知れない」というニュアンスが含まれているわけである。にもかかわらず、主語には定冠詞がつき、「定」の名詞句となっている。この場合はゆるい基準により「定」になる。日本語には接続法のような言語的なメカニズムはないが、具体的な言語に依存しない「定」の基準を設けるには重要なヒントを与えてくれる。

(95a)、(96a)と同様に、(97)の場合は、オリンピックに出場するための権利を得るには条件がある。陸上などの場合は、厳しい条件があり、必ずしもどの国も代表選手を派遣できるとは限らない。その選手の存在の有無とは無関係に、この名詞句も「定」として解釈されることになる。

厳密な基準を満たさなければ、外延的にその集合の要素がはっきりしていないことになる。が、厳密な基準を満たさないということだけでは、その名詞句が「不定」であることを判断するには不十分である。それは以上で論じたようにゆるい基準しか満たさない「定」の名詞句もあるからである。「不定」の名詞句は両方の基準を満たさない。具体的例で見てみよう。

- (98) 「たくさんの学生」がいた。
(99) 今朝、 ϕ 本屋で ϕ 本を買った。
(100) 「某大学の某教授」がそう言った。
(101) 「ある日」突然 ϕ 会社へ行かなくなった。
(102) 私は「2人の娘」がいる。

(98)～(102)の例では、「たくさんの学生」、「本」、「某大学の某教授」、「ある日」、「2人の娘」のような情報だけでは具体的な「集合」は形成されない。(99)、(100)、(102)のような場合、具体的な「集合」が話し手の頭の中だけにはあるかも知れないが、聞き手の頭の中に同じ「集合」を形成するのは無理である。そのために、これらの名詞句はすべて「不定」となる。

「定」か「不定」かが決まるのには、話し手が意図的に「定」として表現し、そして聞き手も「定」として受け取らなければならない。例えば、(100)のように、話し手が「某大学」や「某教授」を形式的に「不定」として表現しながらも、頭の中には具体的な大学の具体的な教授を考えている。そして、聞き手も「不定」の表現を聞いても、事前の知識により、どの具体的な大学のどの具体的な教授を指しているかがはっきりと分かっている可能性も充分にある。この場合は話し手の頭の中にある「教授の集合」と聞き手の頭の中にある「教授の集合」が同じ集合になる。

このように、(82)の「幸代」の例のように形式的には固有名詞であっても「不定」になる可能性もあり、(100)の「某大学の某教授」の例のように形式的には「不定」と思われても「定」になることもある。従って、本論文で主張しているように、形式と機能をはっきりと区別しなければならない。

また、注意したいのは、「 ϕ 花」、「あの花」、「赤い花」、「庭の花」のそれぞれの限定方法は異なる。「赤い花」や「庭の花」の「花」は、「

赤い～」、「庭の～」などにより修飾されるが、このような修飾は意味的な制限（花→赤い花、花→庭の花；コセリウが言っている「局限」（*delimitación*）に当たる）が行われるが、「あの花」の「あの～」の指示のはたらきとは異なる。同じように「 ϕ 花」の場合は「局限」ではなく、「定」か「不定」かが問題である。そのために、局限された名詞句は、局限されるだけで、その名詞句が「定」か「不定」かを判断することは不可能である。

従って、「定」か「不定」かの判断は、局限という操作だけでは不可能である。

そして、「ゆるい基準」の性質のために集合の要素になるための条件を満たしても、「意識的に部分集合」を指すならば「不定」となる、というふうに基準に加えた。次の例を見てみよう。

- (103) 「4000円以下の入場券」は売り切れだ。
- (104) 「4000円以下の入場券」を買ってきた。
- (105) ϕ 神保町の古本祭りでは ϕ 本が安く買える。
- (106) ϕ 本屋へ行って、 ϕ 本を買った。

(103) と (104) の場合は両方とも同じ「4000円以下の入場券」という名詞句があるが、(103) の場合は「すべての4000円以下の入場券」を指すので「定」となり、(104) の場合は「4000円以下の入場券」を「1枚～数枚」程度と解釈するならば「不定」となる。名詞句の構造が同じであっても、利用される単語が同じであっても「定」に関しての働きはだいぶ異なることがある。(105) と (106) の場合も同様である。(105) の場合の「本」は「神保町の古本祭りのすべての本」を指すので「定」となり、(106) の場合は数冊程度になるので「不定」になる。つまり、「不定」になる場合は「すべての4000円以下の入場券」、「すべての本」で

はなく、その部分集合に当たる「数枚の入場券」や「数冊の本」である。

(103) ~ (106) の例は、「すべて」か「1部」かが分かりやすい。それは常識というものがあるからである。また、重要なのは「不定」の場合は、はっきりと「すべて」を否定することになる。(104) も (106) も「すべての入場券を買った訳ではない」、「すべての本を買った訳ではない」というふうに理解される。この意識の働きは非常に重要である。厳密に言えば、(87)の「日本人」、(88)の「田園調布に住んでいる人」、(89)の「東大の学生」、(90)の「この本棚の大部分の本」の場合は、その条件を満たすすべての実在物が100.00%入っているわけではないが、意識的に、その集合の1部を除外することはない。もちろん、厳密に言えば「1部を除いて」ということを意識して、「不定」として表現することもありうる。同じ状況ならば「定」の限定辞と「不定」の限定辞のある言語は両方の用法ができる。「定」の限定辞を使う場合は「1部を除いて」という意識をせず、「不定」の限定辞の場合は「1部を除いて」、「すべてはそうではない」のような意識が強い。例えば、

(107) The students of Tsukuba University are very smart.

(108) Some students of Tsukuba University are very smart.

(107) の定冠詞は「1部を除いて」ということは強調せず、むしろ「すべての筑波大学の学生」に近いようなニュアンスになるが、(108) の場合は some を使うことにより「1部」であることを意識した表現である。もちろん、この場合は、some に stress (強勢) を置くと、具体的な学生を指示し、「定」になることもある。

そして、最後に、「定」にも「不定」にも当てはまらない場合で「誤解」になった場合である。例えば、

- (109) A : 今日はφ鈴木君と会った。
B : φ鈴木君? φ鈴木和夫君?
A : いいや。「野球部の鈴木君」だよ。
- (110) A : 「φ机の上にある本」を持ってきてくれる?
B : これ?
A : 違う、違う。φ机じゃなくて、「φ椅子の上の本」。
ごめんなさい。

(109) や (110) のような場合は多く考えられる。その誤解の原因は一見して「定」に見えても実際に話し手と聞き手のそれぞれ考えている「集合」が異なるところにある。

このような「誤解」の場合は特徴がある。例えば (109) の A が言いたい「鈴木君」は、B が想像するのと違うが、形式上では固有名詞を利用しているので「定」と思われる。しかし、本稿の「定」の基準のために「定」にはならない。本稿の基準に従って言えば A が後で「野球部の鈴木君」と説明したときに初めて「定」となる。本稿の「定」の基準では「理解の流れ」を中心にしたいので、「誤解」として処理した方が便利だと思う。もちろん、「誤解」にぶつかった場合はなんらかの形でその誤解を解決しなければならないわけである。その解決の方法に付いては本稿の目的以外であるのでふれないことにする。本稿の基準では誤解したままでは「定」とも「不定」とも処理しない方がいいと見ている。

(110) の場合も形式上では「机の上にある本」という「条件」を言っているのでゆるい基準では「定」と判断できるが、A が出した条件と実際に意味したい実在物（「椅子の上の本」）が違うので（失言などのために）誤解が生じる。(109) の例と同じように「椅子の上の本」と説明したときに「定」と判断した方がいい。しかし、誤解が解決されない間に「定」として臨時的に扱われることには違いがない。そのために、ゆるい基準の

場合、はっきりした条件のある名詞句は形式上では「定」と解釈してもよい構造になる。しかし、(109)と(110)のように、形式だけで決まらないことは明かである。スペイン語など、定冠詞のある言語の場合は、冠詞の誤用は誤解を招くことになるのが明かである。例えば、

(110b) A : ¿ Me traes el libro que está sobre la mesa?

B : ¿ Este?

A : No, no. No es el de la mesa sino el que está sobre la silla. Perdón.

(110b)のスペイン語の場合(英語、フランス語も同様)は、本(*libro*)に定冠詞の *el* がついている。つまり、形式上では「臨時的に」誤解であることが分かるまで「定」として扱われることになる。

本稿で挙げた、「定」か「不定」かを判断するための2つの基準とも、冠詞、指示詞などの言語的な道具を利用していない。しかし、いくつかの自然言語の「限定」においてのメカニズムを観察すると、例えば必ずしも定冠詞がついていればその名詞句が「定」となるとは限らないことが分かる。不定冠詞の場合も同様である。不定冠詞がついていても「不定」となるとは限らない。それぞれの自然言語においてはあらゆる「限定」、「定」などのメカニズムがみられる(cf. Krámský, 1972)。実際に自然言語の限定辞には複数の機能があったり、また限定辞以外の言語的な道具も「限定」のメカニズムと関わるので、「定」についての判断の基準は具体的で言語的な道具に依存させることは無理である。しかし、反対に言えば、ある具体的な自然言語においての具体的な限定辞の持っている機能・働き・用法を明らかにしなければ、言語形式、意味、意図などの関係は当然分からない。「定」と「不定」という範疇のメカニズムを観察して、その判断は「形式」だけの問題ではないことが分かる。「定」か「不定」かを判断

するための基準はその具体的な自然言語のあらゆる実用的な（語用論的な）特徴にも強く依存していることが分かる。

特に冠詞の場合、機能と形態を区別しなければならない。指示詞の場合は機能的な「曖昧さ」があるので、誤解になる可能性もある。例えば、指示詞の認識について Ertel（1975）は、次の実験を行った。被実験者にカードを渡し、そのカードには柵が描いてあり、その柵の手前に Gisela という女性がいて、柵の向こう側に Inge という女性がいます。そして、この2人の女性のいちばん手前に1人の話し手がいて、「柵の手前にいる女性を迎えに行く」というような文を言う。そこで、被実験者は、だれを指しているかを判断する。ほとんどの被実験者が、Gisela と答える。また、次の実験では話し手が柵の向こう側にいるなら、同じ文でも解釈が違ってくる。58%の被実験者は Inge だと答え、42%の被実験者はまだ Gisela のことを指していると判断する。つまり、58%の被実験者は、話し手の座標を基準にしたが、42%の被実験者は自分の座標を基準にして判断した。この実験で、空間の指示が常に主観的だということが分かる。前提、認知などが働いているので、指示詞の形態だけでは判断しにくいので、誤解になるのは明かである。こういう場合は、聞き手が「定」として判断しても、場合により、その判断を誤まることになり、同じ実在物を指さないのので、筆者の設けた基準により「誤解」になる。

もちろん、指示詞の曖昧さの誤解と冠詞の誤用のための誤解は違う。

定冠詞の用法に限って言えば、それぞれの言語の冠詞は共通している機能があっても、共通していない機能も多くあり、その言語の全体的な構造・スタイル的な要素などとの深い関わりがある。（英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語の冠詞の用法の相違については、Wandruszka（1969）XIII章～XV章を参照）

例えば、

- (111a) ϕ Chloroform was so scarce now it was used only for the worst amputations and ϕ opium was a precious thing, used only to ease the dying out of life, not the living out of pain. (W, 199)
- (111b) El cloroformo era ahora tan escaso que se usaba sólo para las amputaciones y el opio era algo precioso, usado únicamente para facilitar la muerte a los moribundos y no para aliviar a los vivos. (西語)
- (111c) ϕ Chloroform ... ϕ Opium. (ドイツ語)
- (111d) Le chloroform ... l'opium. (フランス語)
- (111e) Il cloroformio ... l'opio. (イタリア語)
- (111f) O clorofórmio ... o ópio. (ポルトガル語)

(111a) ~ (111f) は、Wandruszkaが挙げている例で、同じ文とその翻訳を比較し、「素材」を英語とドイツ語で表現した場合は冠詞を付けないが、スペイン語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語の場合は定冠詞を付ける。

しかし、冠詞の用法の違いはゲルマン語派とロマンス語派と、簡単に分けることができない。同じ語派内でも用法の違いもある。例えば、

- (112a) I got the money. (W, 415)
- (112b) Conseguí el dinero. (スペイン語)
- (112c) Das Geld. (ドイツ語)
- (112d) L'argent. (フランス語)
- (112e) Il denaro. (イタリア語)
- (112f) O dinheiro. (ポルトガル語)

(112a) ~ (112f) の場合は、the money はすでに知っている決まった金を指し、予想通り定冠詞が付くが、具体的な金を指さない(113a) ~ (113f) を観察すると英語だけは無冠詞である。

(113a) Times had changed, ∅ money was scarce. (W, 438)

(113b) Los tiempos habían cambiado, el dinero era escaso.
(スペイン語)

(113c) Das Geld. (ドイツ語)

(113d) L'argent. (フランス語)

(113e) Il denaro. (イタリア語)

(113f) O dinheiro. (ポルトガル語)

また、ロマンス語派内の用法の相違もある。例えば、(114a) ~ (114f) のように、フランス語以外のロマンス語派は「愛」のような、不定量の精神的な性質を無冠詞で表現する。この場合、英語とドイツ語はフランス語以外のロマンス語派に似ている。

(114a) Aber trotz allem, was sie da gesagt hatte, sah er in ihren Augen doch Liebe, und auch der Schmerz auf ihren zuckenden Lippen war ∅ Liebe. (ドイツ語)

(NG, 115)

(114b) Pero a pesar de todo lo que ella haba dicho allí, vio en sus ojos amor, y también el dolor que habia en sus labios temblorosos era ∅ amor. (スペイン語)

(114c) He could see the love in her eyes. Even her grief on her trembling lips was ∅ love.

(114d) Il découvrit dans ses regards de l'amour, et la

douleur aussi qui faisait trembler ses lèvres était de l'amour. (フランス語)

(114e) Egli vedeva nel suo occhio l'amore; e anche la sofferenza che le contraeva le labbra era ϕ amore. (イタリア語)

(114f) Via-lhe amor nos olhos e era ϕ amor também o sofrimento dos seus lábios trémulos. (ポルトガル語)

このようにそれぞれの言語の冠詞の用法は完全一致するわけではない。また、同じ語派でも用法がかなり異なることがある。

従って、具体的な「限定」のメカニズム、そして「定」と「不定」という範疇のメカニズムを明らかにすることは、その具体的な言語の構造との深い関係があるので、非常に困難である。定冠詞の用法は非常に限られた問題であるが、以上見てきたように、言語によってかなり異なる。「限定」における共通点があっても冠詞の用法と「定」の概念を別々に研究した方が便利であろう。そのために、具体的な言語に依存しない「定」と「不定」という範疇の基準を設けた訳である。

これからますます実用段階に入っていくAI（人工知能）、自動翻訳、心理学など、あらゆる応用言語学の分野においては「限定」のメカニズムは非常に重要な問題になるにちがいない。それぞれの分野における自然言語の理解が欠かせないものであるので、より具体的に、より実用的に研究を進めなければならないわけである。

また、「定」の問題は心理的な要素が多いので、ほかの学問との関係を見捨てることはできない。「定」との関係は後で示すように、特に学習心理学、記憶のメカニズム、論理学、人工知能などとの関係が深い。

本論文は、日本語という具体的な自然言語における「 ϕ 」という具体的な言語的道具の「定」と「不定」についてのはたらしきに焦点を合わせ

ているので、「定」の定義をしてから、記憶の構造との関係を調べる手順をとった訳である。記憶の構造について多くの研究があるが、ここでは「定」の問題との関わりに限って論じることにする。しかし、その前に「定」と発話中の語彙の意味関係の限界について論じる。

2. 2. 語彙の意味関係と「定」

1. 8. で述べた「ひっかけり」のメカニズムは、「限定」のメカニズムを説明するのにはある程度有効である。発話中に出現した語彙的な言語記号（単語）とほかの言語記号との関係が鍵である。

しかし、Hawkins が言う "the associates"（関連語）の基準はない。Hawkins の表現が思わせるのは、「同義関係」、「反義関係」などのような語彙と語彙の意味的な関係であろう。Hawkins は "the associates" の解釈は読者にまかせるようなかたちをとるが、その関係の性質については論じる余地はかなり残されている。

次に、言語記号間の意味関係は「限定」・「定」のメカニズムを明らかにするには役立つとは限らないということを示すことにする。例えば、

a) 同義関係 (synonymy)

「同義関係」の厳密な定義に従わなくても、2つの語彙が同義関係である場合は、最初に出現した語彙が必ずしもその次に出現する同義語彙が「定」か「不定」かを判断するのには役立つとは限らない。例えば、

- (115) 先週の火曜日、山田さんがφ奥さんと一緒に家に遊びにきたが、「φ妻」と会うのは初めてだったので紹介

- (116) 一 昨日は、 ϕ 妻と一緒に日光へ行きましたが、……
 一 ϕ 奥さんですか？ ……
 一 ええ。

「 ϕ 奥さん」と「 ϕ 妻」はゆるい解釈では同義関係であろうが、厳密に言えば同義関係ではない。(115)の場合は「 ϕ 奥さん」は「山田さんの奥さん」を、「 ϕ 妻」は「私の妻」を指すので「 ϕ 奥さん」と「 ϕ 妻」は同人物ではない。もちろん、「 ϕ 奥さん」も「 ϕ 妻」も「定」であるが、それは同義関係のためではなく、日本語の「妻」と「奥さん」の使い分けとして「自分の」と「他人の」と解釈ができ、状況上でははっきりしているからである。そのために(116)の場合は、同じ「 ϕ 奥さん」と「 ϕ 妻」という同義語が出現しても、状況上では同じ人を指すことになる。

b) 反義関係 (antonymy)

「既婚者 \leftrightarrow 独身」、「男性 \leftrightarrow 女性」のような意味の対立性は、必ずしも「定」か「不定」かを定めるための基準にはならない。例えば、

- (117) このクラブの入会金は ϕ 独身は1200円で、 ϕ 既婚者は1500円です。
 (118) この会社では ϕ 男性は営業、 ϕ 女性は事務を行なっています。
 (119) よい人は天国へ行き、悪い人は地獄に行く。
 (120) このクラブは ϕ 既婚者だけのクラブなんだけれど、ときどき ϕ 独身のゲストも来るよ。
 (121) 「営業の男性」が、仕事の後ビアホールに飲みに行ったら、 ϕ 女性が多くてびっくりした。

(122) カトリック信者でも「よい人」ばかりとは限らない。
悪い人もたくさんいる。

(117) では「 ϕ 独身」と「 ϕ 既婚者」が反対語であっても「 ϕ 独身」の出現は「 ϕ 既婚者」の「定」を決めるとは言えない。「定」となる基準は「 ϕ 独身」も「 ϕ 既婚者」も「ゆるい基準」のためにそれぞれ「どの独身も」と「どの既婚者も」という解釈ができるからである。

(120) の場合は(117)と同様に「 ϕ 独身」と「 ϕ 既婚者」という名詞句が出現するが、この場合は「 ϕ 既婚者」の出現は「 ϕ 独身」の「不定」を決めない。(120)の「 ϕ 独身」という名詞句が「不定」になるのは、クラブのゲストになるのは「独身であること」という条件を満たすすべての人を指さないからである。「独身」という集合の1部しか指さない常識が働くわけである。そういう常識は発話中に出現する名詞句の反義関係とは無関係である。むしろ、「知識の体系」との関係が強いと言った方がよい。しかし、「知識の体系」は言語学の研究対象ではない。そのために、後で述べるように「人工知能」(AI)(知識、記憶、などのメカニズム)からのアプローチは有意である。

(118) では「 ϕ 男性」と「 ϕ 女性」という反対語が出現するが、両方とも「定」であるが、互いに反対語であること自体は「定」か「不定」か決まることはない。この場合「定」になるのは、それぞれ「この会社のすべての男性」と「この会社のすべての女性」という具体的な集合を指すからである。また、同じ反対語が出現する(121)の場合、「営業の男性」が出現しても、「 ϕ 女性」が「不定」であることと無関係である。この場合、「 ϕ 女性」が「不定」として解釈できるのは、「どこどここのだれだれか」分からない「女性」を指すからである。

形容詞でその名詞句を修飾する場合も同様である。例えば、(119)の「よい人」と「悪い人」は、互いに「反義表現」であるが、それぞれ「す

すべてのよい人」と「すべての悪い人」と解釈できるので「定」であるのに対して、(122) の場合は「よい人」という名詞句がの出現は「悪い人」の「不定」を決めない。(122) の「悪い人」という名詞句が「不定」になるのは、意識的に「カトリック信者の1部」を指すからである。

つまり、発話中に出現した言語記号の反対語が出現しても、それらの名詞句が「定」か「不定」かは決まらない。以上で見たように、互いに反義表現であっても、場合により「定」であったり、「不定」であったりすることがある。

c) 連想 (association) と「限定」

Hawkins が言う "the associates" (関連語) は、一般的に「連想した語」として解釈できるが、果してある名詞句が「定」か「不定」かを判断するのに、すでに出現した名詞句との連想関係で決まるかどうか、筆者はすぐ後で例(123)～(127)によって示すように否定的である。

ギリシアのプラトンが連想の現象を指摘してから現在に至るまで多くの研究がある。あらゆる連想(概念連合、association of ideas; 継時連合、successive association; 同時連合、simultaneous association; 隣接連合、adjacent association; 遠隔連合、remote association; 直接連合、immediate association; 間接連合、mediate association など)の中で、語と語との間の連合は「語連想」(word association)と呼ばれている。連想の実験をするにはいくつかの基準(連想反応時間、associative reaction time; 自由連想法、method of free association; 制限連想法、method of controlled association など)が心理学の分野で提案され、語連想の構造はある程度調べられるようになった。

例えば、スローピン(1971)は、語連想について心理学者ジェームズ・ディーズ(1965)の『言語と思考における連想の構造』の研究を検討し、

次のようなことを述べている。

『語連想実験の基本的な方法は、多数の被験者に語のリストを提示し、各刺激語に1つの反応語で答えるように教示することである。そこで、各刺激語にたいする反応リストと各反応の出現頻度が得られる。……

目下のところ最も興味深い問題は、最後に述べた連想された語をどう分類するかという問題である。連想語を分類するのにこれまでいろいろの試みがおこなわれてきた。例えば、ジョージ・ミラーは次のようなリストをあげている。(1951、179頁)

反意：湿った—乾いた、黒い—白い、男—女

類似：つぼみ—花、痛み—苦痛、すばやい—速い

従属：動物—イヌ、人間—父

対等：りんご—もも、イヌ—ネコ、男のおとな—男の子

上位：ほうれん草—野菜、男のおとな—男性

類音：pack(包み)—tack(びょう)、bread(パン)—red(赤い)

部分—全体：花卉—花、日—週

完結：前へ—進む(前進)、黒い—板(黒板)

自己中心性：成功—私がしなければならない、孤独—決してそうではない

語派生：走る—走ること、深い—深さ

断定：イヌ—ほえる、部屋—暗い

この分類は精巧におこなわれているが、これをどう伸ばしていくのか、分類項目をどう決定するのか、それがどこで終わるのかといった

疑問が残る。ミラーはなかば問題を放棄し、次のように結論している：「明らかに、語は驚くほどのいろいろな方法でお互いが関係づけられている。」いろいろな分類がおこなわれているなかで、なんらかの意味属性や次元を表わす試みがされているが、今のところまだ満足できるものではない。ディーズによれば、語連想自体の資料からは、実際にはこういった分類を明らかにすることはできない。彼は次のように指摘している。

この分類体系は、ある程度、心理学的、また論理的であり、さらにある程度、言語学的、哲学的（認識論的）でさえある。これらの分類法は、むしろ連想過程以外のところにその根拠をもち、理性なき力によってその過程に適応されることが多い。それらは、物理的世界の構成に見解はもちろん、文法やいろいろな種類の辞書、さらに心理力学説にみられる諸関係を連想というものに含ませようとしている。（1965、22頁）

ディーズ自身（ジェンキンス、コーファー、ボースフィールドなどの心理学者とともに）は、ある語にたいする反応を単にそれだけを切り離して考えるのではなく、語が連想される全体の網状組織に関心をもってきた。』

つまり、語連想は一筋縄にはいかず、あらゆる形式をとる。したがって、Hawkins が言う "the associates" は、はっきりしたものではなく、すべての連想された語は連想されるだけで「定」か「不定」か決まるとは言えない。むしろ、連想された語であっても多くの場合は無関係である。

例えば、

- (123) この湿ったタオルを干して、乾いたタオルをください。
- (124) あなたは花が好きなので、このつぼみを持ってきた。
- (125) 田舎でたくさんの動物を飼っていた。犬も飼っていた。
- (126) りんごも安かったが、ももを買ってきた。
- (127) 野菜を食べないとだめだよ。ほうれん草を食べなさい。

(123) ~ (127) の例では、反意、類似、従属、対等、上位といったタイプの連想しやすい語が出現しても、どの例でもそれぞれの名詞句が「定」か「不定」かを定める基準との関係が認められない。

例えば、(123) の本文中「湿ったタオル」というNPが出現し、その後「乾いたタオル」というNPも出現する。しかし、[湿った-乾いた]が「反意関係」であっても、両方のNPの「定」か「不定」かの判断とは無関係である。

(124) の場合は、「花」と「つぼみ」という「類似関係」のNPが出現するが、「花」の出現は「つぼみ」を限定せず、「つぼみ」の出現も「花」を限定しない。

同様に、(125) の「動物」と「犬」の「従属関係」であるNP、(126) の「りんご」と「もも」という「対等関係」であるNP、(127) の「野菜」と「ほうれん草」という「上位関係」であるNP、すべて「定」か「不定」かを判断するための材料にはならない。

やはりディーズが言うように、ある語に対する反応を単にそれだけを切り離して考えるのではなく、語が連想される全体の網状組織に関心をもって、研究を続けなければならない。しかし、語連想の相互関係は、言語学の限界を乗り越えて、心理学の分野になる「記憶」(memory)のメカニズムを調べなければならないわけである。

2. 3. 記憶の構造と「限定」

記憶の構造は、言語学の分野ではないが、「限定」の問題と深く関連していることは否定できない。従って、本稿では記憶の構造を追求せず、心理学の分野における記憶についての理論、実験の結果を言語学の分野で応用できる範囲で論じたいと思う。

まず、記憶モデルを見てみよう。

2. 3. 1. 記憶モデル

James, W. (1890) が記憶の機能を分析し、primary memory (1次記憶) と secondary memory (2次記憶) に分けて以来、大脳生理学者の Hebb, D. O. (1949) が short-term memory (短期記憶) と long-term memory (長期記憶) を提案するまで、本格的な研究が行われず、それ以後現在にいたるまでは、いくつかの記憶のモデルが提案されてきた。

記憶の研究に大きく貢献した数多くの研究者 (Broadbent, D. E. (1958)、Waugh, N. C. and Norman, D.A. (1965) など) がいるが、代表的な研究では Atkinson, Richard C. and Shiffrin, Richard M. (1968) のがある。

アトキンソンとシフリンの記憶モデルは、sensory register (感覚登録器)、short-term store (短期貯蔵庫) と long-term store (長期貯蔵庫) から構成されている。基本的には次のようである。

感覚器官が外的刺激を受け入れ、新しい情報の入力によって置き換えられるので、減衰する (decay) 前、1秒以内にその情報が感覚登録器で保持される。しかし、ここでは情報の解釈も符号化も行われぬ。短期貯蔵庫では、感覚登録器からの情報を、注意によって特定の「特徴」を抽出し、

短時間で情報が処理される。そこで、意識を伴って意味や特徴が符号化される。また、意識的に注意するならば、その情報を保持することができるが、注意をしなくなる（15秒～30秒）と、その情報が消えてしまう。リハーサルにより処理された情報が、長期貯蔵庫で長期間にわたり保持される。もちろん、自然に減衰することもある。

この過程は図13のように表わすことができる。

この記憶モデルは、その後多少修正された（*Craik, F. I. M. and Lockhart, R. S. (1972)*、*Shiffrin, R. M. and Schneider, W. (1977)*を参照）が、現在の記憶モデルの代表的な構造である。

記憶の研究は意味の問題と結ばれ、*semantic memory*（意味記憶、意味論的記憶）という概念が提案された。*Tulving, E. (1972)*は、「個人的な経験とその期間的な関係」を *episodic memory*（エピソード記憶）とし、また「言語記号、概念、概念の分類の意味についての情報を受け入れ、保持し、伝達するためのシステム」を *semantic memory*（意味記憶）と呼んで区別した。これらのシステムはまさに頭の中の世界のモデルのように考えられている。

意味と記憶の研究が進み、人間の情報処理モデルが電算機で作れるようになった。

Quillian, M. R. (1968, 1969) ; *Collins, A. M. and Quillian, M. R. (1969)* の *hierarchical-network model*（階層的モデル）；*Smith, E. E., Rips, J. L. and Shoben, E. J. (1974)* の *feature-comparison model*（特性比較モデル）のようなモデルは単語の意味表現との検索過程を扱う。

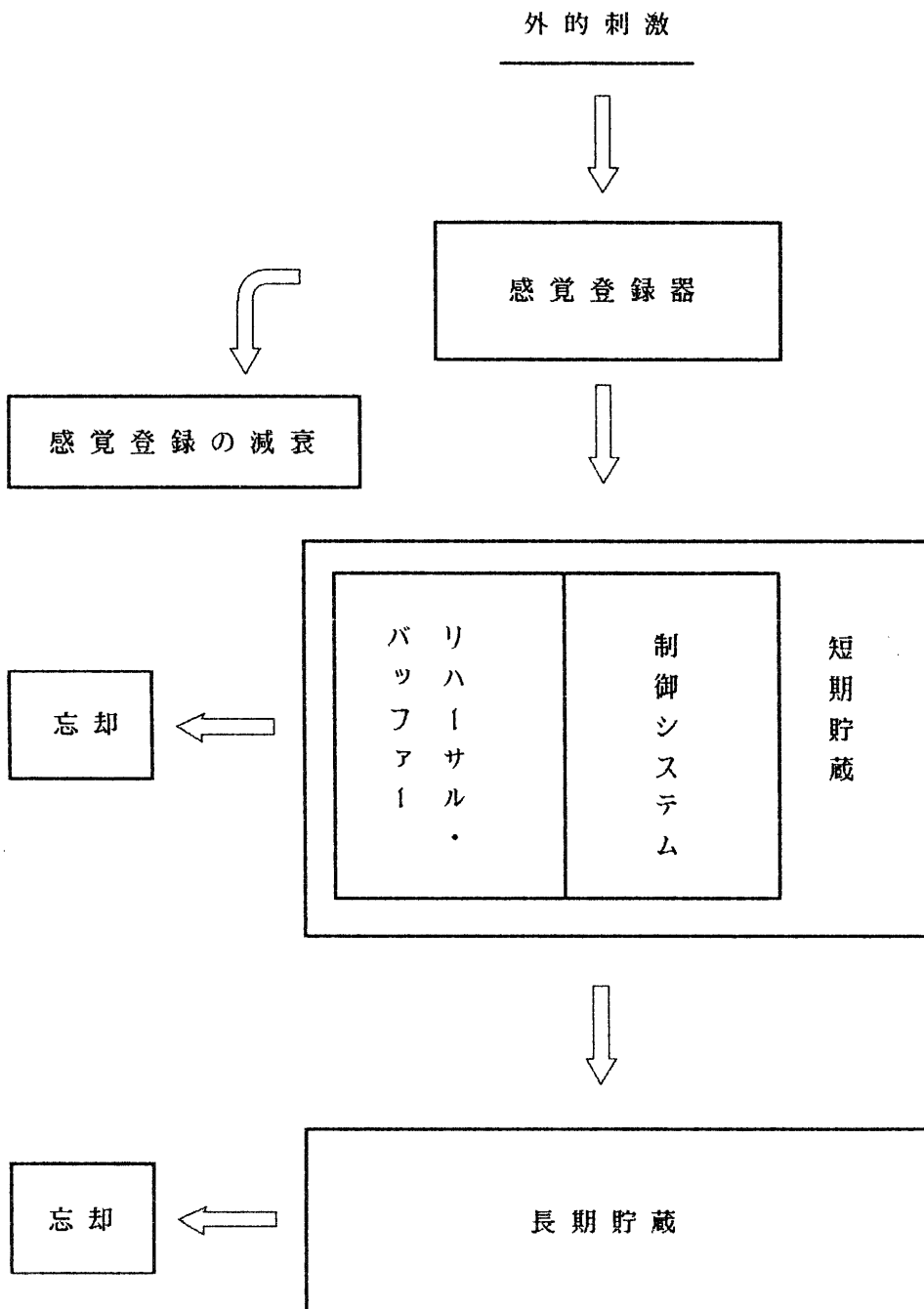


図 1 3 記憶モデル

しかし、単語の意味表現だけでは、意味記憶の構造が分からないので、Winograd, T. (1972) は、電算機と英語で対話できる「SHRDLU」(構文分析、意味処理と論理的な分析が含まれるプログラム)を提案した。この研究は人工知能(Artificial Intelligence, AI)ともつながるわけである。

この分野では、Fillmore, C. J. (1968) の case grammar (格文法) に基づいてつくられた、Rumelhart, D. E., Lindsay, P. H. and Norman, D. A. (1972) の人間の記憶をシミュレーションするモデルが挙げられる。このモデルはいくつかの解釈処理のほかにデータ・バンク(情報貯蔵庫)から構成される。

さらに、Anderson, J. R. and Bower, G. H. (1973) は Human Association Memory (HAM、人間連合記憶)を提案した。このモデルは、実験的に有意的なデータが得られる上に電算機で動く。この連合的なモデルでは文の具体的な単語は、「長期貯蔵庫で保持されている概念」と結びつき、さらにその概念は1) ISA(～である)と2) DO(～する)という基本的な2つの関係(relation)で結ばれている。

心理学の分野では、この類の多くの研究がおこなわれ、いずれも意味記憶の構造を主眼にしているが、言語学ではこの知識はほとんど利用されていないのが現状である。

筆者は日本語の「 ϕ 」という限定辞の「定」と「不定」の用法を説明するために、このような意味記憶の研究の流れの中の、特に Schank, Roger C. (1975) の conceptual dependency theory (概念依存理論) と Schank, Roger C. (1980) の M O P s (Memory Organization Packets) の理論を、本稿では言語学の分野で応用したいと思う。そのために、まずシャンクの理論を簡単に紹介しておく。

2. 3. 2. M O P s のモデル

Schank, Roger C. (1980, p. 189) は、M O P s を、次のように説明している。

"A MOP is a packet of knowledge that can be called into play for initial processing and memory storage. Thus, a MOP is a bundle of memories organized around a particular subject that can be brought in to aid in the processing of new inputs. All the subjects that we have considered so far have been events. Thus, MOPs are used insofar as we have described them for understanding and storing event-based information. The criteria we have been using for determining what can be a MOP has depended on the following questions:

1. Why is the information contained in that MOP contained there and not anywhere else?
2. How can we search that MOP?
3. What is the output (i.e., what is at the end of the strands) of that MOP?
4. How is that MOP known to be relevant and subsequently accessed?
5. What kind of processing help (i.e., what predictions are made) is available from having accessed that MOP?"

つまり、M O P というのは、記憶貯蔵庫で保持可能な、処理できる知識の束である。そして、新しい情報の入力をする時にその情報を呼び出すことができる。M O P は、心理学、情報学、人工知能などの問題でもあるが、

言語学においては「限定」、そして本稿では特に日本語の「 ϕ 」という限定辞の「定」と「不定」という範疇のはたらきを理論付けるために役立つと思う。特に5番目の「処理助力」(processing help)の点に注目したい。MOPの情報を利用して得られる「処理助力」により、文の解釈(理解)を予測(predict)することが可能であるので、MOPは言語学上で大いに役立つ概念である。

次にMOPの理論を理解するためのいくつかの概念を簡単に見てみよう。

a) 概念依存 (Conceptual Dependency, CD)

与えられた文章の動詞を基本行為記号の構造に還元し、その文章の要素(行為者、行為、属性、場所、原因、結果など)の関係をCD形式(Conceptual Dependency Form)で記述する。これは、一種の知識表現と考えるてもよい。CDは、文章からの推論を可能にする。

例えば、I gave the man a book. (私はその人に本を与えた)は図14のように記述することができる。(リッチ、1983を参照)

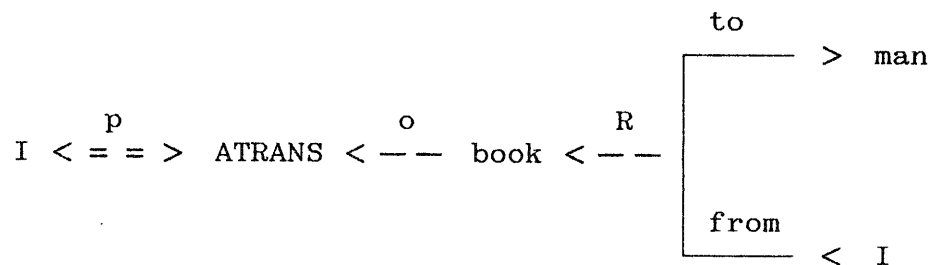


図14 「私はその人に本を与えた」のCD形式

各記号は次のような意味をする。

a) 矢印は、依存関係の向きを表わす。

- b) 二重矢印は、行為者と作用間の両方向リンクを示す。
- c) p は過去時刻を示す。
- d) ATRANSは、この理論で用いられている素作用の1つであり、
所有の移動を示している。
- e) o は対象格の関係を示す。
- f) R は受容格の関係を示す。

基本動作は、次のようなものがある。

- ATRANS 抽象的関係の移動（例えば、与える）
- PTRANS 対象の物理的位置の移動（例えば、行く）
- PROPEL 対象への物理的力の作用（例えば、押す）
- MOVE 所有者による体の一部の動き（例えば、ける）
- GRASP 行為者が対象をつかむこと（例えば、投げる）
- INGEST 動物が対象を食べること（例えば、食べる）
- EXPEL 動物の体から何かを排除すること（例えば、叫ぶ）
- MTRANS 知的情報の移動（例えば、告げる）
- MBUILD 古い情報から新しい情報を作ること（例えば、決める）
- SPEAK 音の生成（例えば、言う）
- ATTEND 刺激に向かって感覚器官を向けること（例えば、聞く）

また、4つの基本的な概念カテゴリがあり、依存構造はこれから組み立てることができる：

- A C T 行動
- P P 対象（画像発生部（picture producers））
- A A 行動の修飾語（行動補助部（action aiders））

P A P P の修飾語（画像補助部（picture aiders））

このような知識表現は、Schank（1968）にとっては、言語学で一般的に使われている S = N P + V P という形式から出発するより現実的である。それは、次のような理由がある。

(128) I hit Fred on the nose.

(129) I hit Fred in the park.

(128) と (129) を理解し、正しく処理するには C D 形式は便利である。統語論的には [on the nose] と [in the park] の区別は現れにくく、「鼻」が Fred の一部であることと「公園」は Fred の一部ではないことを表わす方法もない。そういう意味で文の意味、要素の関係などを理解するには C D 形式が優れている。

Schank（1972）は、Fillmore（1968）の格文法との比較をし、その重要な相違を指摘しながら、このような関係を conceptual cases と呼んだ。

さらに、Schank がこのような要素と要素の関係を Micro-CD と Macro-CD レベルに分けた。

b) スクリプト (script)

C D 形式を利用し、常識的に当然なされる行為や、自然な場面展開をスクリプト (Schank, R. C. and Abelson, R. C. (1977) を参照) という形でまとめる。スクリプトは「条件」、「もの」、「結果」という3つの要素から構成される。

例えば、

スクリプト： 「レストランに食事をしに行く」

「条件」： 「客がおながが空いていること」、
「客が金を持っていること」など

「もの」： 「テーブル」、「椅子」、「メニュー」、
「食事」、「金」など

「結果」： 「客は満足する」、「客の金が減る」
「レストランの経営者の売り上げが増える」など

と考えられる。

そして、「出来事の連鎖」で表現する。例えば、

[入る]

レストランに入る。

テーブルを探す。

どこで座るかを決める。

テーブルに行く。

座る。

[注文する]

メニューを頼む。

メニューを見る。

食事を選ぶ。

ボーイが来る。

食事の注文をする。

ボーイがメモをとる。

料理が来るまで待ち、しゃべったりすること。

料理人が食事を作る。

[食べる]

料理人がボーイに食事を渡す。

ボーイが客に食事を持って来る。

客が食べる。

しゃべる。

[去って行く]

ボーイが勘定の計算をする。

ボーイが客に勘定を渡す。

客が勘定を調べる。

チップの計算をする。

チップを置く。

自分の持ち物をとる。

勘定を払う。

去って行く。

このようにある出来事を分析し、関わっている要素の関係をさらにCD形式で記述するのは言語学の目的ではない。が、このような分析から得られる情報があれば、文をより正しく理解することになる。特前に見たように、ある名詞句が「定」か「不定」かを判断するには、まず発話中の要素の相互関係をつかまなければならない。そういう関係を明らかにするには前に見た同義関係、反義関係、連想の諸種類が不十分なので、人工知能が提供してくれる方法が便利であるにちがいない。

c) 記憶のレベル

Schankは次のような4つの記憶のレベルを想定している。それぞれのレベルを例を出しながら説明する。

EM Particular dental visits are stored in event memory (EM). These visits decay over time and thus are not likely to last in EM for a very long time. Rather, what will remain are particularly unusual, important, painful, or otherwise notable visits or parts of visits. These particulars are stored at the EM level.

GEM At the level of General Event Memory (GEM), we find the information we have learned about dental visits in general that is applicable only to dental visits. Thus, "sitting in the waiting room" is not stored at the GEM level. The reason it is not stored at that level is clear; the lack of economy of storage would be fearsome. We know a great deal about office waiting rooms that has little to do with whether or not they were part of a dentist's office. In addition, any abstraction and generalization mechanism that we posit is likely to be so powerful that it would not be likely to stop operating at any given level. Thus if commonalities between DENTIST and DOCTOR are brought to its attention, it would naturally produce this result.

SM In Situational Memory (SM) resides information about a situation in general. Here is where we find the kind of knowledge that will include facts such as "nurses wear white uniforms," "doctors frequently have many rooms so that they can work on lots of patients at

once," "there are history charts that must be selected and updated by women in white outfits who might not actually be nurses," etc. We also find information such as the flow of events in an office, for example. Thus, the bare bones of the dentist script and, most importantly, many other scripts are found in SM. Here we have information such as: "If you need help you can go to the office of a professional who gives that help. You may report your problem to an underling of the professional's. You will get a bill for services, etc."

IM Intentional Memory contains more goal-based memories. Trips, romances, improving one's health, and other general contexts whose immediate goals are known are IM structures. Intentional Memories organize inputs according to their reason for existence. As a consequence of this, memory confusions at the IM level involve different situations whose intentions are the same.

それぞれのレベルの例の中の出来事をまとめると次のようになる。全体的にすべての要素間の関係が表わせる複雑な網状組織になる。

IM HEALTHPROBLEM

FIND PROFESSIONAL + MAKE CONTRACT
+ PROFOFFICEVISIT

SM GO TO OFFICE + WAITING ROOM + ENTER INNER OFFICE
+ HELP + LEAVE + BILLSSENT

GEM Dentist visits include:

getting teeth cleaned - dentists puts

funny tooth paste on teeth

turns on machine

etc.

getting teeth drilled

D does x-ray

D gives shot of novocain

D drills

etc.

also: Dentists fill the health care professional
role in HEALTHCAREVISIT

EM The time I went to the dentist last week:

I drove to the dentist.

I read Newsweek. There were holes in all the
pictures.

I entered.

He cleaned my teeth.

He poked me in the eye with his drill.

I yelled at him.

He didn't charge me.

ここでは、MOPの心理学的なはたらきは論じないが、言語学では「限定」、「定」と「不定」という範疇などを正しく理解するためには知識の処理モデルが必要なので、本稿で応用する。

2.3.3. 「 ϕ 」限定辞と名詞の分類。

まず「 ϕ 」限定辞をつけることができる名詞の種類を見てみよう。「相互限定」では言語記号の意味的な特徴が関わっているので、まず語彙的な意味のある名詞の分類からはじめたいと思う。

英語の文法では、一般的に名詞を

- (1) 普通名詞、
- (2) 集合名詞、
- (3) 物質名詞、
- (4) 抽象名詞、
- (5) 固有名詞

の5つのグループに分けている。そして、(2)以下の名詞は複数形をとらない、固有名詞は冠詞を伴わないなどの特徴がある。

日本語は名詞の文法的な下位区分として立てられているのは、実質名詞と形式名詞がある。例えば、

- (130) ϕ 中国へ行ったことがない。
- (131) ϕ 子供の頃、この広場でよく遊んだものだ。
- (132) ϕ 太郎は合格するはずがない。

(130)～(132)の「こと」、「もの」、「はず」などのような形式名詞があり、一般の名詞のはたらきとは異なる。形式名詞には「 ϕ 」がつく

ことはないので、本稿では扱わないことにする。

形式名詞以外は、教科研東京国語部会・言語教育研究サークル編の『語彙教育』によると、

『名詞は、「具体名詞 — ものや人などを示すもの」と「抽象名詞 — 動作・性質・関係などを示すもの」にわかれる。』

と説明している。そして、さらに分けると次のようになる。

1) 具体名詞

a) 人

例：兄、お客、病人、スター、学生、よっばらい

b) 組織・団体（土地、建物をも意味することが多い）

例：会社、国家、ホテル、海軍、球団

c) 生物

例：犬、つばめ、けもの、あさがお、バナナ

d) 生物の体

例：あたま、足、毛、心臓、葉、根

e) 自然物

例：山、川、空、石、酸素、銀

f) 製品・道具・建造物

例：紙、板、洋服、パン、針、自動車、橋、汽船

g) 抽象名詞との境に、現象をあらわすつぎのような一群が

ある。

例：光、かげ、色、音、におい、火、風、雨

2) 抽象名詞

a) 動作・作用

例：発生、中止、増加、練習、記述、失敗、援助、建設、
誘惑、承知、そうじ、ひっこし

b) 精神

例：心、意識、心配、自身、知識、思い出、概念、欲

c) 言語作品

例：名まえ、ニュース、うわさ、和歌、法律

d) 性質

例：美、悪、寒さ、欠点、みかけ、はば

e) 関係

例：縁、原因、条件

f) 方角・位置

例：東、横、前、右、中心、はし、外、南極

g) 数量

例：三つ、25、いくつ、ひとり、分数、メートル、半分、
50グラム

h) 時・ばあい

例：きのう、来年、日曜、メーデー、機会、戦後

しかし、このような分類方法については「あまり積極的な理由がない。どのような分類がほんとうに適切かは、これからの研究課題である。（名詞の下位分類が全然必要ないなどというのは、名詞の研究をすてるにひとしい。）」と、説明されている。

このように、現在までの日本語の名詞の分類の基準は「限定」の観点から言うと、あまり役立たない。そのために、まず、「ひっかかり」関係にある「 ϕ 」限定辞を利用した名詞の場合の、「定」か「不定」かのはたらしきによって分類してみたいと思う。

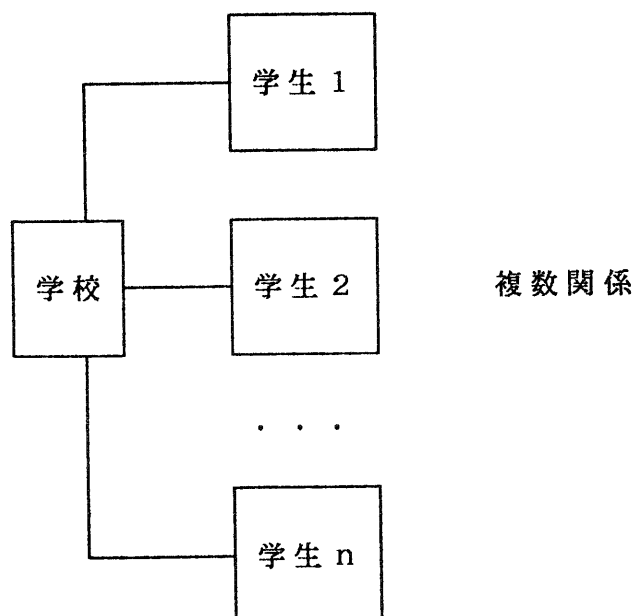
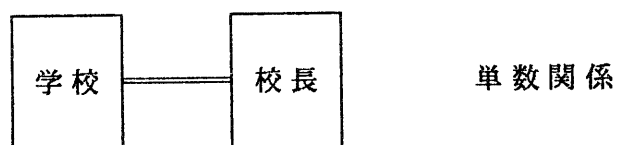
1) 単数・複数

ここで言う単数は文法的な範疇ではなく、「意味的単数関係」を言う。具体的な例で示すことにする。例えば、

(133) 今朝、 ϕ 学校へ行って、 ϕ 校長と話した。

(134) 今朝、 ϕ 学校へ行って、 ϕ 学生と話した。

「学校」には普通1人の「校長」がいるという相互関係にあるために、「学校」と「校長」(単数)が「ひっかかる」。そして、同じように「学校」には複数の学生がいるので「学校」と「学生」(複数)も「ひっかかる」。



このような関係は、隠れた数量化のメカニズムでもある。例えば、日本語に単数・複数という文法的な範疇がなくても「ギターを弾く」という動作は、「弾く人」を1人要求する。つまり、[ギター：弾く人]は、単数関係である。そのために、例えば、「太郎がギターを弾く」の解釈は「太郎は1つのギターを弾く」になる。同様に、[座布団：座る人]も単数関係であろう。それは、一般的に人が座布団に座るとき、1人1つの座布団を使うからである。例えば、「太郎と花子が座布団に座った」は「太郎は1つの座布団に、花子はもう1つの座布団に座った」という解釈になる。もちろん、1つの座布団に2人が座ることができるが、そういう場合は「太郎と花子が同じ座布団に座った」のように表現するだろう。しかし、ベンチとなれば、[ベンチ：座る]の関係は違う。例えば、「太郎と花子がベンチに座った」は「太郎と花子は同じベンチに座った」という解釈になる。

[ギター：弾く人]、[座布団：座る人]などは不特定のギター、不特定の座布団などと考えられるが、セットになっている場合もあるので、その解釈に影響がある。例えば、[人：頭]は単数関係にあり、「太郎が頭を洗った」は「太郎は自分の1つの頭を洗った」という解釈になる。ただし、この解釈だけではない。例えば、太郎が理髪師ならば、「他人の頭を洗った」という解釈になる。このために、この関係は解釈に影響を与えるだけである。つまり、predominantな解釈になる。

このようなものとももの関係は、隠れた数量化のように働き、文の解釈の重要な材料にもなる。

この分類は、単数・複数という文法的な範疇のない日本語の「 ϕ 」のはたらきを明らかにするには非常に重要である。それは、[学校 \leftrightarrow 校長]のような「単数関係」ならば「 ϕ 」限定辞の場合に「定」の解釈になるからである。そして、[学校 \leftrightarrow 学生]のような「複数関係」にあるならば、さらに文脈を見なければ「定」か「不定」か判断できない。もし「全体」を

指すならば「定」になり、1部を指すならば「不定」になる可能性もある。例えば、(43)のように「 ϕ 職員を紹介してやるから」という、全体を指すような状況であると(この場合は「紹介する」と「職員」の「相互限定」による)「定」になる。それは、新任の教師が来るならば、ほかのすべての教師や職員を紹介するという常識が働くからである。

もし、「ひっかかり」関係にある名詞が「複数関係」で、「相互限定」によって「全体」を表さないならば、「不定」になる。例えば、(134)の「 ϕ 学生」は、学生と話すときに必ずしもすべての学生でなければならないということではないので、「 ϕ 学生」の解釈は「不定」になる。同じ理由のために(135)の「 ϕ トイレ」は「不定」になる。それは「トイレに入る」という動作は、普通「すべてのトイレ」ではなく、「1つのトイレ」に限るし、決まった具体的なトイレに入るとも限らないからである。ただし、学校でペンキ屋さんがトイレを塗るならば、全てのトイレを塗ることは十分に可能であり、(136)の「 ϕ トイレ」は「学校のすべてのトイレ」と解釈できるので、「定」になる。

(135) ϕ 学校へ行って、 ϕ トイレに入った。

(136) ϕ 学校で、 ϕ ペンキ屋さんが ϕ トイレを塗った。

この区別は「限定」の観点から言えば非常に重要で、「個別」を指すか、そうでなければ「全体」を指すことになる、というところが鍵である。

「 ϕ 」という限定辞の働きは次のような分類にも関わる。

2) 加算名詞・不加算名詞

加算名詞ならば、上記の単数・複数の区別ができるが、不加算名詞ならば、「不定」になる傾向が強い。例えば、

(137) ϕ 泉へ行って、 ϕ 水を飲んだ。

(137) の場合、「 ϕ 水」の解釈は具体的不加算名詞で「 ϕ 」限定辞なので「不定」になる。(この場合は英語、スペイン語など冠詞のある言語は「 ϕ 」冠詞、または some などのような「不定」の限定表現を使うことが多い)

しかし、不加算名詞であること自体は「不定」と解釈する一番重要な理由ではない。不加算名詞が「ひっかけり」関係にある場合は「全体」を指さない場合が多いからである。(137) のように [泉 \leftrightarrow 水] のような「ひっかけり」関係があっても「すべての水」を解釈することはない。

また、抽象名詞(美、原因など)、集合名詞(国家、海軍など)の一種は「定」になることが多いが、それは抽象名詞のためではない。不加算名詞と同じように「ひっかけり」関係にある場合は「全体」を指すことが多いからである。また、漠然とした抽象名詞は総称的な用法があるからである。例えば、

(138) ϕ 美についての感覚は ϕ 人それぞれ違う。

(139) ϕ 原因がどこにあるかを考えよう。

(140) ϕ 国家が ϕ 国民に対してなにをしてくれるかが ϕ 問題だ。

(141) ϕ 海軍と ϕ 空軍の制服は違う。

(138) の「 ϕ 美」の用法は意識して美を部分的に除外しているわけではないので、漠然とした場合は「美」のような抽象名詞は「 ϕ 」で「定」として限定されることは多い。(139) の「 ϕ 原因」は、何かの出来事が生じるには、何んらかの原因が考えられる。その原因が単数であっても複数であっても「すべての原因」という解釈ができるので「定」として解釈

できる。また、(140) の例のように「ひかっかり」関係のために決まった「国家」に対して決まった「国民」があるので「定」と解釈ができる。また、おなじように集合名詞で(141) の「 ϕ 海軍」、「 ϕ 空軍」も国が決まっていたらその「海軍」も、その「空軍」も決まっているにちがいない。そのために「定」と解釈できる。

3) 1つの意味的な単位になる慣用句内の名詞の場合

例えば、

(142) ϕ 人が多くて、「 ϕ 動きがとれない」。

(143) 「 ϕ 風邪をひかないで」、ね。

(144) 彼女と話し合って「 ϕ 仲がよくなった」。

(142) の「 ϕ 動き」、(143) の「 ϕ 風邪」、(144) の「 ϕ 仲」などのような場合は、「どの動き?」、「どの風邪?」、「どの仲?」のような質問は意味をなさない。同様に、意味的に1つの名詞と言うよりほかの品詞と組合せて、1つのより大きい意味的な単位になる。こういうタイプの表現はどの言語にもあるし、日本語には例えば、「 ϕ 世話をする」、「 ϕ 年をとる」、「 ϕ 礼を言う」、「 ϕ 腹が立つ」、「 ϕ 腰を掛ける」、「 ϕ 釣りに行く」、「 ϕ 腹が黒い」、「 ϕ 荷が重い」、「 ϕ ピンから ϕ キリまで」、「 ϕ なしのつぶて」など多くある。

もちろん、表現により「 ϕ 太郎の世話をする」、「あなたの腹が黒い」などの例は必ず「 ϕ 」限定辞とは限らない。このように名詞が修飾される場合は、その解釈が異なることがある。「あなたの腹が黒い」は、文字通り物理的にその人の腹の色が黒いということになる。このように慣用句の中に出現する名詞は2通りの解釈がありうる。

この種類の名詞は「限定」の観点から言うと、具体的なものを指す機能はなく、動詞の内容を明確にさせるためである。「定」になるか「不定」になるかを考える必要はない。つまり、現示化していない名詞である。あるいは、もっと正確に言えば名詞としての現示化の作業の意味はない。動詞などと一緒になりひとつの意味的な単位を作ると考えた方がよい。

冠詞のあるあらゆる言語の場合はこういった表現は場合によって1つの動詞（例：「風邪をひく」はスペイン語で、resfriarse）で表現したり、不定冠詞または定冠詞、 ϕ 冠詞を伴ったりすることがある。そういう場合も限定の観点から言えば、どの具体的な限定辞を使っても、その統語論的に複雑な単位の1部になっている名詞は「定」か「不定」かの機能を考える必要がない。もちろん、日本語を具体的な外国語と比較するときのように訳せばいいかなどは別問題であり、日本語の「限定」の内的な問題だけではないことは確かである。

このような名詞の存在のために「品詞」、「形式」を改めて、その基準、機能などを考え直さなければならない。基本的に成句の構成要素としての名詞は「現示化」の操作と無関係である。

また、次のような接頭語のついている名詞の場合もある。

4) 「限定」的接頭語のついている名詞

例えば、「元首相」、「旧制度」、「某大学」などの場合は、「 ϕ 」限定辞を伴うと考えても差し支えないが、その接頭語の意味的なはたらきによって限定的な効果もありうることも忘れてはいけない。

もし、このような接頭語を限定の観点から分類してみると、次のようなものがある。

「定」の接頭語

- 「今」：「今世紀」、「今学期」
- 「現」：「現文部大臣」、「現大臣」
- 「新」：「新社員」、「新時代」
- 「元」：「元首相」、「元衆議院議員」
- 「旧」：「旧制度」、「旧姓」
- 「前」：「前参議院議員」、「前大統領」
- 「当」：「当会館」、「当社」、「当人」
- 「本」：「本館」、「本人」、「本国」
- 「別」：「別館」、「別記」、「別冊」、「別紙」
- 「副」：「副学長」、「副社長」
- 「次」：「次長」、「次女」
- 「初」：「初優勝」、「初孫」、「初詣」、「初体験」

などがある。また、注意したいのは「今世紀」、「今学期」、「本館」、「初孫」、「当会館」のように、「今～」、「本～」、「初～」、「当～」などは必ず「定」になるが、「現文部大臣」のように1つの実在物を指すと「定」になり、「現大臣」の場合は、状況により1つの実在物を指すこともあれば、複数の実在物を指すこともある。ただし、「次長」のように、具体的な会社により1人しかいなければ、その1人を指し、「定」と解釈できるが、次長が2人以上いて、すべての次長を指すならば「定」になり、その一部を指すならば「不定」と解釈しなければならない。

「不定」の接頭語：

- 「某」：「某大学」、「某教授」

「幾」：「幾年月」、「幾人」

「数」：「数本」、「数人」

これらの接頭語のような場合は、必ず「不定」と解釈しなければならない。

2. 3. 4. 名詞の「限定」と動詞の意味的な特徴

また、名詞の「限定」はその名詞だけではなく、その発話の動詞も関わる。動詞には語彙的な意味のほかにアスペクト、時制などがあるので文の解釈への影響が大きい。ここでは、「限定」の観点から言えば、どのような特徴を考慮に入れなければならないかを調べたいと思う。

1) 完了の形式

過去の形式は、ある具体的な状況を指すので「限定」の観点から言うに興味深いことである。それに対して、現在形のように具体性のない時制もある。例えば、

(145) 私は、 ϕ うどんが好きだ。

(146) 私は、 ϕ うどんを食べた。

(147) 私は、 ϕ 手紙をよく書く。

(148) 私は、 ϕ 手紙を書いた。

例文で分かるように同じ名詞でも同じ ϕ 限定辞でもその動詞の時制により「限定」の仕方が異なる。

(145) の例は、現在形の「好き」という動詞のために「うどん」は、「うどんというもの」、「どのうどんも」のような解釈になる。

(147) の「手紙」も、現在形の「書く」という動詞のために「不特定多数の手紙」のような解釈ができる。しかし、(146) の「うどん」と(148) の「手紙」は、それぞれ「食べた」、「書いた」の完了形のために、「そのときのうどん」、「そのときの手紙」などのような漠然とした解釈はできない。

2) 否定・肯定

(149) 私は、 ϕ 手紙を書かなかった。

(148) の肯定の場合は肯定であるために「 ϕ 手紙」は少なくとも話し手にとって具体的な手紙を指す(特定)が、(149) の場合は否定であるために具体的な手紙は存在しない。この場合は「不定」と言うより現示化していないと見た方が適当であろう。

3) 疑問

(150) ϕ ケーキを食べましたか？

(150) のように疑問文の場合はケーキの存在の前提はない。聞く人の思い込みということもありうる。例えば、喫茶店で会う約束をした人が遅れてきて待っていた人に(150) のように聞くこともあり、また、どこかのデパートでケーキの試食をやっていて、その場でのアンケートの質問ということもある。このように文の曖昧さが残るので、ほかの要素(言語的でも非言語的でも)に頼り、解釈しなければならない。

従って、動詞の形式も「限定」に関わることもある。

このように、「 ϕ 」限定辞のはたらきを調べるために限定から見た名詞の分類は役立つに違いない。そのために、「限定」の観点から言えば、日本語のすべての名詞の特徴を知る必要がある。言い換えれば、日本語の「限定」用の辞書が必要になって来る。しかし、後で述べるように、そういう辞書の特徴のために名詞だけでは不十分であり、ほかの品詞との関係、日本語を話す話者の「常識」も必要になって来るので、その知識は一種のデータベースの形が理想的であろう。

データベースというのは、情報処理の分野の概念であるが、言語学で効果的に応用できるにちがいない。問題は、そのデータベースはどのような構造がよいか、どういう項目を設けたらよいか、などである。そこで、利用できるのは、心理学、人工知能などの記憶の構造の研究や知識表現の応用である。

2. 4. 「 ϕ 」限定辞と記憶の構造。

本稿の目的の1つは、日本語の修飾されていない名詞句（「 ϕ 」限定辞）のはたらきと記憶のメカニズムとは深い関係があることを示すことである。名詞句の性質と記憶のメカニズムとの関係が明らかになれば、その名詞句は「定」か「不定」かが予想できるようになる。

SchankのMOPの理論によると、いくつかの記憶のレベル（EM、GEM、SM、IM）が1つの記憶の束（MOP）になり、その束の中の要素の関係を利用することにより新しい情報の解釈も可能になる、と説明している。

記憶（特に長期記憶）の内容は、幅広い範囲で他の人との共通知識になっている。例えば、固有名詞がそうである。固有名詞は、特別な使い方（

例：「この俺」、「隣の鈴木さん」、「飛驒の高山」など）以外は「 ϕ 」で「定」と判断できることが多い。しかし、固有名詞の「定」の判断より普通名詞の判断の方がはるかに多くの問題を含む。人間は新しい情報（相手の発話など）を処理するのには、それまでの情報（記憶）を活用させ、処理しなければならない。しかし、その処理過程はほとんど表面（言語形式）に現われないのが普通である。例えば、もし強盗事件について新聞の記事を読んでいて、「 ϕ 犯人はまだ捕まっていない」とあったら、「強盗事件」というのは犯罪であり、必ず「犯人」がいる、というような「常識」（記憶の一種）についてはわざわざ紙面上には書かれていなくても、読者はそれを正しく処理（解釈）できる。このような例は、[強盗 \leftrightarrow 犯人]という関係が「当たり前」であり、この強盗事件の記事を読んで「何の犯人か」分からない読者はいないであろう。もし、読者のなれていないテーマならば、処理できないことも充分にありうる。例えば、相撲の記事を読んで、「負け越して ϕ 親方に叱られた」というような文の理解は相撲のことが分からなければ、職人の場合の「親方」の意味が分かっているとしても、「 ϕ 親方」の解釈はできない。すべての力士のために1人の親方がいるか、あるいは複数の親方がいるか、などが分からなければその文の正しい理解ができないし、具体的に相撲界の[力士 \leftrightarrow 親方]の関係を知らなければ「定」か「不定」かも判断できない。しかし、その知識があれば（長期記憶に）、言語的に表わされなくても、その知識を利用して解釈ができ、「定」か「不定」かの判断もできる。

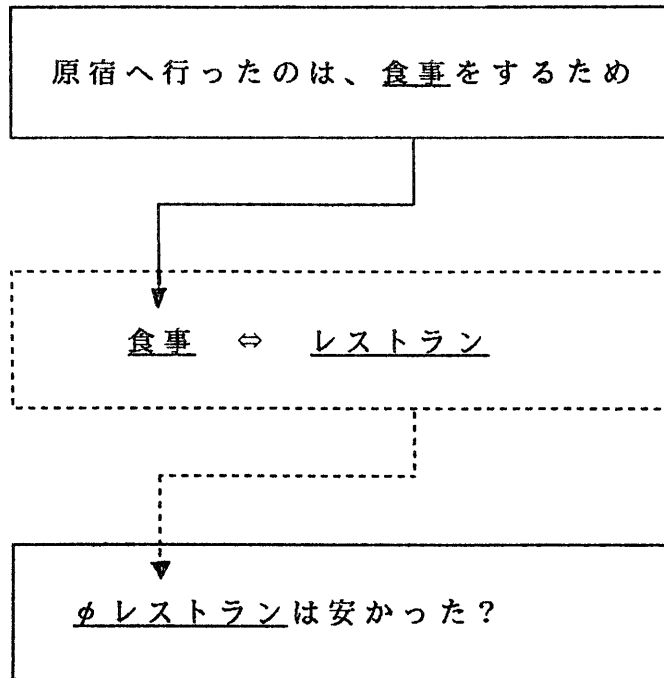
MOPの理論はできごと（event）の構造と記憶の関係の理論を提供してくれるので、心理学、人工知能の分野の理論であっても、言語学でも大いに応用できると思う。具体的な例を見てみよう。

例えば、EM（event memory）（例えば、最近歯医者に行って、待っている間に Newsweek という雑誌を読んでいたこと）は、その時一緒だった人でなければ、相手の記憶にあるはずがない。「歯医者の待合室で News-

weekを読んでいた」という話をするならば、なんらかの形で相手に前もって伝えなければならないわけである。そのために、EMのレベルの情報は普通、first-basis（文脈的にそれまでの発話された部分と直接的に関係のない場合）の名詞句が「定」か「不定」かを判断するのにあらゆる制限があると分かる。

同様にIM（Intentional Memory）（例えば、5月21日、原宿へ行ったのは、かわいい子をナンパするためだった、というようなintentionを含む）は、相手に十分に伝えないと、理解できるはずがない。もちろん、「八百屋さんへ行く」という場合のintentionは、おそらく「野菜か果物を買うため」と想像できるが、その八百屋さんがある近辺を詳しく知っているだろうと予想して、単に「道を聞く」という目的も考えられる。そういった理由のために、EMとIMの内容は、GEMとSMの内容の性質とは異なるので、「定」の判断への影響も異なる。EMとIMの2つの記憶のレベルの場合は、「共通知識の範囲」の面ではかなり狭い。しかし、EMの場合はそのときそのときのできごとによって内容（「花子とデートしたのは6時30分で、ハチ公の前だった」のように）はかなり異なるので、EMの内容を活用させるのには、ほとんど表面言語形式で表現しなければならない。IMの場合は、そのintentionが分かれば、聞き手も自分の記憶のあらゆる情報を活用できる。例えば、「原宿へ行ったのは、食事をするため」というならば、相手は「レストランは安かった？」というふう突然聞いてもおかしくない。しかも、なんの説明がなくても、「レストラン」の解釈は具体的に「君が食事したレストラン」というふう理解できるので、「定」と判断できる。

その過程は図14で表わせる。



I Mの内容を
言語形式で話し手が
表わす

M O Pにより
理解し、言語形式で
表わさず、聞き手が
理解できる。

「φ」→「定」

図 1 4

図 1 4 で示している [食事⇔レストラン] という関係が言語的に表わされていないので、この話の中で初めて出現した「φレストラン」が「定」と判断されるのは M O P (記憶の中の情報) を利用したからである。

S M (Situational Memory) と G E M (General Event Memory) は、心理学上では重要な区別があるが、言語学上では両方とも似たような働きをするので、現在の時点では区別しないことにする。それは、G E M には、情報を経済的に (効率よく) 保持するのには、例えば「本屋で本を買うと、その本の代金を支払わなければならない」、「八百屋でトマトを買うと、そのトマトの代金を支払わなければならない」などのような「情報」は、いちいちすべての店のスクリプトに入れると占める記憶容量が大きすぎるので、「どの店でも何かを買うと、それを支払わなければならない」と 1 回だけ登録した方が効率がよい。複数のスクリプトの共通部分は、G E M に保持し、例えば、「歯医者に行く」、「レストランに行く」というでき

ごとの場合は S M のレベルにはそのスクリプトだけの要素間の関係しか保持しない。しかし、具体的に、どのようなメカニズムで人間の脳が G E M と S M を区別できるかは言語学の問題ではない。もし、自動翻訳、自然言語を利用するようなエキスパートシステムなどのソフトを作るならば、そのアルゴリズム（手続き）を効率的にするには G E M と S M を区別した方が便利であろうが、「定」か「不定」かを判断するのには、結果は同じなので、S M と G E M のレベルの情報を、本稿では同じ扱いにする。

I M と E M を利用する場合は、その情報は具体的な個人、できごとに強く依存している。その情報が短期記憶か長期記憶かは別として、言語学の観点から言えば、E M の場合、その情報を直接に得たり（例えば、一緒に歯医者のところへ行ったので、待合室で Newsweek を読んでいたことを言われなくても、自分で見たので記憶にある）、またはそのできごとを経験した人がその情報を与えたり、あるいは I M の場合、intention を想像したり、本人に知らせたりすることがあるだろう。I M と E M の両方の場合は、言語形式（音声、文字）に依存する部分がある。

しかし、S M と G E M の両方の場合とも、言語形式に依存しないと言える。もちろん、S M と G E M の中にある内容は文化、社会階級、個人などの相違を否定できないが、その内容のほとんどは長期記憶に保存されており、いちいち言語的道具で知らせなくても利用できる。

具体的に、「 ϕ 」と記憶のはたらきを見てみよう。単数関係か複数関係か、加算名詞か付加算名詞かということも注意しなければならない。

例えば、「レストランへ食事をしに行く」というスクリプトの場合、

(151) すみません、 ϕ 水をください。

(152) すみません、 ϕ コーヒーをください。

(153) — ϕ おすすめは？

— ϕ シタピラメをおすすめします。

— ϕ味は？

- (154) ϕ雰囲気がいい、ね。
(155) すみません、ϕ箸をください。
(156) ϕメニューをください。
(157) ϕコックさんは、みなϕフランス人ですか？

(151) と (152) の場合、「レストランに食事をしに行く」というスク립トには、「水を頼む」ことは珍しくないだろうが、「水」は不加算名詞で、「すべての水」とありえないし、必ず注文の中のセットでもない (S MかG E Mを利用する) ので、「部分」を表わすと解釈してもよい。従って、「ϕ水」は「不定」と解釈できる。「ϕコーヒー」の注文の場合も「ϕ水」と同様で、不加算名詞であるが、「水」と違って有料 (G E Mを利用する) で、セットの一部になっていることもよくある。水は無料 (一般的に) (G E Mを利用する) なのでセットの一部にはならない。そのため、「セットの中のコーヒー」ならば「定」と判断できるが、そうでなければ、「水」と同じように「部分」を表わし、「不定」になる。また、コーヒーが注文するセットの1部になっているかどうかを調べるにはそのレストランのメニューを見なければならぬので、E Mを利用する。

(153) のように「ϕおすすめ」を聞くことはよくある。特にあまりいきつけていないレストランだとそうであろう。I M (食事をすること) は、はっきりしているので、「おすすめのテレビ番組」などではなく、「おすすめ料理」と判断しやすい。「すすめ」もスク립トの一部とも考えられるし、その店の「すすめ」も決まっているならば (S MかE Mを利用する)、「ϕすすめ」は「定」と判断できる。ボーイの返事の中の («ϕシタピラメ») は、レストランのスク립トに「シラピラメ」という要素が出るは言えないので、「定」とは判断できない。つまり、「シタピラメ」は、食事のセットの欠かせない要素ではない。どこのレストランにもテーブル、

椅子、食器などがあるが、「シタビラメ」という具体的なものはいつもあるとは限らない。レストランの重要な要素とは認められない。従って、「不定」になる。もちろん、「定」になる状況も考えられる。

(154) の「 ϕ 雰囲気」のような場合は、GEM（[レストラン \leftrightarrow 雰囲気]）にもあるし、スクリプトにもあるので、「定」と容易に判断できる。この場合は、SMではなく、「雰囲気」というのは「レストラン」以外のスクリプト（ディスコ、劇場、ホテルなど）にもあるので、GEMで保持される。

(155) の「 ϕ 箸」の場合は、食事の種類（和食か洋食か）によりセットになっているので（GEMを利用する）、和食（または中華料理など）ならば「定」と判断できる。例えば、うな重を注文してボーイが箸を忘れた場合、うな重は一般的に箸で食べるので[うな重+箸]というセットを意識するならば、ボーイが忘れた箸はゆるい基準によって「定」と解釈できる。そして、そのセットを意識しなければ、どの箸でもよいであろうから「不定」として解釈することもできる。洋食の場合は、少なくとも[料理+箸]というセットがないので、「不定」として処理することになる。

(156) の「 ϕ メニュー」の場合は、その店には1つのメニューしかなくても、そのメニューのコピーは複数であろう。「メニューを頼むこと」は、「レストラン」のスクリプトに入っている（GEMを利用する）ので、「定」と判断できる。どの具体的なコピーを持ってきても内容は同じ（はず）であるので「定」と判断できる。

(157) の「 ϕ コックさん」の場合は、GEMには[どの店にもコックさんがいる]、[複数のコックさんのレストランが多い]、[1人でやっているレストランもある]などのように記憶しているので、加算名詞の「 ϕ コックさん」は、「すべてのコックさん」を指すことになるので「定」と解釈する。また、(157)のように「みな」とつけ加えても、このGEMの前提は変わらないので、勘違い、思い込みのようなこともありうる。

もちろん、そういう場合は単に「誤解」になってしまう。

以上のように、記憶の構造と「 ϕ 」限定辞の出現の関係を観察すると、一見して無関係の要素でも「記憶」上の関係が認められれば「定」か「不定」かを定める有力な材料である。

もし、「 ϕ 」という限定辞の解釈を流れ図 (flow-chart) で表わすならば、図15と図16のようになる。

この流れ図は [ϕ NP] のように修飾されていない名詞句から始まる。これ以外の場合は、具体的な有形の限定辞の用法となる。

固有名詞の場合は、固有名詞の性質という問題もあるが、形式上では固有名詞であっても「不定」として処理する場合もあるので、本質的にも固有名詞として認められた場合は「定」として処理する。

次に、「元～」、「某～」のような接頭語がある場合を処理する時は、その名詞句が「定」か「不定」かはその接頭語の性質により決まることが多い。

そして、その次の文レベルでは本質的にその名詞句は referentiable かどうかを処理する。「 ϕ なしのつぶて」のような名詞句については「定」か「不定」かを処理することは意味をなさないからである。このレベルでは、名詞と動詞の相互関係、動詞の相などによっても「定」か「不定」かの判断が行われる。

次に、NPレベルと文レベルで処理できなかったNPは、談話のレベルではそのNPの前出などによって処理を行う。

最後に、すべての言語的手段を利用して処理できなかった名詞句は非言語的手段で処理することになる。つまり、記憶に access することになる。

もちろん、この流れ図は心理的な過程を反映しない。

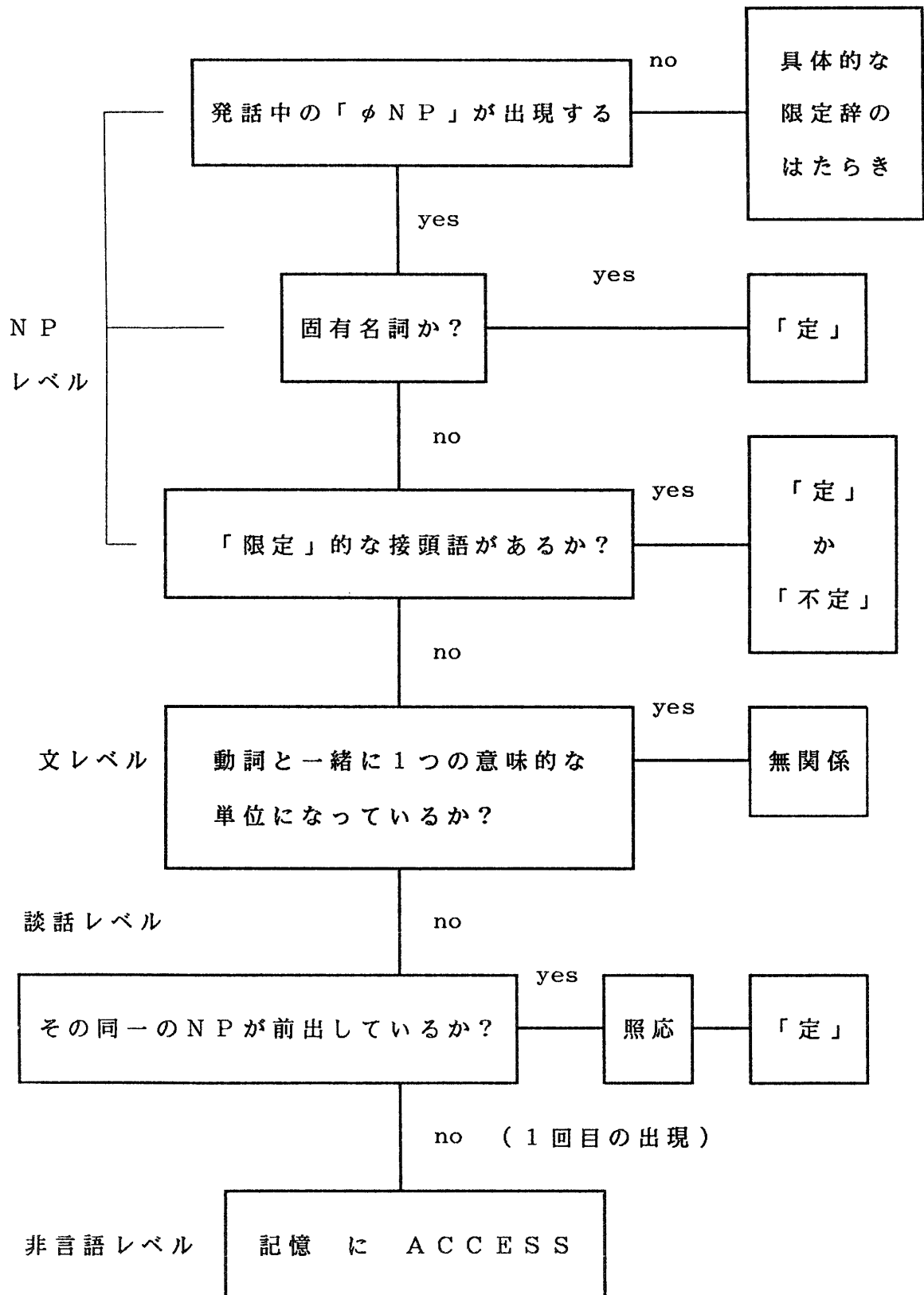


図 1 5 N P の解釈の流れ図

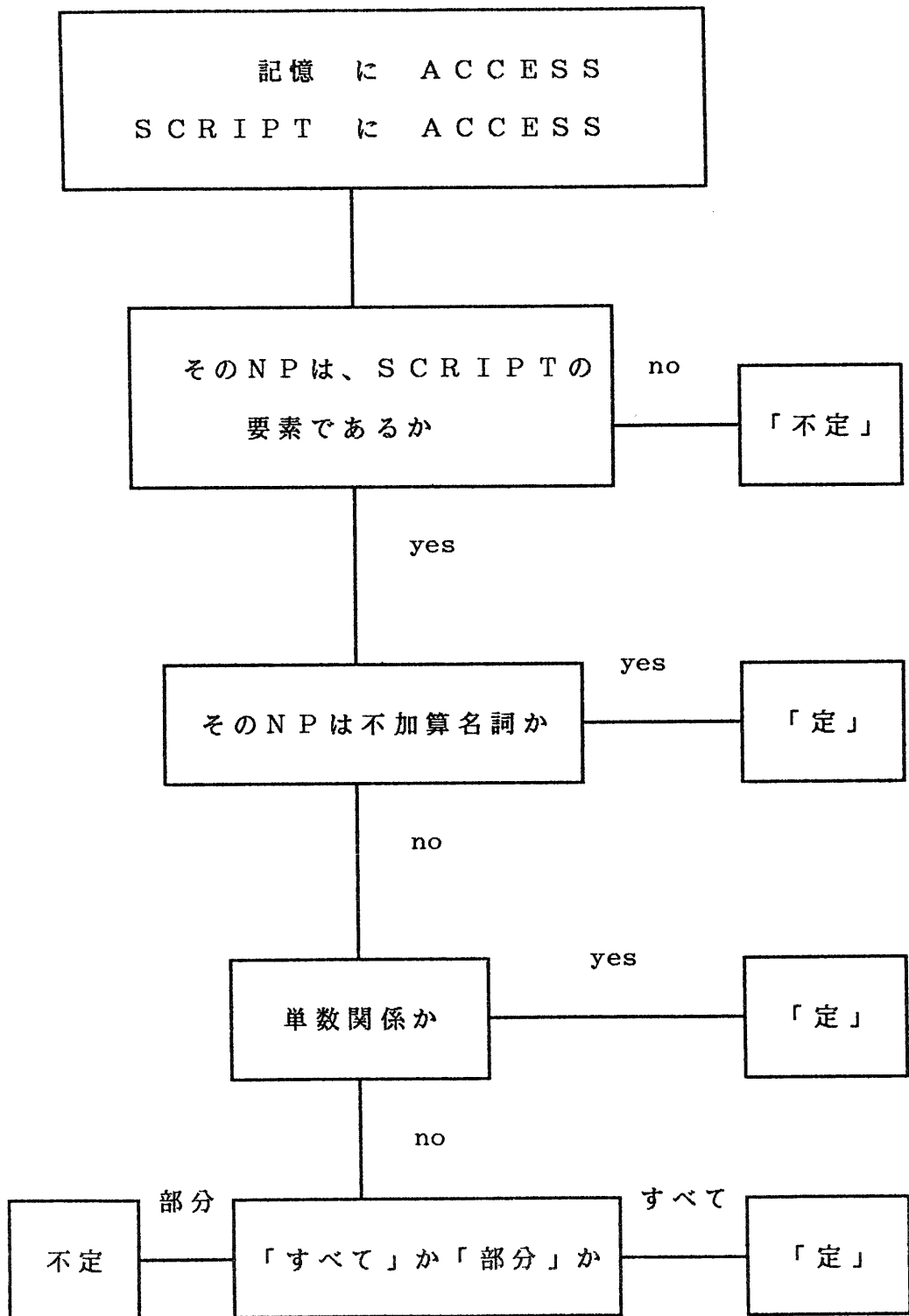


図 1 6 「定」か「不定」かの判断 (つづき)

日本語の修飾されていない名詞句の限定上のはたらきから言うと、その名詞句は、無形の「 ϕ 」という限定辞により限定されるということを前提にして本稿では提案した。

日本語の有形限定辞（「この～」、「私の～」、「ある～」など）は、その限定辞の形によって解釈はある程度可能であるが、無形の「 ϕ 」という限定辞の解釈は大いに意味、そして記憶（知識）の構造に依存している。「 ϕ 」の解釈は「定」と「不定」の両方の場合もあるが、決して珍しい現象であるとは思えない。英語、フランス語、スペイン語などの場合も定冠詞、不定冠詞があっても必ずしもそれぞれ「定」と「不定」の解釈に当たるとは限らない。

無形（zero-form）の言語的な道具は有形の言語的な道具があるからこそ意味がある。また、「定」か「不定」かの基準は形式だけの問題ではないので、記憶にaccessしなければ解釈できない。従って、判断するのにその記憶は不可欠の要素である。

「定」か「不定」かを判断すること自体は非常に自然言語の解釈に於いては重要な問題であるが、その基準は言語学以外の学問に大いに依存している。これからの人工知能、自動翻訳などの応用言語学関連の研究テーマにも必要である。従って、今後の言語学（意味論など）は、こういった言語学以外の学問の知識を取り入れなければならない。もし、こういうことが認められたら、今後の意味論の理論に大きな影響を与えるに違いない。そして、自然言語の解釈をするための記憶の構造の具体的な取入れ方は今後の課題である。話し手（書き手）の発話（文字）だけを聞き手（読み手）が聞き入れ（読み込み）、ほかの情報を利用しないならば、自然言語の解釈は不可能である。解釈の流れは図17のように考えなければならない。

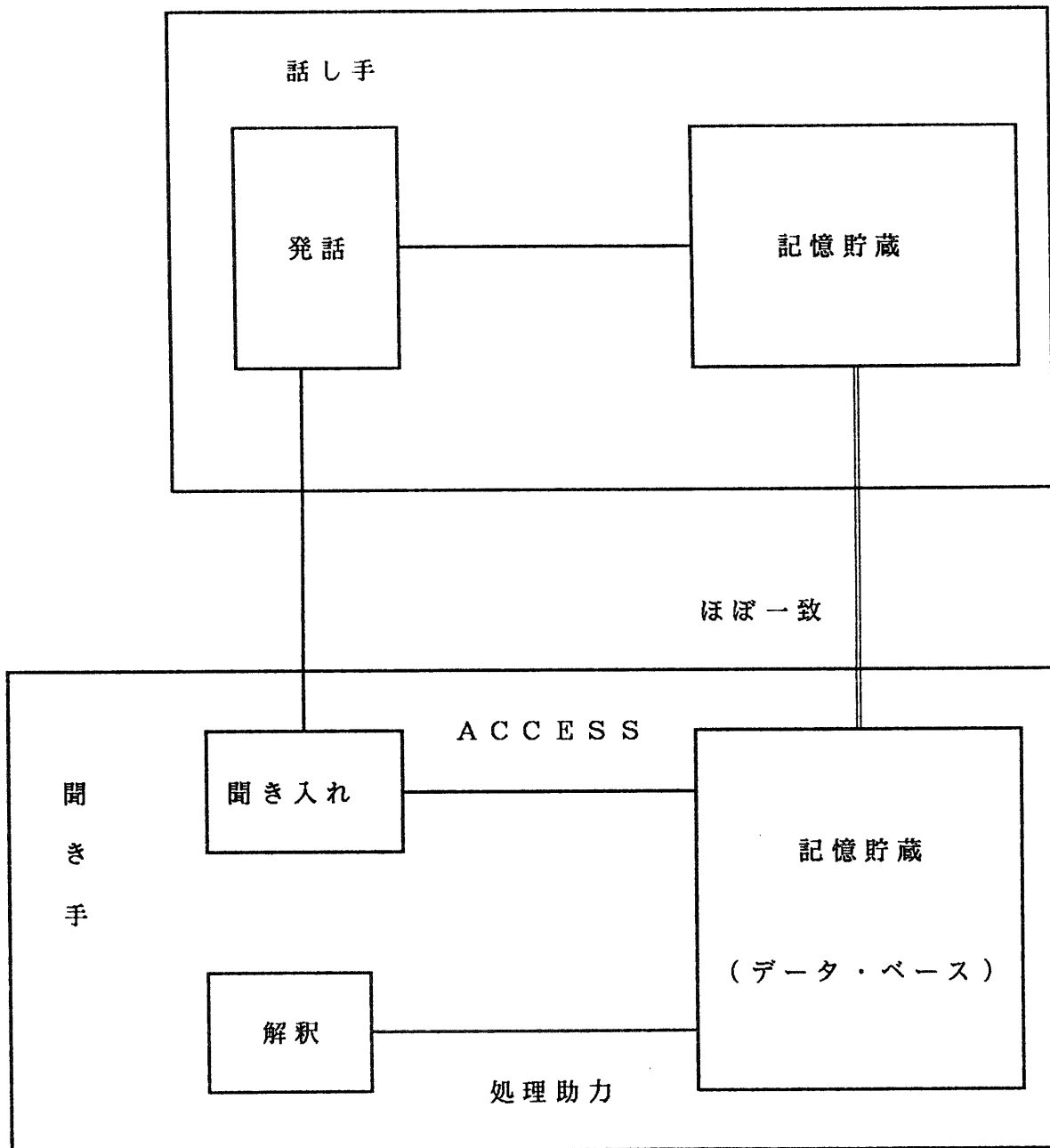


図 1 7

2. 5. 記憶と「定」か「不定」かの推論

図16で見たように、ある[ϕ NP]が「定」か「不定」かを判断するには、その状況を把握しなければならないということが分かった。特に、言語的に明確に述べられていない部分は記憶にaccessすることにより、述べられている出来事との相互関係を予測することができる。人工知能では、この推論方法が一般的によく使われている。例えば、次の話を聞かせ、

「 ϕ Johnは ϕ 昨夜 ϕ レストランに出かけ、 ϕ ステーキを注文した。 ϕ 料金を支払ったとき、 ϕ お金を使い果たしたことに ϕ 気が付いた。 ϕ 雨が降り始めたので、 ϕ 彼は急いで帰宅した。」(リッチ、1983)

昨夜 Johnが夕食を食べたかどうかを質問した場合、この話しの中では、はっきりと言っているわけではないが、「食べた」とはっきりと答えることができる。それは、「レストラン」というスクリプトを記憶し、その話しとスクリプトの流れが一致するので予測できるからである。そういう意味で直接に観察していない出来事を予測することは可能である。

類推に、その話しの中のNPが「定」か「不定」かを判断するのも役に立つ。具体的に見てみよう。

談話の相手も Johnを知っているならば、[ϕ John]という固有名詞は、固有名詞の分岐点でyes になるので「定」として判断する。

[ϕ 昨夜]は、「昨」という接頭語がついているので、限定的な接頭語の分岐点でyes になり、「その話しの前の日の夜」として解釈できるので、「定」として判断する。

[ϕ レストラン]の出現は、今までの話しの中で、どこのレストランかを予測する要素がない。図15の流れ図を通し、記憶にaccessし、レストランというスクリプト(記憶)にaccessしてから「すべてか部分か」の分

岐点で「どこかのレストラン」ということしか分からないので「部分」になり、「不定」として処理する。

「レストラン」というスクリプトの中には、さかな、肉、野菜、スープなど注文できる食事が多くある。その中の1つとしてステーキもある。ステーキは、和風、洋風、150gr.、200gr.などいくつかの種類がありうる。従って、「単数関係」の分岐点でnoになり、さらにいくつかの種類の中の一つなので「すべてか部分か」の分岐点で「部分」になるので「不定」として処理する。

もし、「定食A」を注文したならば、聞き手はレストランというスクリプトにaccessしているので、多くのレストランには定食A、定食Bのように決まった食事が準備してあるということを記憶している。例え、聞き手はどこのレストランか分からなくても、「定食A」という名前で1つの種類しかないと知っているので、「単数関係」の分岐点で「定」として処理する。

ここで重要なのは、「 ϕ ステーキ」にしても「 ϕ 定食A」にしても「定」か「不定」かを判断するには、両方の場合とも文の構造は同じなので、ゆるい基準によって（記憶にaccessすることによって）「定」か「不定」かを判断することになる。

〔 ϕ 料金〕は、必ずどこの店でも何かを注文すると、それを払うことになるという常識がある。しかし、ステーキを注文することは、MOPの理論ならば「レストラン」というスクリプトのSM (Situational Memory)に入っているが、「料金を払うこと」は、GEM (General Event Memory)に入っている。それは、レストランだけではなく、本屋、電車、映画館など多くのスクリプトに入力すると、同じ情報が重なり、効率が悪くなるからである。そして、注文したものに対して必ず1つの料金があるので、「単数関係」の分岐点で「定」として処理する。

〔 ϕ お金〕も「 ϕ 料金」と類推的に「定」として処理できる。

〔 ϕ 雨〕の場合は、「雨が降る」という大きな意味的な単位として扱うならば「定」か「不定」かを考える意味がない。しかし、もし「昨日の雨はひどかった」の雨を処理するならば、「昨日の～」という限定もあるので「定」として解釈できる。

〔 ϕ 気〕の場合も慣用句なので「1つの意味的な単位になっているか」の分岐点でyesになるので「無関係」と処理する。しかし、雨の場合と異なり、「気が付いた」の「気」を「あなたの気」、「昨日の気」などのように限定することはできない。

〔 ϕ 彼〕は、疑いなくJohnを指すので「定」と解釈できる。しかし、「定」という解釈が可能なのは「彼」が代名詞であるからという品詞上の理由だけではない。Johnが男性の名前であるということはどこにも表現していない。従って、談話レベルの照応の分岐点で「定」として処理する。

このように、具体的な名詞句が「定」か「不定」かを判断するには、言語的な判断材料もあるが、それだけでは不十分であり、なんらかの形で記憶にaccessしなければ処理できない名詞句（特に ϕ で限定されるもの）も多くある。ここでは、決して現在の人工知能という分野の知識表現、推論などについては論じないが、記憶が重要な助力になることは確かである。

3. 結論

「限定」(determination)という極めて抽象的な言語理論の問題は主に冠詞、数量詞の用法が研究の対象となるが、日本語にはヨーロッパの言語のような冠詞がないのが日本語の特色として今もって無批判に、あたかも定説のように繰り返す研究者を散見する。一般的には、「ハ」と「ガ」そして指示詞の研究に留まることが多い。しかし、日本語のような「冠詞のない言語」のあらゆる現象(限定のメカニズムについて)の説明は、特に修飾されていない名詞句の働きの研究などによって行わなければならないと思う。

本研究の主眼は、日本語の修飾されていない名詞句の意味論上の特徴から言えば、方法論的にも「 ϕ 」という限定辞に限定されていると扱った方が利点が多いので、日本語の「 ϕ 」という無形の限定辞を提案することである。

そのために、日本語の「 ϕ 」限定辞のはたらきを観察すると「限定」の基準を再び見直さなければならないことが分かる。それは、「限定」の操作は限定辞だけではなく、筆者が呼んでいる意味的な「相互限定」と共に働くので、「共同限定操作」と名付けている操作により行われるからである。

日本語の場合、意味的な「相互限定」の役割は大きいので、名詞の相互関係によって分類する必要がある。さらに、「限定」のメカニズムは名詞句内の構造だけで説明することが不可能なので、動詞、文のレベル、発話のレベルなどの意味的な特徴と語用論的な特徴を考慮に入れなければならない。

また、特に「定」と「不定」という範疇の性質のために心理学、人工知能(AI)の分野の知識を借り、記憶のメカニズムが「 ϕ 」限定辞と無関係ではないことが明らかになった。

「定」か「不定」かを判断するための基準を2つ（厳密な基準とゆるい基準）を設けたが、両方の基準とも言語形式に依存しない。両方の基準とも心理的な要素が多い。また、設けた基準は日本語だけではなく、具体的な言語の構造に依存しない普遍的な基準である。

具体的な名詞句の「定」か「不定」かの解釈は記憶のメカニズムと深く関わっているので、判断するには記憶（知識）のデータ・ベースとの関わりが重要である。そのために、自然言語の解釈には記憶の内容と名詞のあらゆる特徴を取り入れなければならない。しかし、これは今後の課題でもあるが、純粋に言語学の方法だけで解決するのは不可能なので学際的な課題でもある。

また、この「定」と「不定」の研究は日本語に限らず、他言語の同類の現象（冠詞不在）を理論的に説明するのにも役立つと思う。

あとがき

この論文は、「限定」とは何かを追求するように寺村秀夫教授のご指導と励ましを受け、書きはじめたものであるが、寺村教授が大阪大学に移られ、1987年の春からは草薙裕教授のご指導を受けた。

この論文の制作過程において、両教授は、私の未熟な日本語で書いた論文を、何回も丁寧にお読みくださり、細かいご指摘や、多くのご助言をくださったことに対して敬意と感謝の意にたえない。

また、中右実教授、松本克己教授、北原保雄教授からも大変参考になるご意見を受けることができたことも幸運である。各教授にも深く謝意を表したい。

また、筑波大学の文芸・言語研究科の院生のみなさんとのディスカッションからも多くのヒントを得ることができた。これらすべての方方のご協力とご助力に対し、ここに心からお礼を申し上げるしだいである。

文 献

- Abad Nebot, Francisco (1977): El Artículo - Sistema y Usos , Ediciones Aravaca, S.A. Madrid.
- Alvar Ezquerro, Manuel (1979): "El determinante", Lingüística Española Actual I/1-1979, p.31-66.
- Amado, Alonso (1951): "Estilística y Gramática del Artículo en Español", en Estudios Lingüísticos", Gredos, p. 151-194.
- Anderson, J. R. and Bower, G. H.(1973): Human Associative Memory , Washington, D. C.: V. H. Winston & Sons.
- Atkinson, R. C. and Shiffrin, R. M. (1968): "Human Memory: a proposed system and its control processes", in K. W. Spence and J. T. Spence (eds., 1967): The psychology of learning and motivation, II , New York, Academic Press.
- Ayer, A. J.(1936): Language, Truth and Logic , London, Gollancz.
- Bailly, A. (1968): Grammaire Générale et Raisonnée de Port-Royal Genève. 南館英考訳 (1972) : 『ポール・ロワイヤル文法』大修館書店。
- Bally, Charles (1965): Linguistique Générale et Linguistique Française , Bern. 小林英夫訳『一般言語学とフランス言語学』岩波書店、1970.
- Barclay, J. R., Bransford, J. D., Franks, J.J., McCarrell, N. S. and Nitsch, K. (1974) : "Comprehension and semantic flexibility", Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior 13, p. 471-481.
- Black, Max (1949): Language and Philosophy - Studies in Method , Cornell University Press, Ithaca and London.

- Bühler, Karl (1965): Sprachtheorie 2.A. , Gustav Fischer Verlag, Stuttgart. スペイン語訳 : Marias, Julián (1979): Teoría del Lenguaje , Alianza Editorial, Madrid.
-
- Chafe, Wallace L. (1970): Meaning and the Structure of Language , The University of Chicago Press.
- Christensen, N. E. (1961): On the Nature of Meanings. A Philosophical Analysis , Munksgaard, Copenhagen.
- Christophersen, Paul (1939): The Articles - A Study of Their Theory and Use in English . Copenhagen, Munksgaard and London, Oxford University Press.
- Cliff, N. (1959): "Adverbs as multipliers", Psychological Review, 66, p. 27-44.
- Collins, A. M. and Quillian, M. R. (1969): "Retrieval time from semantic memory", Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 9:432-438.
- Collinson, W.E. (1937): "Indication: a study of demonstratives, articles and other "indicators"", Language Monograph Series 17.
- Contreras, Heles (1968): "The Determiner in Spanish", Linguistics, 44, p. 22-28.
- Coseriu, Eugenio (1955): "El plural en los nombres propios", Revista Brasileira de Filologia, I, Rio de Janeiro, p. 1-15., en Teoría del Lenguaje y Lingüística General - Cinco Estudios , Tercera Edición Revisada y Corregida, 1978, Gredos, B.R.H., p. 261-281.
- Coseriu, Eugenio (1955-56) : "Determinación y Entorno. Dos problemas de una Lingüística del Hablar", Romanistisches

- Jahrbuch, VII(1955-56), p. 29-54. En Teoría del Lenguaje y Lingüística General - Cinco Estudios , Tercera Edición Revisada y Corregida, 1978, Gredos, B.R.H., p. 282-323.
- 下宮忠雄訳 (1983) : 『限定と周辺領域 - 話の言語学の2つの問題 - 』、「コセリウ言語学選集4」、三修社、p. 79-121.
- Ducrot, O. (1970): "Les indéfinis et l'énonciation", Langages, 17 (mars, 1970), p. 91-111.
- Engelkamp, Johannes (1974): Psycholinguistik , München.スペイン語訳 : Rubio Sáez, José: Psicolingüística , 1981, Gredos.
- Ertel, S. (1975): "Where do the subjects of sentences come from?", Paper to be read at places in USA and Poland, Gotinga. In Hörmann, H. (1976).
- Fauconnier, Gilles (1974): La coréférence - Syntaxe ou Sémantique , Éditions du Seuil.
- Firbas, Jan (1966): "Non-thematic Subjects in English", TLP 2, Prague.
- Feyerabend, Paul (1975): Against Method , New Left Books, London.
- Giry-Schneider, Jacqueline (1978): Les nominalizations en français , Librairie Droz.
- Grasserie, Raoul de la (1896): "De l'article", Mémoires de la Société de Linguistique de Paris IX.
- Haug, U. & Rammer, G. (1974): Sprachpsychologie und Theorie der Verständigung , Pädagogischer Verlag Schwann, Düsseldorf.
- Hawkins, John A. (1978) : Definiteness and Indefiniteness - A Study in Reference and Grammaticality Prediction , Croom Helm, London.
- Hebb, D. O. (1949): Organization of Behavior , New York, Wiley.

- Hempel, Carl G. (1966): Philosophy of Natural Science , Prentice-Hall Inc., Englewood Cliffs, New Jersey.
- Hintikka, Jaako (1973): Logic, Language-Games and Information , The Clarendon Press, Oxford.
- Hörmann, Hans (1967): Psychologie der Sprache , Springer Verlag, Berlin - Heidelberg. スペイン語訳: Lopez B., Antonio: Psicología del Lenguaje , Gredos, 1973.
- Hörmann, Hans (1983): "On the Difficulties of Using the Concept of Dictionary - and the Impossibility of Not Using it", in Gert Rickheit and Michael Bock (ed.) Psycholinguistic studies in language processing , de Gruyter.
- 池内正幸 (1985) : 『名詞句の限定表現』、〈新英文法選書6〉、大修館書店、東京。
- Il'jiš, B.A. (1948): Sovremennyj anglijskij jazyk , 2nd. ed. Moskva.
- 井上和子 (1979) : 『古い情報・新しい情報』、「言語」Vol. 8 No. 10 p. 27-33.
- James, W. (1890): Principles of Psychology , Holt, New York.
- Jespersen, Otto (1949): A Modern English Grammar on Historical Principles , Vol VII .
- 金口儀明 (1970) : 『英語冠詞活用辞典』、大修館書店。
- Kanousse, D.E. (1972): "Verbs as implicit quantifiers", Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 11, p. 141-147.
- Keenan, Edward L. (ed.)(1975): Formal Semantics of Natural Language , Cambridge University Press.
- Kendler, T.S. (1961): "Concept Formation", Annual Revue of Psychology, pp. 447-472.

- Kitagawa, Chisato (1982): "Topic constructions in Japanese", Lingua 57, North-Holland, p. 175-214.
- 北原保雄他 (1981) : 『日本文法辞典』、有精堂
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル (1964) : 『語彙教育 その内容と方法』、麥書房。
- Krámský, Jiří (1972): The Article and the Concept of Definiteness in Language , Mouton.
- Kuhn, Thomas (1970): The Structure of Scientific Revolutions , Univ. of Chicago Press.
- 熊山昌久 (1985) : 『用例中心 英語冠詞用法辞典』、大修館書店。
- 國廣哲彌 (1980) : 『日英語比較講座』第2巻、文法、p. 15-17.
- 久野章 (1973) : 『日本文法研究』、大修館書店。
- 久野章 (1978) : 『談話の文法』、大修館書店。
- 草薙裕 (1983) : 『コンピュータ言語学入門』、大修館書店。
- 草薙裕 (1984) : 『パーソナル・コンピュータによる自然言語処理』、工学図書。
- Lakoff, George (1973): "Fuzzy Grammar and the competence/performance terminology game", in Papers from the Ninth Regional Meeting, C. Corum, T. Smith and A. Weiser(eds.), Chicago Linguistic Society, p. 271-291.
- Lakoff, George (1975): "Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts", in D. Hockney et al.(eds.), Contemporary Research in Philosophical Logic and Linguistic Semantics, Dordrecht, D. Reidel P.C. p. 221-ss.
- Lapesa, Rafael (1974): "El sustantivo sin actualizador en español" en Estudios filológicos y lingüísticos. Homenaje a A. Rosenblat en sus 70 años , Instituto Pedagógico, Caracas, p.

289-304.

- Lewis S. Josephs (1976): "Complementation" in Syntax and Semantics Vol. 5, Japanese Generative Grammar, ed. Masayoshi Shibatani, Academic Press, p. 353-364.
- Li, Charles N. (ed.)(1976): Subject and Topic , Academic Press, New York.
- Lyons, John (1968): An Introduction to Theoretical Linguistics , Cambridge Univ. Press.和訳：國廣哲彌（1973）：『理論言語学』大修館書店。
- Lyons, John (1977): Semantics , Cambridge Univ. Press.
- Makino, Seiichi (1968): Some Aspects of Japanese Nominalizations , Tokai University Press.
- Martinet, André (1969): La linguistique: Guide alphabétique , Edition Denöel 三宅徳嘉監訳：『言語学辞典』、1972、大修館書店。
- Mathesius, Vilém (1961): Obsahový rozbor současné angličtiny na zaklade obečne lingvistickén (A Functional Analysis of Present-Day English on a General Linguistic Basic), Praha.
- 松原秀治（1978）：『フランス語の冠詞』、白水社。
- Miller, G. A. (1951): Language and Communication , McGraw-Hill Book Company, New York.
- 南不二男（1974）：『現代日本語の構造』、大修館書店。
- 毛利可信（1978）：『意味の不確定性』（意味論から語用論へ）、言語 Vol. 7 No. 12, p. 38-46.
- 毛利可信（1982）：『談話構造』、言語、Vol. 11. No. 12, p. 80-84.
- Nakau, Minoru (1973): Sentential complementation in Japanese , Kaitakusha, Tokyo.

- Osgood, C.E. (1957): "A Behavioristic Analysis of Perception and Language as Cognitive Phenomena", in Contemporary Approaches to Cognition , Harvard University Press.
- Paivio, A.(1969): "Mental imagery in associative learning and memory", in Psychol. Rev. p. 241-263.
- Patee, Joseph (1986): "L'article zéro: un signifié zéro?" Modèles linguistiques, Tome VIII Fascicule 2.
- Pikas, Anatole (1966): Abstraction and concept formation , Harvard University Press.
- Popper, Karl R. (1934): The Logic of Scientific Discovery , Hutchinson & Co. Ltd., London.
- Pottier, Bernard (1964): "Vers une sémantique moderne", Travaux de Linguistique et de Littérature, II. Strasbourg.
- Pottier, Bernard (1976): Sémantique et Logique , Editions Universitaires.
- Quillian, M. R. (1967): "Semantic Memory", in Minsky (eds., 1968): Semantic Information Processing , Cambridge, Mass., M.I.T., pp. 227-270.
- Quillian, M. R. (1969): "The teachable language Comprehender: A simulation program and theory of language", Communication Assm. Comp. Mach., 12, pp. 459-476.
- Raskin, Victor (1980): "Determination with and without Articles", in The Semantics of Determiners , edited by Johan Van der Auwera, Crom Helm London, University Park Press Baltimore.
- Reeves Milton, George (1977): A Learner's Synopsis of English Article Usage , Unpublished Ph. D. Dissertation, New York University.

- リッチ、E. (1983) : 「人工知能 I」、マクロヒル、東京。和訳：廣田
薫、宮村勲。
- Ruiz Tinoco, Antonio (1983): 「日本語の『限定』—統語論と意味論の
接触」、東京外国語大学学士論文。
- Ruiz Tinoco, Antonio (1985a): 「『言語概念』と『限定』」筑波大学
大学院博士課程文芸・言語研究科中間論文。
- Ruiz Tinoco, Antonio (1985b): 「言語記号は『概念』を表わしている
のか」、言語学論叢、林四郎教授退官記念号、筑波大学一般・応
用言語学研究室。
- Ruiz Tinoco, Antonio (1986): 「日本語の『 ϕ 』という限定辞」、言語
学論叢、筑波大学一般・応用言語学研究室。
- Ruiz Tinoco, Antonio (1987): 『スペイン語の冠詞の教授法について』、
慶応義塾大学、語学視聴覚教育研究室『紀要20』
- Rumelhart, D. E., Lindsay, P. H. and Norman, D. A. (1972): "A pro-
cess model for long-term memory". In E. Tulving and W. Do-
naldson (eds.)(1972): Organization of Memory , New York,
Academic Press, pp. 198-246.
- Schank, Roger C. (1968): A notion of linguistic concept , Stand-
ford University, Computer Science Dept., A.I. Memo 75.
- Schank, Roger C. (1972): "Conceptual Dependency: A theory of Natu-
ral Language Understanding", Cognitive Psychology, 3, pp.
552-631.
- Schank, Roger C. (1975): Conceptual Information Processing ,
North Holland, Amsterdam.
- Schank, Roger C. (1982): Reading and Understanding: Teaching from
the Perspective of Artificial Intelligence , Lawrence Erl-
baum Associates, Publishers, Hillsdale, New Jersey.

- Schank, Roger C. (1986): "Language and Memory", in Readings in Natural Language Processing , Edited by Barbara J. Grosz, Karen Sparck Jones, Bonnie Lynn Webber. Morgan Kaufmann Publishers, Inc. Los Altos, Cal.
- Schank, Roger C., Abelson, Robert P. (1977): Scripts, Plans, Goals and Understanding. An Inquiry into Human Knowledge Structures , Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, Hillsdale, New Jersey.
- Schwartz, David S. (1979): Naming and Referring - The Semantics and Pragmatics of Singular Terms , Walter de Gruyter.
- 下宮忠雄 (1980) : 『日本語に冠詞や複数形ができるか』、言語、Vol. 9 No. 1, p. 48-53.
- Slobin, D. I. (1971): Psycholinguistics , Scott, Foresman and Co. Glenview, Illinois.
- Smith, Steven B. (1974): Meaning and Negation , Mouton.
- Smith, E. E., Rips, J. L. and Shoben, E. J. (1974): "Semantic memory and psychological semantics", in Bower, G. H. (eds.) (1974): The psychology of learning and motivation VIII , New York, Academic Press.
- Sørensen Holger Steen (1958): Word-Classes in Modern English with special reference to proper names: with an introductory theory of grammar, meaning and reference , Copenhagen.
- Strawson, P. F. (1971): Logico-Linguistic Papers , Methuen and Co. Ltd. London.
- Talmy Givón (1978): "Definiteness and Referentiality", in Joseph H. Greenberg, Universals of Human Language , Stanford University Press.

- 田中望・正保勇（1980）：『日本語の指示詞』、日本語教育指導参考書8，
国立国語研究所。
- 寺村秀夫（1980）：『名詞修飾の比較』、「日英語比較講座」第2巻、文
法、p. 221-266.
- Thomson, Robert (1959): The Psychology of Thinking , Penguin
Books.
- Thrane, Torben (1980): Referential-Semantic Analysis. Aspects of
a Theory of Linguistic Reference , Cambridge University
Press.
- Tulving, E. (1972): "Episodic and semantic memory", in Tulving and
W. Donaldson (eds.)(1972): Organization of Memory , New
York, Academic Press, pp. 381-403.
- Ulmann, Stephen (1962): Semantics , Basil Blackwell, London.
- Van der Auwera, Johan (ed.)(1980): The Semantics of Determiners ,
Crom Helm London, University Park Press, Baltimore.
- Van Langendonck, Willy (1980): "Indefinites, Exemplars and Kinds",
in The Semantics of Determiners , edited by Johan Van der
Auwera, Crom Helm London, University Park Press Baltimore.
- Waismann, F. (1965): The Principles of Linguistic Philosophy ,
Mac Millan, London.
- Wandruszka, Mario (1969): Sprachen-Vergleichbar und Unvergleich-
lich , R. Piper & Co. Verlag, München. 西訳：Bombín, Elena
(1976): Nuestros idiomas: comparables e incomparables ,
Gredos, B.R.H., Madrid.
- Wartofsky, Marx W. (1968): Conceptual Foundations of Scientific
Thought: An Introduction to the Philosophy of Science ,
Macmillan. New York.

Waugh, N. C. and Norman, D. A. (1965): "Primary Memory", Psychological Review 72:89-104.

Winograd, T. (1972): Understanding Natural Language, Edinburgh University Press.

Werth, Paul (1980): "Articles of Association: Determiners and Context", in The Semantics of Determiners, edited by Johan Van der Auwera, Crom Helm London, University Park Press Baltimore.

安井稔編 (1982) : 『新言語学辞典』 (改訂増補版) 研究社。

Yotsukura, Sayo (1970): The Articles in English - A Structural Analysis of Usage, Mouton.

Zadeh, Lofti (1965): "Fuzzy Sets", Information and Control 8, p. 338-ss.

Zierer, Ernesto (1972): Formal Logic, Mouton.